

東京大学大学院新領域創成科学研究科

社会文化環境学専攻

2017 年度

修 士 論 文

地域への〈責任〉意識が導く「当たり前」の「拡張」

—大槌町吉里吉里地区の震災復興に関する考察—

Consideration of revitalization in Kirikiri  
led by residents expanding their roles on the basis of “engagement”

2018 年 1 月 22 日提出

指導教員 清水 亮 准教授

湯 本 真 知

Yumoto, Machi

## 目次

目次.....	1
序 問題の所在 .....	3
1. 研究の背景 —地域住民中心の復興への注目— .....	3
2. 先行研究等 .....	3
2-1. 「復興」とは何か.....	4
2-2. 東日本大震災における復興とコミュニティ .....	6
2-3. 東日本大震災後の「住民参加」のまちづくり .....	7
3. 研究の目的及び本稿の構成.....	7
4. 研究手法.....	8
I 研究対象地の概要.....	10
1. 対象地選択の背景 .....	10
2. 大槌町及び吉里吉里地区に関する概要.....	12
3. 吉里吉里地区に関する研究史の整理 .....	17
4. 東日本大震災における大槌町及び吉里吉里地区の被災状況.....	18
5. 吉里吉里地区における復興まちづくり施策の過程 .....	21
II 事例紹介 吉里吉里地区で行われた復興のありかた.....	27
1. 地縁的なつながりに依拠した復興のありかた.....	27
1-1. 震災前の吉里吉里地区における自治組織.....	27
1-2. 震災後の変容及び対応～緊急・救援期（避難所運営時期）～ .....	31
1-3. 震災後の変容及び対応～復旧期以降～ .....	34
1-4. 自治組織をめぐる今後の展望.....	36
1-5. 小括 「流動的補完性」をもつ地域的結合 .....	38
2. 震災後の新たなく必要（ニーズ）>に応答する復興のありかた.....	39
2-1. 旧来の地縁的なつながりを活かした活動を立ち上げた例 .....	39
2-2. 旧来の地縁組織に拠らない新たな組織を立ち上げた例.....	42
2-3. 小括 住民自身によるく必要（ニーズ）>の発見と継続的な応答.....	47
III 考察 —「当たり前」を軸に—.....	49
1. 「当たり前」を「拡張」する住民のありかた .....	49
1-1. 「当たり前」のことを「当たり前」にする住民.....	49
1-2. 住民にとっての「当たり前」の営みとは何であったのか .....	51
1-3. 「当たり前」の営みの質的転換 .....	55
2. なぜ吉里吉里の人々は「当たり前」を「拡張」できたのか.....	58
2-1. ～通時的背景～ 「当たり前」が存在しているということ.....	59
2-2. ～共時的背景～ 地域における役割意識がもたらすく責任 engagement>... 65	65

IV 「復興」の再定義及び今後の展望.....	72
1. 吉里吉里地区における主体的な「復興」とは.....	72
1-1. 吉里吉里地区における「復興」とは何か　－「当たり前」と「復興」の関わり－ .....	72
1-2. 吉里吉里地区における主体性とは何か　－個の「当たり前」から地域の「当たり前」へ－ .....	74
2. 今後の展望　－吉里吉里の主体性は継続し得るか－.....	78
3. 他地域及び将来の災害時への展開可能性について.....	81
参考資料.....	83
東日本大震災被災県におけるボランティア数推移（3 県及び岩手県）.....	83
大槌町における東日本大震災前後の漁業従事者数.....	84
大槌町の男女年齢別人口（平成 27 年度）.....	85
大槌町の震災前後の世帯数変化（平成 22 年及び平成 27 年度）.....	86
吉里吉里地区人口及び世帯数推移.....	86
大槌町民及び大槌町内事業者における男女 15 歳以上の就業者人数（平成 27 年度）.....	87
大槌町における昼夜間人口及び従業・通学地（平成 27 年度）.....	88
大槌町の有史における主な地震・災害被害のまとめ.....	89
本稿に引用したヒアリング対象者の属性.....	93
吉里吉里、大槌におけるフィールドワーク等の記録.....	94
参考文献.....	97
行政関係資料及び地域住民作成資料等.....	97
論文・書籍等.....	99
その他 Web ページ及び新聞記事等.....	102
謝辞.....	103

## 序 問題の所在

### 1. 研究の背景 ー地域住民中心の復興への注目ー

東日本大震災から7年弱が経過した。広範な被災地では、各々の地域で復旧・復興が進められている。現在すでに街並みの再建が完了し、ハード面では、一見ただけでは震災があったことにすら気付かないような復旧・復興を遂げている地域もあれば、未だに嵩上げ工事が行われており、街並みの再建に到達しない地域も散見される。また、ハード面の復旧・復興如何に関わらず、ソフト面では至る所で様々な問題が表出し、震災からの復旧・復興を達成したとは言い難い現状がある。

しかしながら、震災からの時間の経過とともに、被災3県における外部支援者の数は激減しており、岩手県の災害ボランティアセンターで受け付けたボランティア活動者数は、2017年1月に初めて2,000名を下回った(全社協 2017)。被災地では、とりわけ、まちづくり活動やコミュニティ支援といった長期間地域と付き合う必要のある分野のボランティア人材が不足しているという報道もなされている(『毎日新聞』 2017年2月20日配信)。

一方で、行政の側からは、震災後の居住区域(仮設住宅や災害公営住宅など)におけるコミュニティ形成を支援するような、行政主導で地域のコミュニティづくりを進める施策(復興庁 2015a 等)がありとあらゆる自治体で進められている。また、将来の災害に備え、自主組織の結成を求める施策(内閣府 2017<sup>1</sup>)も行われるなど、地域住民自らが中心となって復興を進めていくことに対する関心が高まっている。

このように、地域でコミュニティを作り、それらを基盤として復興や防災を進めていこうという機運が高まっているが、実際には、先述の記事にあるように、まちづくり活動やコミュニティ支援の分野でボランティアが必要とされている。このことから、地域住民のつながり<sup>2</sup>をまちづくりや被災地における日常生活、ひいては将来の防災において実効性のあるものにしていくのは非常に難しいということの一端が窺える。

### 2. 先行研究等

被災した地域において、地域住民のつながりを作り(または活かし)、それに依拠した日常生活の復興や復興まちづくりを進めていくにあたって、これまでどのような取り組みがなされてきたのかについて、以下に整理する。

---

<sup>1</sup> 東日本大震災の後、更に熊本地震を経て出された「防災白書」では、「自助・共助の推進」が提言として挙げられている。

<sup>2</sup> ここで「地域住民のつながり」と呼んでいるものは、総務省の「地域コミュニティ」の概念を踏まえ、浦田・安田(2012)が行った「共通の生活地域(通勤地域、勤務地域を含む)の集団によるコミュニティ」という位置づけを想定している。なお、これには公民館や町内会、自治会といった地縁団体はもちろん、地域を基盤として特定の目的に応じて集まったアソシエーション(機能団体)も含まれている。なお、本稿の後の部分で使用する「地縁的なつながり」は、上記の「地域住民のつながり」から機能団体を除いた地縁団体を指している。

## 2-1. 「復興」とは何か

被災地域におけるコミュニティのありかたを考えるに際し、そもそも「復興」とは何であるのか、という議論を避けては通れないであろう。本項ではまず、「復興」に関する研究史を整理する。

「復興」は、新明解国語辞典〔第四版〕では「一度衰えたものを、もう一度盛んにすること」と定義されており、他の辞書でもこれに類する定義がなされている。「復興」は、一般的に耳に馴染みのある言葉であるのみならず、行政機関の施策や学術研究においても幅広く使用されてきた。たとえば、東日本大震災を受けて平成 24 (2012) 年 2 月 10 日に設立された「復興庁」は、「一刻も早い復興を成し遂げられるよう、被災地に寄り添いながら、前例にとらわれず、果断に復興事業を実施するための組織として、内閣に設置された組織」であり、「(1) 復興に関する国の施策の企画、調整及び実施、(2) 地方公共団体への一元的な窓口と支援等」を担うとされる(復興庁<sup>3</sup>、註：下線部筆者)。復興庁では、震災後の平成 23 (2011) 年から 27 (2015) 年までを「集中復興期間」とし、その後、平成 28 (2016) 年から 32 (2020) 年までを「復興・創成期間」と呼んでいる(復興庁 2015b)。

また、学術研究では、都度定義がなされるが、たとえば似田貝 (2008a) は、復興段階について救済、生活支援、復旧、復興、社会再生の各段階を想定している。いずれにしても、時間の経過とともに、被災者が置かれる状況や、求められる施策や支援の内容は変化する。このように、「復興」という言葉は様々な文脈で用いられ、個別の事業から災害からの立ち直りの過程そのものまでを広く指してきた。

本稿での「復興」に関する立場を明らかにするにあたり、「復興」という概念が東日本大震災より前に用いられてきたプロセスについてここで整理する。

小泉 (2015<sup>4</sup>) によれば、「復興」という言葉が災害からの復旧対応や都市建設を指すという文脈で使用されているのは、大正 12 (1923) 年の関東大震災以降であるとみられる。このとき、「復興」は単に基盤整備のみを重点的に行うことを指していたわけではなかったようであるが、結果として、国が行った復興事業の中心は土地区画整理事業であり、復興＝土地区画整理事業の実施という構図が形成され始めたと考えられる (p.161)。

一方、このような都市計画に偏重した政府の「復興」のありかたに疑問を呈したのが、経済学者の福田徳三である。福田は、大正 12 (1923) 年に掲載された論文「営生機会の復興を急げ<sup>5</sup>」のなかで、「私は復興事業の第一は、人間の復興でなければならないと主張する。人間の復興とは、大災によって破壊せられた生存の機会の復興を意味する。今日の人間は、生存するために、生活し営業し労働せねばならぬ。すなわち生存機会の復興は、生活、営業及び労働機会—これを総称して営生の機会 エルヴェルプスゲレーゲンハイト

<sup>3</sup> 「復興庁の役割」(2018年1月6日取得、<http://www.reconstruction.go.jp/topics/main-cat12/yakuwari.html>)。

<sup>4</sup> 似田貝香門・吉原直樹編『震災と市民 I 連帯経済とコミュニティ再生』第8章。

<sup>5</sup> 大正12年10月15～24日『報知新聞』掲載。なお本稿における引用は、福田徳三研究会(2016)『福田徳三著作集 第十七巻 復興経済の原理及び若干問題』信山社による。

〔Erwerbsgelegenheit〕という一の復興を意味する。道路や建物は、この営生の機会を維持し擁護する道具立てに過ぎない。それらを復興しても、本体たり実質たる営生の機会が復興せられなければ何にもならないのである」(p.103 註:ハイフン及び下線部筆者)と述べる。このように、福田は「人間の復興」を重視する。「復興」とは単なる「旧状恢復」である復旧とは異なり、「なんらかの改善、改良の復案が立てられ、実現される」(「欧州の戦後経済と日本の復興経済」<sup>6</sup>より)ものでなければならないという。そして、この「復興」を実現するために必要とされる支出は、「不生産的支出」ではなく、「生産的支出」である<sup>7</sup>と主張する<sup>8</sup>。

その後も我が国では、多数の災害が発生した。大きな地震災害だけでも複数回起こっているが、災害復興を考えるうえで大きな転換点となったのが、平成7(1995)年に発生した阪神・淡路大震災であると言えよう。前掲の小泉(2015)によれば、阪神・淡路大震災では、それまでの土地区画整理事業の実施に偏重した震災復興の考え方とは異なり、「住民主体のまちづくり」が主流の方式となった。これは、神戸市などにおいて住民が主体となった協議会方式のまちづくりが被災前から定着していたことがその背景にある。様々な問題や批判はあったにせよ、各復興事業区域において、公園や緑道、区画街路などの地区レベルの施設が住民参加のもと整備された。一方、仮設住宅団地が既成市街地から遠方の丘陵地帯に整備されたり、抽選方式で入居が決まったりしたため、それまでの地縁型コミュニティについては継続が難しく、新たなコミュニティを再編せざるを得なくなった。また、一旦再編したコミュニティも、復興公営住宅への入居時に再度分断されることとなった。このような背景があり、同震災では「孤独死」及び「孤独な生」の問題が大きくクローズアップされた(西山2008等)。先述の、似田貝がいう「社会再生段階」までを見据えて復興を捉え支援を行っていく必要性が、現実の社会問題を通して浮き彫りとなったのが同震災であったといえよう。

過疎化の進む中山間地域を襲った平成16(2004)年の新潟県中越地震では、阪神・淡路大震災の教訓を活かし、従来の地縁的なつながりに依拠した自発的な避難所運営が行われたことに加え、集落単位での移転が試みられるなど、従来の地縁的なつながりを活かした復興政策が目指されるようになった。元々地縁的なつながりの強い地域で起こった災害だったため、こうした復興政策が上手く機能した側面があった一方で、被災者生活再建支援制度が複雑で被災者にとって使いづらいものであったという点や、ある自治体では、地震から3年経った時点でも多くの被災者が復興を実感できていないという点も明らかになった(松井2008)。

---

<sup>6</sup> 大正12(1923)年11月『我観』掲載。この論文も福田徳三研究会の前掲書(2016)に依拠している。

<sup>7</sup> 福田徳三研究会前掲書(2016)の「解題」において、清野幾久子は、「不生産的支出」を「無駄な出費」、「生産的支出」を「将来に役立つ支出」と注釈付けしている(p.229)。

<sup>8</sup> 福田はその後掲載された複数の論文で、失業や火災保険等を事例に、彼の主張する「人間の復興」のための公的支出が、社会経済的な観点から見ても「生産的支出」であるということを証明していく。

このように、ひとえに「復興」と言っても、一意に定めることは難しい。現に、東日本大震災に関する文献でも、論者がそれぞれに定義し論を展開している。ただし、関東大震災、阪神・淡路大震災や新潟県中越地震の経験を踏まえると、「復興」とは、単なる都市の基盤整備や緊急時の支援に止まらず、長期的な視野かつコミュニティなどの社会問題までを含めた概念として捉えられるべきであろう。そこで本稿では、ひとまず東日本大震災からの「復興」を、単発の事業の総称としてではなく、「災害直後やハード事業の復旧のみならず、社会再生段階までを含んだプロセス」であるとし、少なくとも2018年1月段階では現在進行形の営為であるという立場に立ち、以後の論を進める。

## 2-2. 東日本大震災における復興とコミュニティ

三陸沿岸の過疎地域が大きな被害を受けた東日本大震災においても、前項で整理したようなこれまでの災害経験による知見の蓄積を踏まえ、「社会再生段階」までを見据えた復興施策が進められることとなった。とりわけ、阪神・淡路大震災や新潟県中越地震を経たことで、仮設住宅や復興住宅における「コミュニティ」が重視され、元々の地縁的なつながりを活かしながら、旧地区単位での仮設住宅入居や、仮設住宅におけるコミュニティ作り等の試みがなされた（新井ほか 2015 等）。

ただし、仮設住宅や復興住宅への入居は原則として抽選で進められたために、重要性が唱えられながら、地縁的なつながりに十分に配慮するのは困難である例（深井ほか 2012）や、旧地区単位の入居に配慮していても、特定の地区からの入居者が少なかったために、結局のところ「コミュニティ」が維持されなかったという例の報告（新井ほか 2015）もなされている。また、津波が地区を根こそぎ破壊したことによって、従来の地縁的なつながりに基づく地域運営の仕組みを維持することが困難になる地域も現れた（佐々木ほか 2013）。

これらの背景を踏まえ、行政主導で仮設住宅に支援員を配置したり、行政や外部支援者主導で復興住宅におけるコミュニティ形成プロジェクトを行ったり（釜石市 2015 等）、コミュニティスペースを創出したりするなど、新たな地縁的なつながりを創ろうとする動きも散見されている。しかしこれらについても、震災からの復興を目指すプロセスの中で置かれている状況は変容し、活動の継続や代替手段の構築のための対策が求められている（後藤ほか 2015 等）。

また、避難所、仮設住宅や復興住宅単位での入居時及び住宅内でのコミュニティ作りに関する研究の蓄積はなされているものの、地域全体の地縁的なつながり及び地縁的なつながりに依拠した地域運営の維持、または再生について長期的な視野で捉えた研究は、現時点では十分になされているとは言えない。これらの避難所、仮設住宅、復興住宅といった震災を機に生まれざるを得なかった新たなコミュニティは、本来であれば一つの地域の中で連続的に存在しているものはずであるのに、個々の避難所、仮設住宅、復興住宅等に関する事例研究が多数見られるにとどまっている。

### 2-3. 東日本大震災後の「住民参加」のまちづくり

先述のように、「社会再生段階」までを見越した復興が重視されるなかで、阪神・淡路大震災以来の「住民主体のまちづくり」についても重要性が謳われ、行政や外部支援者が主導しながら、住民参加型でまちづくりを考える施策が数多くの自治体や地域で行われてきた。具体的には、街並み再建、自主防災計画策定など、様々なテーマのワークショップが開催され、その都度提案がなされてきた。

都市計画や建築、防災といった、直接的にハード事業の街並み再建や災害対策に関連する分野のみならず、社会学の立場からも、そのようなワークショップを運営する立場として関わる事例が多数報告されている。各々の自治体や地域で行われてきた復興まちづくりに関するワークショップ等の活動それ自体に関して、実施過程や成果を記述する論文は枚挙にいとまがない（園田ほか 2013 等）<sup>9</sup>。

しかし、それらのワークショップ等がどのように実際の計画に活かされてきたのかという点の検証や、実際に復興まちづくりが進みつつある現在の「被災地」において、住民がいかに「地域」とかかわりながら生活を営んでいるのかという点に対する社会学的視点からの記述は、未だ十分な蓄積がなされているとは言い難い。

### 3. 研究の目的及び本稿の構成

前節で述べた通り、本稿では東日本大震災からの「復興」を、単発の事業の総称としてではなく、「災害直後やハード事業の復旧のみならず、社会再生段階までを含んだプロセス」であると、少なくとも平成 30 (2018) 年 1 月段階では現在進行形の営為であると捉える。また、これまでの研究では、復興まちづくりに関連してコミュニティを検討する際に、避難所、仮設住宅や復興住宅単位での入居、まちづくり、などとそれぞれが別個のものとして捉えられてきたが、本来であればそれらは一つの地域のなかに存在するものであり、一定の地域全体として復興まちづくりを位置づける視点が必要であるという立場をとる。

また、第 1 節で述べた背景を踏まえ、本研究では、震災以前から地域住民のつながりが強く、そのつながりが震災後の地域の「復興」に活着していると考えられる地域に着目する。

そのうえで、本稿の目的を以下のように定める。

- (1) 震災によって大きな被害を受けても、地域住民自身が担い手となって復興まちづくりを進めていこうとする地域において、その住民を支えている地域の仕組みそのものや、その仕組みを成り立たせうる地域住民の思想を明らかにしていく。また、その思想が如何にして地域の中で成り立ちうるのかについても考察を行う。
- (2) 上記 (1) で明らかにした地域住民自身を支える思想が、これまで様々な定義されてき

---

<sup>9</sup> 例えば本稿が対象とする大槌町吉里吉里地区でも、中井 (2014) が「大槌デザイン会議」の試みについて記述した文献や、菊池・麦倉・南 (2015) による自主防災計画の策定過程を記述した文献が見られる。



た「復興」という概念とどのように関わっているのかを捉え直し、一般に「復興」を考えていくうえでの新たな視点を提供する。

- (3) 対象地の経験から導き出された「復興」概念が、広く地域住民中心の「復興まちづくり」を考えていくときに、どのような示唆を与えうるのか検討する。

その際に、震災からの「復興」を、避難所、仮設住宅、復興住宅といった個別のコミュニティに着目するのではなく、一つの地域全体の復興まちづくりに着目し、震災直後からその地域ではどのような経過を辿り、それらが震災から7年経った今現在のまちづくりにどのようにつながってきたのかを記述するよう心掛ける。

以上の目的を達成するために、本稿では次のような構成で論を進める。

まずⅠ章では、対象地と、その対象地が震災でどのような被害を受けたのかを記述する。そのうえで、対象地が東日本大震災の被災後にどのような経過を辿って今に至るのかを、主に行政が行った施策を整理することで概観する。Ⅱ章では、実際に地域住民自身が担い手となって復興まちづくりを進めていこうとするありかたについて、具体的に記述する。Ⅲ章では、復興まちづくりを中心となって行っていく地域住民を支える思想や、その思想が貫かれる背景を、地域や地域における他者との関係性の中から説明していくことを試みる。最後のⅣ章では、Ⅲ章まで述べてきた地域や地域住民のありかたを踏まえ、対象地における「復興」を再度捉え直すとともに、この事例の特長はどこにあるのか、また、この事例から得られる示唆はどのようなものであったのかを整理していく。

#### 4. 研究手法

上記の目的を果たしうる岩手県大槌町吉里吉里地区を対象地とし、フィールドワークによるヒアリング調査及び参与観察調査を中心とした質的研究を行う。なお、必要に応じて行政資料等の文献を参照する。

岩手県大槌町におけるフィールドワークは、平成27(2015)年9月より平成29(2017)年11月まで13回実施している。訪問及びその他ヒアリング等の記録は巻末に記載した。13回の訪問のうち、平成27(2015)年度のもは、東京大学大学院教育学研究科・教育学部の社会教育学・生涯学習論研究室が行っていた訪問に同行したものである(11、12月のヒアリングの一部を除く)。ヒアリング調査は、現地における一対一または一対二の対面調査を基本とし、必要に応じて都内や電話での追加調査を複数回行った。また、活動や会食の場とともに参加する形で、インフォーマルなインタビューも複数回行っている。録音に際してはインタビュー어의承諾を得たうえでを行い、録音承諾を得られなかった場合には、許可を得たうえでフィールドノートに内容を書き込む形を取った。ヒアリング内容にはセンシティブな内容や個人のプライバシーにかかわる内容を多分に含むため、インタビュー어의意向に従い、必要に応じて質問を取り下げる、記録を残さない等の対応を行った。

調査は1回の訪問につき2~5日の滞在とし、間隔を空けて複数回行った。これは、対象

地が東日本大震災からの復興の途上にあり、状況が刻一刻と変化するため、ある程度間隔を空けることで、様々な活動の進行状況や変化を捉えようと意図したものである。なお、同様の背景から、ヒアリングにて得られた情報は、あくまでヒアリング実施時点の状況を反映しているものであり、その後の経過によっては変更が起きている可能性がある点については予め断りを入れておきたい。また、本研究で対象としているのは吉里吉里地区ではあるものの、大槌町の他の地区との比較の視点を目的で、大槌町内の他の地区への訪問も定期的に行っている（巻末に掲載した記録の該当地域欄を「大槌」と記載している）。

ヒアリング対象者は、雪だるま式サンプリングによって選出した。ただし、偏りが出ないよう、町内での異なるルートからの情報収集や対象者選出にも努めた。

ヒアリングデータについては、本文中では斜体で示し、必要に応じて筆者が下線を挿入している。発言の趣旨を変えない範囲で、会話の中略や註釈挿入、トリミングを行った。中略及び註釈挿入箇所は（括弧）で示した。

文献については、吉里吉里地区または大槌町の個人・団体が所有及び発行した資料や、大槌町、岩手県、関係省庁といった行政による資料・史料、震災に関するルポルタージュや新聞記事等を参照した。

地図については、行政資料や個人所有の資料から取得したものほかに、国土地理院または「Google Map」（2018年1月17日取得）から取得したものに筆者が加工を加え使用している。それらの出典については都度示した。

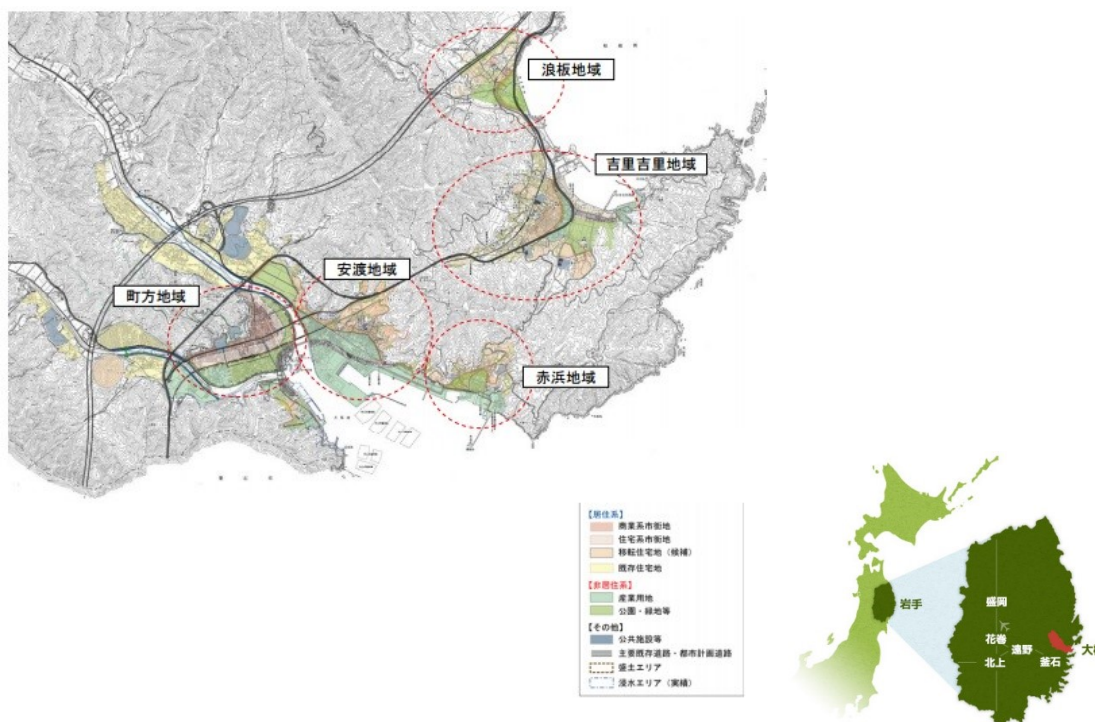
## I 研究対象地の概要

### 1. 対象地選択の背景

本研究では、岩手県上閉伊郡大槌町の吉里吉里地区を対象とする。

大槌町は、東日本大震災で「市街地がほぼ全壊し、役場や主要な施設が津波で機能を失うなど、まちの全体が破壊され」（竹沢 2013）ており、吉里吉里地区でも地区の中心部が流失し、建物被害率は4割近くに上った。

図 1-1（左）大槌町の地区 / 図 1-2（右）岩手県の中の大槌町



出典：（左）国土交通省「大槌町 復興構想図<sup>10</sup>」（右）新大槌漁業協同組合「アクセス<sup>11</sup>」

吉里吉里地区も今回の震災で大きな被害を受けてはいるものの、表 1-1 及び表 1-2 を参照すると、吉里吉里地区は、町内の他の地区と比べ、宅地完成年月が早く、土地区画整理事業は平成 29 年 10 月、防災集団移転事業は平成 28 年の 9 月に完成を迎えている。

<sup>10</sup> <http://www.mlit.go.jp/common/000209534.pdf> (2017 年 6 月 24 日参照)

<sup>11</sup> <http://jfishinootuchi.jp/about> (2017 年 10 月 30 日参照)

表 1-1 土地区画整理事業の進捗状況

地区	町方	安渡	赤浜	吉里吉里	計
面積 (ha)	30.0	5.9	7.7	9.1	52.7
計画人口 (人)	2100	400	360	550	3410
宅地完成年月	H30.1	H30.4	H30.3	H29.10	

出典：大槌町（2017a）「大槌町復興レポート（平成 29 年 7 月 1 日版）」より筆者作成

表 1-2 防災集団移転事業の進捗状況

地区	町方・小 枕・伸松	安渡	赤浜	吉里吉里	浪板	計
移転促進区域面積（地区）(ha)	28.5	13.6	6.7	8.3	3.3	60.4
移転促進区域面積（住宅団地面積）(ha)	20.3	11.2	6.5	5.9	2.3	46.2
被災前戸数（戸）	918	482	140	177	47	1764
移転先住宅団地（戸）	270	65	85	66	11	498
移転先団地面積（ha）	11.5	4.0	6.5	3.7	0.7	30.1
宅地完成年月	H29.12	H30.3	H31.2	H28.9	H27.6	

出典：大槌町（2017a）「大槌町復興レポート（平成 29 年 7 月 1 日版）」より筆者作成

吉里吉里地区における土地区画整理事業及び防災集団移転事業が完了する時期は、筆者がフィールド調査を行った時期（2015 年 11 月～2017 年 11 月）とも重なっている。このことから、吉里吉里地区がまさに復興まちづくりを行っていく転換期に立ち会うことができる。

また、吉里吉里地区は元来、大槌町のなかでも特に独立意識と自主性の強い地域であったとされている（竹沢 2013 及び筆者のヒアリングによる）。震災直後の緊急時や震災後しばらく時間が経過してからの地域運営のありかたにもその特徴が反映されており、地域住民が主体となった活動が展開されている。

たとえば、吉里吉里地区における避難所運営のありかたは、各種メディアや官公庁の資料、文献で取り上げられるほどのまとまりと機動力を見せている。それに加え、町内の他の地区では被災年度に実現できなかった地域の祭りを、吉里吉里地区では被災直後の平成 23(2011)年 8 月に実現している。また、震災からある程度時間が経過してからも、住民が震災後に新たな取り組みを立ち上げている例が複数見られる地域である。これらの取り組みを総合し、2013 年には大槌町で唯一、吉里吉里地区が「元気いっぱい「明日の吉里吉里」住民プロジェクト」として総務省の「平成 25 年度過疎地域等自立活性化推進交付金」を獲得している。このように、吉里吉里地区では外部の補助金も有効活用しながら、住民主体の事業を継続的

に行っているとみられる<sup>12</sup>。

以上のように、吉里吉里地区は甚大な津波被害を受けながら、ある程度ハード事業が進捗しており、「復興」の問題をより幅広く捉え直そうとする本稿の趣旨に合致する。また、住民自身が担い手となる活動が他の地区と比べいち早く実現されている点も、本稿の趣旨と合致するため、吉里吉里地区を対象地として選択した。

以下に、地域の概要をより詳しく述べる。

## 2. 大槌町及び吉里吉里地区に関する概要

大槌町は、岩手県太平洋沿岸地域のほぼ中央に位置する。図 1-1 に示した通り、主に 5 つの地区からなり、役場や商店街などが集まっていた町の中心部（町方地区）と、海辺の集落が複数集まって構成されている。古くは縄文時代より人々が暮らした痕跡が貝塚などで残っており、当時から三陸の豊かな海の恵みを受けてきた。また、海に面するだけではなく山が迫っており、かつては半漁半農で栄えた地であった。

現在でこそ、同じ「大槌町」という行政区画に括られている町ではあるが、その特性は先述の地区によって大きく異なる。中でも本稿で対象としている吉里吉里地区は、現在に至るまで「独立性が強い」と言われている地域である。吉里吉里地区は、町方や他の海辺の地区とは山を隔てており<sup>13</sup>、また、他の地区は大槌湾に面しているのに対し、吉里吉里地区は船越湾に面しているなど、もともと町内の他の地区と異なる生活圏であったと考えられる。

近世には、吉里吉里地区を拠点とした新興の大規模漁場の経営者兼漁場の占有利用権者<sup>14</sup>であった前川善兵衛は盛岡藩の特権商人と化し、近世の三陸沿岸の商品流通を支える一豪商として隆盛を誇った。一方、町方地区は大槌城の城下町であり、長年盛岡藩の治安維持を担う機構であった（Nii 2017）ことを踏まえると、歴史的にも異なる経過を辿ってきたことがわかる。明治時代になっても、当初は大槌、小槌、吉里吉里はそれぞれが別の村として存在し、明治 22（1889）年に大合併が行われるまでは他の地区と行政組織も異なっていた。

その名残が現在でも見られ、たとえば、町を挙げて行われる祭りの参加にも顕著である。大槌湾に面している町内の地域（の伝統芸能）はすべて 9 月の大槌稻荷神社と小槌神社の例大祭に参加するのに対し、吉里吉里地区の伝統芸能はこの祭りには参加しない<sup>15</sup>。吉里吉里地区では毎年 8 月に行われる天照御祖神社例大祭が地域の一大祭りである。

---

<sup>12</sup> 後述するが、吉里吉里地区の住民は、震災以前は行政から要求通りの予算が得られなくても、それで活動を断念することはなく、住民自身で予算を確保し地域の活動を行ってきた。震災を機に、補助金の獲得など「使えるものは有効活用しよう」というスタンスを取っているが、今後は「(町への) 予算要求はする」「使えるものは使う」というスタンスは取り続けながらも、住民自身で予算の確保をしてきた元の体制に戻す予定である（後述の公民館長 H 氏へのヒアリングによる）。

<sup>13</sup> ただし、赤浜と浪板は吉里吉里地区の枝村だったとされている（Nii 2017 等）。

<sup>14</sup> 三陸地方の場合、「瀬主」とよばれる。

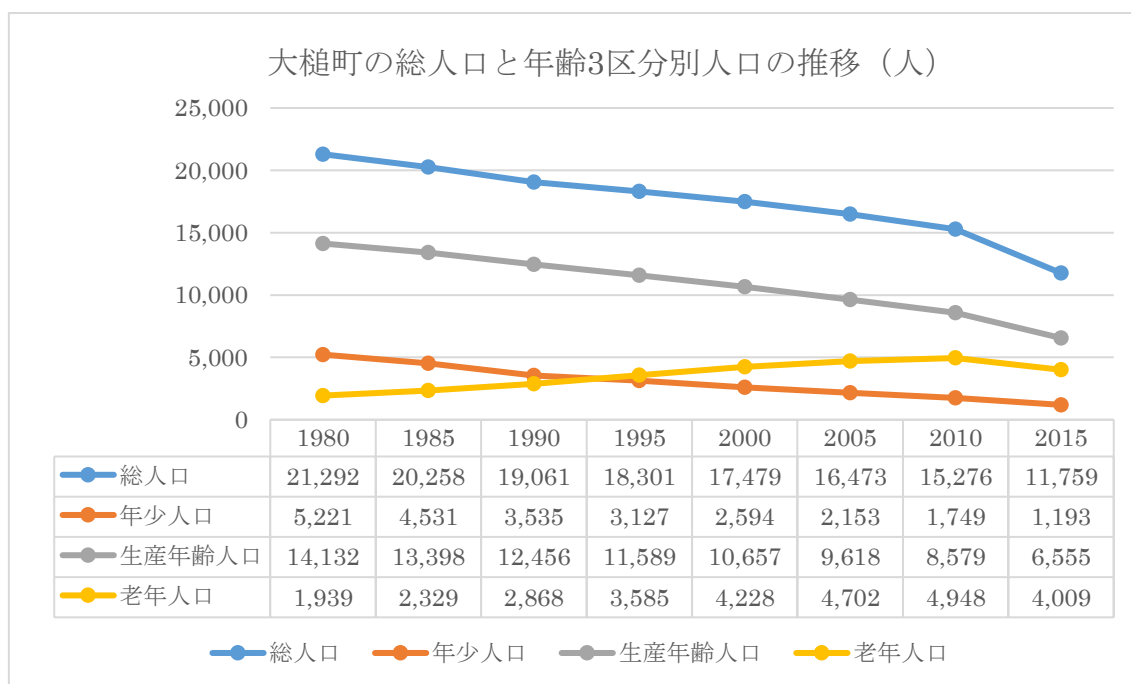
<sup>15</sup> 吉里吉里地区の住民が大槌の祭りの伝統芸能を手伝う場面はあるようだ（M 氏、K 氏ヒアリング等）。

このように、地区による独自性が見られる大槌町ではあるが、町全体として直面している問題の一つに、人口減少がある。

他の三陸沿岸地域と同様に、大槌町では少子高齢化及び過疎化が進行していた。図 1-3 に示した通り、総人口は昭和 55（1980）年の 21,292 人をピークに減少を続け、生産年齢人口と年少人口も減少の一途をたどっている。一方老年人口は、平成 22（2010）年までは増加している。図 1-4 に示した通り、吉里吉里地区も大槌町と同様の傾向を辿っている。

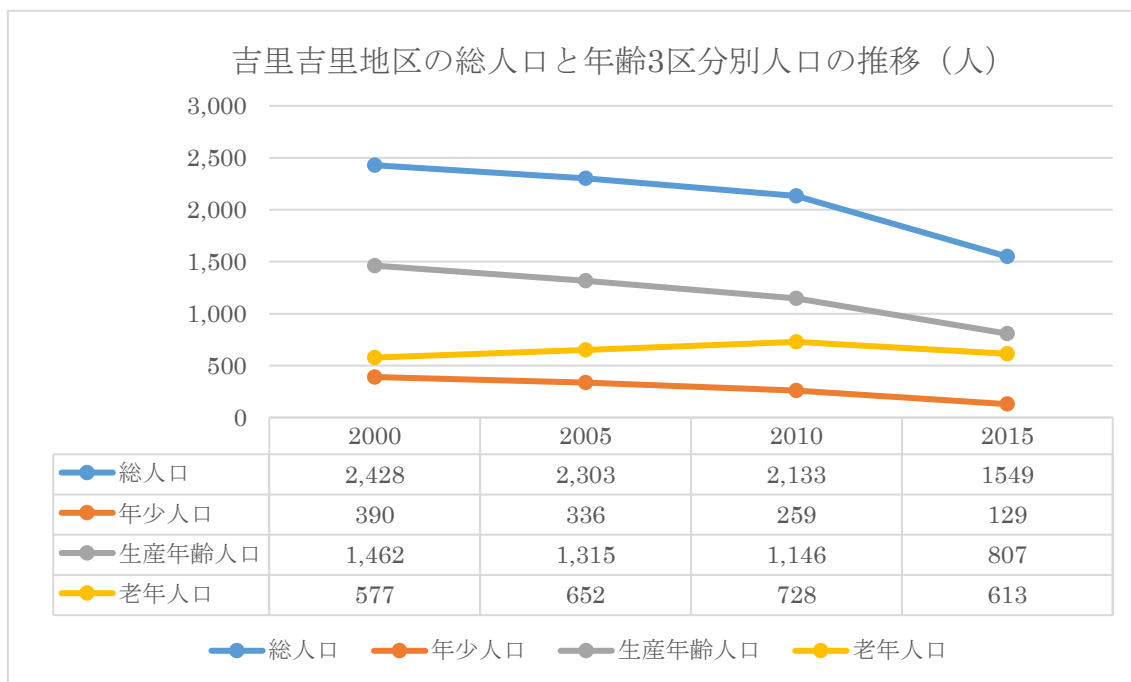
震災後は人口の流出に更なる拍車がかかり、総人口、生産年齢人口、年少人口はもとより、老年人口までもが減少するに至った。こうしたなかで、生産年齢人口の流出を食い止めるべく、雇用の確保等の対策を行うことや、老年人口を地域で支えていく仕組みの確立が求められている。

図 1-3 大槌町の総人口と年齢 3 区分別人口の推移



出典：大槌町（2016b）及び総務省統計局「国勢調査結果」より筆者作成

図 1-4 吉里吉里地区の総人口と年齢3区分別人口の推移



出典：大槌町（2016b）及び総務省統計局「国勢調査結果」より筆者作成

ここで、大槌町の産業についても整理する。

大槌町は、かつては漁業で栄えた町であったが、高度成長期頃を境に、漁業を生業とする人口は減少し、隣接する釜石市にて製造業に従事する人が増えるなど、釜石市のベッドタウンとしての役割を強めていた（表 1-4）。また、震災後には更に漁業従事者が減少している<sup>16</sup>。

吉里吉里地区も、大槌町同様に、かつては漁業で栄えた町であった。当初は遠洋漁業が盛んであったが、昭和 37（1962）～38（1963）年頃よりイカ、マツモなどの養殖漁業に転換している。しかし、次第に漁業で生計を立てるのが難しくなり、高度成長期頃より、新日鉄などの巨大な工場を擁する釜石市に働きに出る人々が増えていった。表 1-3 を見ると明らかなように、大槌町全体と比べても、製造業などの第二、三次産業従事者が多い。

平成 23（2011）年の東日本大震災を境に、吉里吉里地区でも更に漁業従事者が減少した。現在のところ、漁業権を持つ多くの人が自家用に漁を行っており、現在でも漁業で生計を立てている人は養殖ワカメが 8 人、ホタテとカキがそれぞれ 4～5 人程度と、決して多くはない。

<sup>16</sup> 大槌町全体の震災前後の漁業者数については、巻末に記載している。

表 1-3

平成 27 年度 大槌町民及び吉里吉里地区における産業別男女 15 歳以上の就業者数

単位：人

大字・町名	吉里吉里	大槌町
総数（産業大分類）	697	5769
A 農業，林業	9	183
うち農業	-	152
B 漁業	34	173
C 鉱業，採石業，砂利採取業	2	56
D 建設業	85	1160
E 製造業	102	1006
F 電気・ガス・熱供給・水道業	1	24
G 情報通信業	2	25
H 運輸業，郵便業	57	259
I 卸売業，小売業	74	662
J 金融業，保険業	6	44
K 不動産業，物品賃貸業	6	36
L 学術研究，専門・技術サービス業	11	98
M 宿泊業，飲食サービス業	58	272
N 生活関連サービス業，娯楽業	22	126
O 教育，学習支援業	36	148
P 医療，福祉	101	632
Q 複合サービス事業	8	79
R サービス業（他に分類されないもの）	51	373
S 公務（他に分類されるものを除く）	32	382
T 分類不能の産業	-	31

出典：総務省統計局より筆者作成



表 1-4 平成 27 年度 大槌町民及び吉里吉里地区住民の従業地

大字・町名	吉里吉里	大槌町
常住地による 15 歳以上就業者数	697	5769
自宅で従業	49	426
自宅外の自市区町村で従業	354	3370
他市区町村で従業	293	1946
県内他市区町村で従業	263	1856
他県で従業	26	73
従業市区町村「不詳・外国」	4	17
従業地「不詳」	1	27

出典：総務省統計局より筆者作成

また、大槌町は三陸沿岸地域と同様に、津波常襲地帯としても知られており、規模の大小はあるものの、近世以後は短くて 10 年、長くても 40 年の間隔で津波が発生している<sup>17</sup>。大槌町は過去何度も津波災害と対峙し、それを乗り越えながらまちづくりの歴史を刻んできたと言えよう。

復興過程については次章で整理するが、近代以降に三陸を襲った大津波（明治三陸地震津波、昭和三陸地震津波、チリ地震津波）においても被害が出ている。

<sup>17</sup> 巻末の参考資料参照。なお、前掲の宇佐美（2003）は、「被害地震の記録が文化の発展段階に応じていることを示す」「一般的には、東北に行くにつれて、記録のあらわれる時期がおくれる。東北地方についていえば、被害地震の諸相を概観できるのは江戸時代に入ってからのことになる。」（p.13）と述べている。とりわけ中世以前については、記録としては残されていないだけで、他にも津波災害が起こっていた可能性が指摘できる。

表 1-5

大槌町及び吉里吉里地区における明治三陸地震津波、昭和三陸地震津波、チリ地震津波、東日本大震災の被害状況比較

津波	集落	震災前人口(人)	死者・行方不明者(人)	人的被害率	震災前戸数(戸)	流失・全潰戸数(戸)	建物被害率	最大波高 <sup>18</sup> (観測地点)
明治	大槌町	6,983	600	8.60%	1,172	444	37.90%	10.7m
	吉里吉里	953 (推計)	288	30% (推計)	約 160	122	約 76%	(浪板・吉里吉里)
昭和	大槌町	12,033	61	0.50%	1,747	419	24.00%	6.0m
	吉里吉里	1,732	10	0.60%	272	128	47.10%	(吉里吉里)
チリ	大槌町	20,004	0	0%	3,768	82	2.20%	4.5m
	吉里吉里	-	0	0%	-	0	0%	(小鎚橋)
東日本 <sup>19</sup>	大槌町	16,058	1,285	7.80%	6,808	3,092	48.30%	22.2m
	吉里吉里	2,475	100	4.00%	954	355	37.20%	(吉里吉里漁港東側)

出典：岡村（2017）、大槌町史編纂委員会（1984）『大槌町史 下巻』、大槌町漁業史編纂委員会（1983）『大槌町漁業史』及び大槌町（2011c）「大槌町東日本大震災津波復興計画 基本計画」を元に筆者作成

### 3. 吉里吉里地区に関する研究史の整理

吉里吉里地区を対象とした先行研究は、主に歴史学や社会科学の分野で行われてきた。経済学の分野では、先述の近世に漁業で栄えた豪商前川善兵衛に関する研究（岩本 1968 等）が複数なされている。また、井上ひさしの小説『吉里吉里人』のモデルとなったこともあり、その小説そのものに関する研究蓄積や、小説と関連した吉里吉里の独立意識の強い実社会を描き出す研究がなされてきた（Nii 2017）。

とはいえ、やはり最も研究の蓄積が分厚いのは、津波被害とその復興に関する研究である。

昭和三陸地震津波に関しては、吉里吉里地区がいち早く集落の再建を成し遂げたことから災害史の文脈でも注目度が高く、たとえば山口（1943）は「理想村」として吉里吉里地区を挙げている。また、東日本大震災の後にも、岡村（2014 および 2017）に見られるように、明治三陸地震津波、昭和三陸地震津波、チリ地震津波、そして東日本大震災と、過去に遡っ

<sup>18</sup> 最大波高については複数の数値が見られたため、町内で最大のものを採用して表に掲載した。

<sup>19</sup> 東日本大震災に関する数値は、大槌町の人的被害については大槌町（2017b）、その他については岡村（2017）に則った。

て4つの大きな津波災害と集落の復興過程について描いた研究が行われている。

東日本大震災以後、吉里吉里地区を対象地に含んだ研究は夥しい数が存在するが、継続的に吉里吉里地区にて行われたものとしては、先述の岡村のほか、震災直後より吉里吉里地区に入り続けている都市社会学者の浅川による一連の研究（2012、2016、2017等）、大槌町のまちづくりに関する計画の立案を担ってきた中井の研究（2013および2014）<sup>20</sup>、吉里吉里地区の自主防災計画の策定等に関わってきた麦倉の研究（2015等）が主なものとして挙げられる。

#### 4. 東日本大震災における大槌町及び吉里吉里地区の被災状況

大槌町は今回の東日本大震災において、町の中心部が津波により壊滅的な被害を受けた。また町長が役場前で災害対策本部を設置している最中に津波に呑まれ亡くなるなど、被災自治体では唯一首長が亡くなった自治体となった。災害対策や復興町政を取り仕切る立場の機関も被災したことで、復興の進捗にも影響が出たとされる。

具体的な被害状況は前節の表 1-5 に記載した通りであるが、大槌町（2017b）及び岡村（2017）によれば、人的被害は死亡届受理数 1,233 人、行方不明者 1 人、震災関連死 51 人となっており、被災家屋は 3,092 戸に及ぶ。また大槌町（2014a）によれば、2013 年 2 月 28 日時点における農林水産施設、商工業施設や観光施設等の産業被害額は約 151 億円、道路・海岸施設、上下水道、学校や社会教育施設、役場庁舎や消防署等の公共施設被害が約 617 億円となっており、それらを合わせた物的被害は約 768 億円である。吉里吉里地区でも、死者・行方不明者が 100 人、被災家屋は 355 戸となり、昭和三陸地震津波後に高台移転を成し遂げた地区も流失するなど、甚大な被害が出た。より海岸に近い吉里吉里 1 丁目、2 丁目、3 丁目では多くの建物が流失し、流失を免れた建物も半壊するなど、地区の中心部であった街並みは壊滅状態に陥った。

---

<sup>20</sup> なお、中井の一連の研究で吉里吉里地区を担当しているのは社会基盤を専門とする二井昭佳氏である。

図 1-5 1975 年の吉里吉里地区の様子（出典：国土地理院）



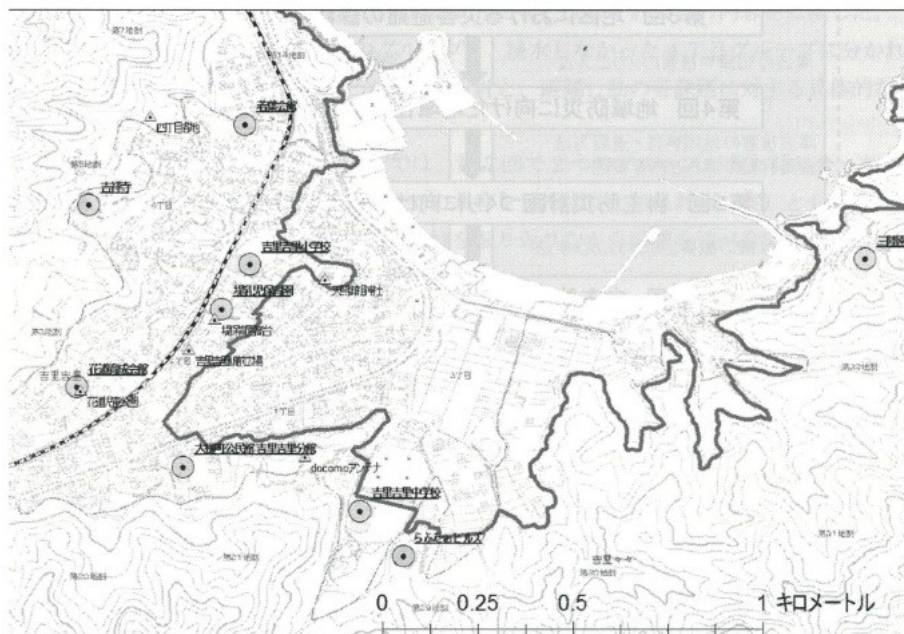
図 1-6 2011 年 6 月の吉里吉里地区の様子（出典：国土地理院）



図 1-7 2017 年の吉里吉里地区の様子（出典：Google Map）



図 1-8 吉里吉里地区避難マップ（出典：大槌町吉里吉里地区自主防災計画）



※太線が津波遡上境界である。

表 1-5 で示したように、吉里吉里地区も明治三陸地震津波、地震津波、チリ地震津波など何度も津波を経験している地域であり、昭和三陸地震津波後には宅地造成と移転も行われ

ている<sup>21</sup>。しかし今回は、昭和三陸地震津波後の宅地造成で嵩上げされた高さ以上の波が到達し、大きな被害が出たと言える。

## 5. 吉里吉里地区における復興まちづくり施策の過程

吉里吉里地区の所在する大槌町では、東日本大震災で甚大な被害を受けたことを契機に、町の上位計画として、2011年3月に制定された「第8次大槌町町勢発展計画後期基本計画」に代わり、2011年12月に策定された「大槌町東日本大震災津波復興基本計画」を策定した。同計画は2014年3月に改訂されている（大槌町 2016b）。また、2018年1月時点は、2017年に策定された「大槌町東日本大震災津波復興計画実施計画 第3期 発展期」の対象期間であり、これらの上位計画に則った各施策が打ち出されている（大槌町 2017c）。

また、大槌町も含めた東日本大震災の被災地では、復興まちづくりに関連して、復興計画を定める各自治体などの行政はもちろん、外部支援団体や研究者が中心となり、住民を対象とした様々な協議会や説明会が開催されてきた。吉里吉里地区もこの例に漏れず、同様の会議が多数開催されている。

以下では、吉里吉里地区における復興まちづくり施策の過程について概観する。大槌町ホームページ<sup>22</sup>及び大槌町震災アーカイブ<sup>23</sup>にて取得した吉里吉里地区の復興まちづくりに関する主な協議会、行事は以下の表 1-6 の通りである。なお、以下の表では、役場（行政）が主導し行ったものを中心に記載しているが、次章以降で詳述する地区の自治組織が主導して行った会議やイベント（※）も、復興過程の目印として記載している。

---

<sup>21</sup> 吉里吉里 2 丁目の一部地域が該当する。なお、昭和三陸地震津波後に宅地造成された地区は東日本大震災の津波により建物がすべて流失しており、嵩上げによる都市再生区画整理事業が行われた。土地の嵩上げを経て、2017 年以降、当該地区に住宅が再建され始めたところである。

<sup>22</sup> 2018 年 1 月 2 日取得、<http://www.town.otsuchi.iwate.jp/gyosei/>.

<sup>23</sup> 2018 年 1 月 3 日取得、<https://archive.town.otsuchi.iwate.jp/>.

表 1-6 吉里吉里地区における復興（主にハード）事業に関する主な公的協議会・イベント

年	月	内容
2011	5月頃～	※天照御祖神社参集殿での自主的な復興検討会議開催
	10月	吉里吉里地域復興協議会開催（同年11月まで全4回開催） 吉里吉里地区復興計画ワークショップ開催 大槌町地域復興協議会地域別会議開催
	12月	吉里吉里・浪板地域復興まちづくり個別相談会開催 吉里吉里地域復興計画を町へ提出 大槌町東日本大震災津波復興基本計画策定
		大槌都市計画事業吉里吉里地区震災復興土地区画整理審議会開催 （2017年11月現在で計13回開催）
2012	1月	住宅再建に関する意向調査
	3月	復興計画に関する住民説明会開催 土地利用計画案及び住宅再建に関する住民説明会開催
	4月	吉里吉里海岸清掃プロジェクト実施（同年6月、2013年7月にも実施）
	6月	吉里吉里地域復興まちづくり協議会発足 吉里吉里地域復興まちづくり協議会開催 吉里吉里地域復興まちづくり懇談会・地域復興協議会（2014年11月まで計7回開催） 住宅再建に関する個別相談会開催 居住意向調査、移転先候補地の地権者交渉
	8月	吉里吉里漁港復旧工事実施
	9月	防災集団移転促進事業計画の大臣同意
2013	3月	自主防災計画検討会開催（2014年5月までに計8回開催、2014年7月策定） 大槌デザイン会議（2014年3月までに計6回開催）
	7月	※砂の芸術祭実施（2017年まで毎年開催）
	8月	復興計画ワークショップ（同年10月までに計3回開催）
	10月	吉里吉里地域の将来を考える会 <sup>24</sup> （2014年3月までに計5回開催）
	11月	復興工事安全祈願祭
2014	7月	※吉里吉里海岸海開き（4年ぶり）
	10月	※吉里吉里地区大運動会（4年ぶり）
2015	10月	国道開通

<sup>24</sup> ソフト事業を議題としたものである。

2016	9月	防災集団移転促進事業（吉里吉里地区）宅地完成
2017	5月	町内会再編に関する会議開催（役員会）
	6月	※消防屯所完成
	8月	「みちのく潮風トレイル」の大槌区間開通
	10月	土地区画整理事業（吉里吉里地区）宅地完成 区画整理地域、防集団地での街灯の整備
	11月	※造成の完了した2号公園での記念植樹祭
2018	1月	吉里吉里地区町内会発起人準備会
		2月：吉里吉里公民館完成（予定） 年度中：山田線開通（予定）
2019		三陸沿岸道路開通（予定）

出典：大槌町ホームページ（2018年1月2日取得）、大槌町震災アーカイブ（2018年1月3日取得）、大槌町復興レポート（平成29年7月1日版）、復興協議会長<sup>25</sup>、役場職員<sup>26</sup>へのヒアリングを元に筆者作成

上記の表 1-6 で見たように、行政主導の施策だけでも多様な協議会や会議が開催されてきたことがわかる。以下では、とりわけハード事業を中心とした吉里吉里地区の復興まちづくり施策の実現過程について、復興協議会長の F 氏に行ったヒアリングを元に概説する。

吉里吉里地区では、震災発生直後の 2011 年 5 月頃<sup>27</sup>、公民館の運営協議会<sup>28</sup>のメンバーら地域の活動を中心になって進めてきた人々が、流失を免れた天照御祖神社<sup>29</sup>の参集殿に集まり、地域の被災状況や今後の復興を進めていく上での検討事項、役場への上申事項を話し合う機会を自主的に設け、情報交換を行っていた。そのような折に、役場から正式に復興協議会を発足させる旨の通達があり、先述の自主的な会議は解散となったものの、結果的にその時のメンバーが多く含まれる形で、役場が設置を求めた吉里吉里地区の復興協議会が組織された。

ハード事業に関わって、吉里吉里地区で 2011 年以降まず組織された会議は役員会、吉里吉里地区震災復興協議会、そして住民懇談会の 3 つである（図 1-9 参照）。以下にそれぞれ概要を説明する。

<sup>25</sup> 2017 年 11 月実施。

<sup>26</sup> 2016 年 7 月実施。

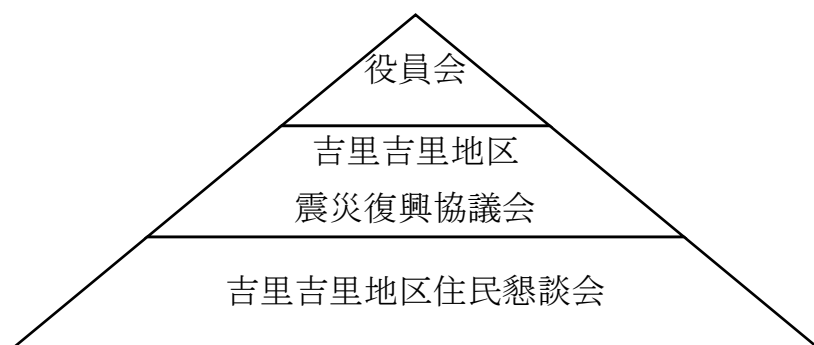
<sup>27</sup> F 氏自身はヒアリングでは「6, 7 月頃」と述べているが、公民館長 H 氏より入手した資料によれば、この検討会は同年 5 月末には何度か行われていることが明らかになったため、本文のような記載を施した。

<sup>28</sup> 吉里吉里地区の自治組織の一つである。詳細は次章で述べる。

<sup>29</sup> なお、F 氏はこの神社の神主である。



図 1-9 吉里吉里地区におけるハード事業に関連した会議（概念図）



出典：F氏ヒアリングをもとに筆者作成

協議と方針決定を円滑に進めるために、まず、F氏を含めた住民6名で役員会を結成し、3ヶ月に1回程度会議を実施した<sup>30</sup>。役員会は、役場から住民に計画を提示する前に、ある程度方向性を定めるために行われる位置づけで設置されたものである。すなわちこの役員会は、役場が住民に提案を行うより前に議論の叩き台を共に作り、その提案が地域の実情に合っているかどうかをチェックする役割を担った。これにより、出席人数が多い会議にゼロベース、あるいは住民目線が考慮されていない役場の立場で提案を行い、いつまでも方向性がまとまらず、会議が長期化し復興が遅れるのを避けることができるようになっていた。

続いて復興協議会は、役員会の規模を拡大したもので、役員会のメンバーに加え、公民館運営協議会（後述）に参加する町内会長などをメンバーに加えたものである。これについては、意思決定を行うには人数が多すぎたことと、その他の各種会議も多数開催されており会議回数が嵩んだ<sup>31</sup>こと、参加率が振るわなかったこと、被災していない地域の人々が発言しづらいという問題があったことなどにより、徐々に開催されなくなっていった。

最後に、復興まちづくり懇談会である。これは、全地域住民を対象とした説明会で、これまでに7回開催された。この懇談会で、役場からまちづくりに関する説明がなされる。ここで、住民は異議や質問があれば直接述べることができる<sup>32</sup>。

先に述べたように、吉里吉里地区では役場の方針に大きな異論が出ず、迅速に復興計画が定まった。また、意思決定の速さが主要因であると一概に述べることはできないものの、嵩上げや宅地造成などの工事も他の地区と比べ早く完了した。一方、懇談会のような大人数が集う場で遠慮して質問や意見を述べることができなかつたり、計画が自分自身の生活にどのようにかわるのかといった個人的なことを問うたりできない住民に配慮し、役員会の提案で、役場での個別相談会も設けている<sup>33</sup>。

<sup>30</sup> 2017年11月現在で27回行われている。なお、30回を目処に解散する見込みである。

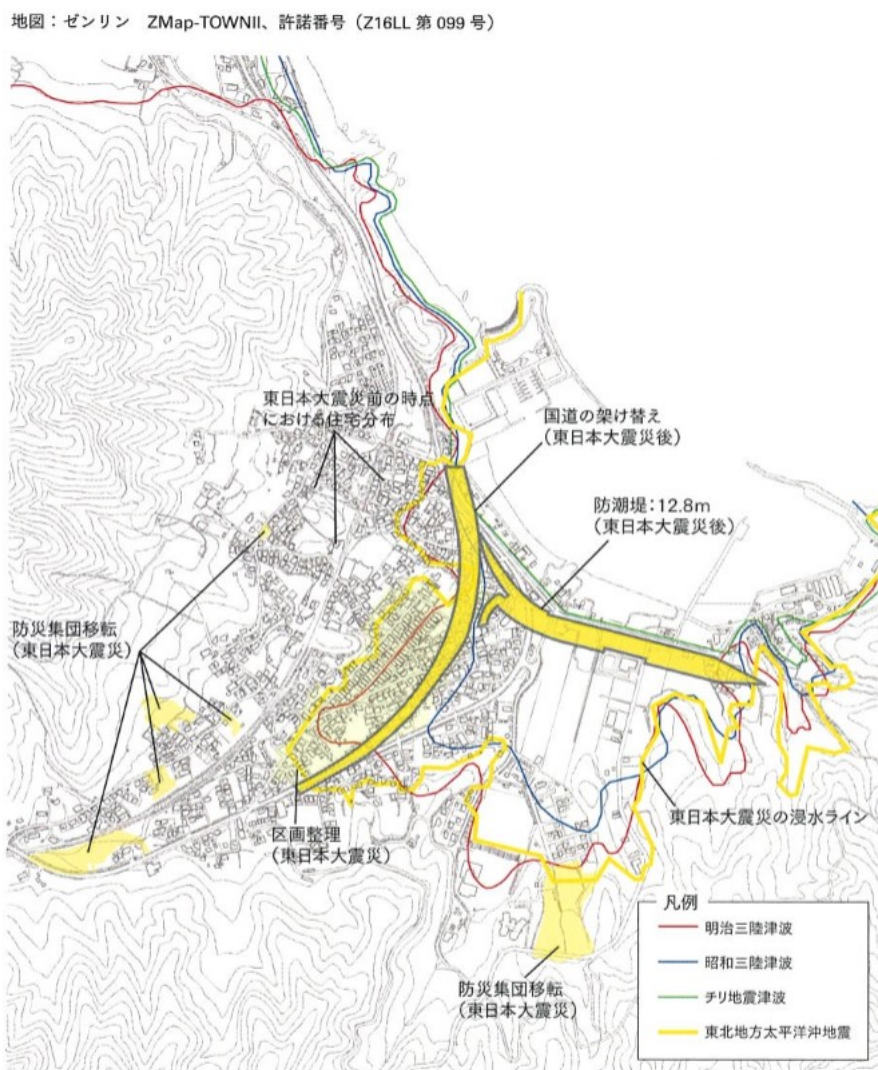
<sup>31</sup> この参加者は、他の団体のトップでもあるため、この協議会以外に出席する必要のある会議が多いという事情がある。

<sup>32</sup> ただし、F氏によれば、吉里吉里地区ではあまり意見は出なかったとのことである。

<sup>33</sup> F氏はこれについて、「こういう震災で被害を受けた割には（自己主張するような意見

このような過程を経て、実際に決められた吉里吉里地区の都市計画は岡村（2017）が以下の図 1-10 に整理した通りである。

図 1-10 東日本大震災と集落再編



出典：岡村（2017）p.305

が出ず)、なんか拍子抜けっていえば変なんだけどさ、みんな我慢してんのかなって。まあ手挙げて(発言して)もね、もっと状況の厳しい人も隣にいるかもしれないからね。それはわからないからさ、だからその点では皆さんは遠慮したと思うよ、結構。だから遠慮するから、個別の交渉、個別の方の説明も大事ですよって。やっぱり自分の身内のこととかさ、(中略)そういうことは言えないでしょ。俺の息子は帰ってこねえとかさ、借金がこんくらいあんだとかさ、所沢の知らない人(筆者註：役場の応援職員を指す)だったら言えるや。ね。実は金ねんだがえ、(中略) 抵当入っててまだローンが残ってて、とかそういう話は、なかなか(人前では)言えない。」と述べている(2017年11月ヒアリングより)。

この他にも、自主防災計画を策定するための検討委員会<sup>34</sup>やまちづくりを考えるワークショップ、ソフト事業を考える「吉里吉里地域の将来を考える会」など、多数の会議や協議会<sup>35</sup>が公的機関や外部団体主催で開催されてきた。これらを吉里吉里地区で実施する際には、役場が一方的に告知を行い実施する「役場一対一吉里吉里地区の住民全員」という関係性で物事が進むことはほとんどなく、先の役員会が窓口となる場合もあれば、その種類に応じて、後述の公民館や町内会、また新たに誕生した組織が受け皿やパイプ役となり、地域住民との間をつないでいく場合もある。詳細は次章以降に述べる。

図 1-11 <平成 28 年度版> 吉里吉里地区津波避難マップ



出典：吉里吉里地区自主防災計画策定検討会（2016）

<sup>34</sup> これによって作成されたものの一つが図 1-11 の津波避難マップである。

<sup>35</sup> なお、F氏は、当時のことを振り返り、「(会議が多すぎて) 会議のための会議になっていたのではないか」と述べ、会議がどのように活かされているのかについて検証する必要があると述べている（2017年11月ヒアリングより）。

## II 事例紹介 吉里吉里地区で行われた復興のありかた

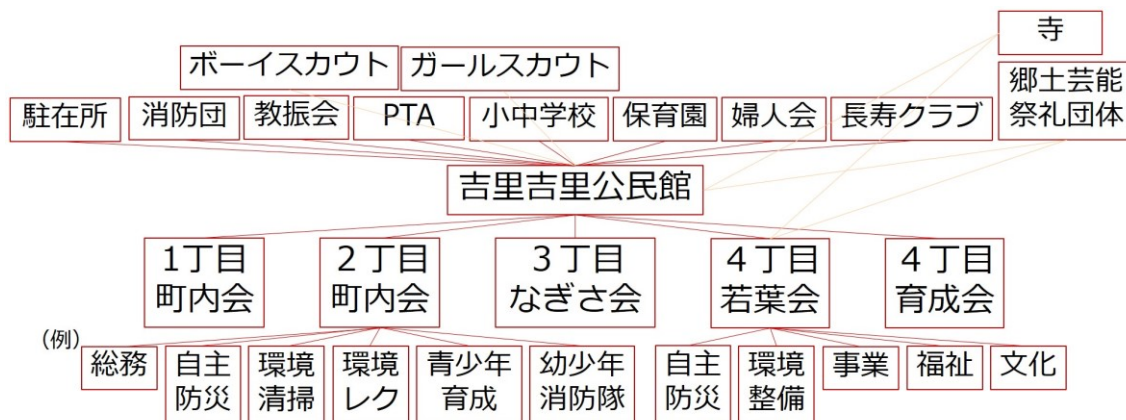
### 1. 地縁的なつながりに依拠した復興のありかた

吉里吉里地区は、震災前から地域のつながりが強く、震災後もその地縁的なつながりが活きている。具体的には、同地区には震災以前から公民館及び町内会を中心とした自治体制が成り立っており、それが震災後の住民の主体性をある程度支えてきたとみられる。その様相について、本節では震災前、震災後（緊急・救援期、復興期）に分けて以下に詳述する。そのうえで、今後の展望を示し、この地域における地縁的なつながりに依拠した復興のありかたを小括する。

#### 1-1. 震災前の吉里吉里地区における自治組織

吉里吉里地区では、公民館と町内会を中心とした自治組織が存在していた。特徴的なのは、住民の生活に直接かかわる存在として、公民館だけではなく、行政に依らず自主的に作られた町内会<sup>36</sup>組織があるということと、町内会が行政の手によって「上から」作られたものではなく、完全にボトムアップで作られてきたということ、そして、公民館と町内会が二重に機能しているという点である。公民館と町内会は、基本的には独立して活動を行う。この点について、本項で詳しく述べていく。

図 2-1 吉里吉里地区の自治体制（震災前）<sup>37</sup>



出典：ヒアリング及び公民館長 H 氏提供資料を元に筆者作成

以下に、公民館と町内会それぞれの役割と、その関係性について述べる。

<sup>36</sup> 吉里吉里地区の町内会創設の経緯は後述するが、吉里吉里地区の町内会は戦後 20 年以上経ってから自主的に作られたもので、戦前に国家権力の末端となった町内会が温存された形として捉えられる一般の町内会とは別様の組織である。

<sup>37</sup> 町内会の組織は 2 丁目町内会と 4 丁目若葉会の組織を例として記載した。

## ① 公民館

吉里吉里における「公民館」とは、正式には大槌町中央公民館吉里吉里分館を指し、分館の職員として分館長が置かれている（以下、それぞれ公民館、公民館長とする）。公民館は1949年の公民館法制定時に設立され、1977年9月27日に制定された大槌町公民館条例でも位置づけが規定された、行政の枠組みに則った組織である。

公民館それ自体は大槌町の公的な組織であるが、公民館の運営組織である公民館運営協議会<sup>38</sup>は、吉里吉里地区内の5つの町内会長と、各種団体の長（消防団分団長、婦人会長、長寿クラブ代表、教育振興協議会会長、保育園長、保護者会長、小中学校のPTA会長）のほか、学識関係者や専門職員から成る、きわめて地域性、ボトムアップの色彩の強い組織である。公民館運営協議会に参加するような立場にある人々はみな、町内会や吉里吉里地区を所轄範囲とする、ありとあらゆる団体でリーダーとして活躍してきた人々<sup>39</sup>である。なお、この公民館運営協議会の構成メンバーは、必要に応じて変更される<sup>40</sup>。

公民館長を務める公民館長 H 氏は、「公民館」や自身の位置づけについて、「役場の支所みたいな感じ」「町と地域のパイプ役」であるという。公民館長は、地区の現場を日々歩き、人々に声をかけ、町内会長や公民館の役員との意見をすり合わせ、積極的に町に提言する。一方、行政が何か施策を打とうとするときには、まず公民館長に提案や問い合わせが持ちかけられ、それらが町内会を通じて拡散されたり、町内会と議論が行われたりする。

また、吉里吉里地区全体での行事が行われる際には、公民館が中心となる。たとえば、吉里吉里地区で毎年10月第一日曜日に行われる吉里吉里地区大運動会の取りまとめは公民館が担っている。ただ、行事の中身の検討や運営は公民館が独立して行うわけではなく、町内会ごとに検討した案を各町内会長が持ち寄って、公民館運営協議会の場で議論し、詳細が決定され、各町内会が協力して運営するというプロセスを辿る。

## ② 町内会

ここで、吉里吉里地区において公民館とともに語られることの多い町内会についても整理する。なお、町内会については、震災前後で状況が変化しているため、震災前までの状況について本項でまとめ、以後の状況については次項で述べる。

---

<sup>38</sup> 「運営協議会」「公民館協議会」等呼称は様々であるが、本稿では「公民館運営協議会」に統一した。

<sup>39</sup> 公民館長の役職自体は、それまで町内会や地区内の諸組織でリーダーとして活躍してきた人が就任することもあれば、地域活動に積極的でない人が就任し、公民館運営協議会や各町内会が実質的に地域を取り仕切っていた時期もある。後述するが、現職の公民館長 H 氏は、子供のころから地域活動に中心的に関わってきた人物である。

<sup>40</sup> 震災後の2016年には大槌町内や吉里吉里地区内で重要な組織となった団体の代表（NPO 法人吉里吉里国理事長やはまぎく若だんな会会長）や、行政の組織のなかでも住民の生活に密着している領域の人々（民生委員）を新たにメンバーに加えている。今後も、各町内会の自主防災組織の長などをメンバーに加えるか検討しているとのことであった。

吉里吉里地区には町内会が5つ存在する（1丁目、2丁目、3丁目なぎさ会、若葉会、花道育成会）。これらの町内会が吉里吉里地区で立ち上がったのは、戦後のことである。それまでも、「結取（ゆいと）り」とよばれる漁業や畑作における地域的なつながり<sup>41</sup>や、祭りのリーダーを中心とした「小踊（こおどり）会」とよばれる地域的なつながり<sup>42</sup>は見られた。

5つの町内会の中で最も古いものは、若葉会である。

若葉会現会長のNM氏（40代、製造業。消防団員兼務）や現副会長TS氏（40代、製造業。吉里吉里小学校PTA顧問兼務）、初代副会長のMF氏（80代）に実施した2017年2月、6月のヒアリング及び公民館長H氏提供の「平成29（2017）年度若葉会第49回定期総会」の資料を総合すると、若葉会は1969年に、当時20代の3人によって、子供たちの健全育成を第一の目的に立ち上げられている。当時の吉里吉里4丁目の吉祥寺より東側は、「難所」「吉里吉里のチベット」と言われる不便な奥地であった。国道から地区に抜ける道が整備されておらず<sup>43</sup>、車の乗り入れが難しく、ごみの収集車も入れない状況であり、道路も舗装されず、夜には電灯がない、また吉里吉里地区全体の行事が行われても当該地区からは行きづらい、という状況に置かれていた。

初代代表を務めたNM氏の父親は、釜石に働きに出て「外」を見たことをきっかけに、「若い人たちがこのままでは地区が良くなる、子供たちのために、生活環境の改善をしよう」と若葉会の立ち上げに至り、当初は主旨に賛同した35歳以下のメンバー21名で会がスタートした。

---

<sup>41</sup> 80歳のMF氏ヒアリング（2017年6月実施）によれば、「手間をとらずに助け合う」つまり、金銭・物質的な授受なく、必要な時に交代で助け合う仕組みが整っていた。また、農繁期や漁繁期以外には、近隣の人と「お茶っこ会」が開かれ、交流を深めたり、収穫物を交換したりといったつながりが形成されていた。

<sup>42</sup> 公民館長H氏ヒアリング（2017年6月実施）及びTA氏ヒアリング（2017年9月実施）による。なお、PTA会長A氏によれば、祭礼（伝統芸能）団体は、所属するメンバーの大まかな吉里吉里地区内の出身地域（≡町内会）はあるものの、特に出身地域に依らず、希望する団体に所属する。吉里吉里地区の児童・生徒であれば、小中学校のカリキュラムで伝統芸能を学んでいるため、希望した芸能を学び、その団体に所属するという形になる。なお、大槌町（2013b）によれば、祭りの本部があるのは、神楽が1丁目、獅子踊りが2丁目、虎舞が3、4丁目である。

<sup>43</sup> 図2-2を参照すると、現在では国道から若葉会館の横を通る道が整備されている。

図 2-2 吉祥寺及び吉里吉里 4 丁目付近の地図（2018 年 1 月現在）



出典：Google Map より筆者作成（北を上とする）

生活環境向上に関する役場との交渉や、交渉を行う際の全戸への協力依頼等の活動を経て、やがて、若葉会は寺の東側の地区全戸を対象とするという会則が定められるまでになった。ただし、この会則があるとはいえ、地区に新たな住民が引っ越して来た際には、三役が出向き、会への参加を直接依頼したり、総会の際には新たな住民を呼び元々住んでいる住民たちに紹介したりしている。

現在若葉会には、自主防災部、事業部、福祉部、文化部、環境整備部等が整備されており、時代に即して、会則や活動内容の見直しを都度行いながら、防災、祭りの準備と実施、寺の掃除、地区の旅行等の会主催の活動を、多い月には毎週末行っている。その様子は会のホームページや副会長の個人的な SNS 等で発信されている。「震災後に数多く開催されたワークショップ等で実施が呼びかけられた活動はほとんど全て震災前からやっていた」という趣旨の発言が副会長から見られるように、吉里吉里地区の中でもとりわけ地域活動が盛んで、その様子は他の町内会の住民からも評価されている<sup>44</sup>。また、地域内での議論をもとに公民館の協議会に参加したり、地域内だけで解決できない課題が生じたときには、公民館を

<sup>44</sup> 1丁目出身の大槌町社協職員 MK 氏（20代）は、災害時に要介護者やお年寄りを避難させる仕組みを整えるワークショップを若葉会で実施した際に、若葉会が、「どの家に高齢者が住んでいてどの人を誰が助けて避難するかを即座に決めることができる」ような、住民を把握する力や意思決定の速さに感銘を受けた旨の語りをしていた。

飛び越えて直接役場に陳情したりといった活動も行っている。

若葉会に続く形で昭和 50（1975）年以降に設立された 4 つの町内会も、それぞれが独自の組織を持って地域運営にあたり<sup>45</sup>、各地域の状況を公民館に集約するという形がとられている。

### ③ 公民館と町内会の関係性<sup>46</sup>

これまで述べたように、吉里吉里地区では、住民が生活を営むに際し、各町内会が独自の組織を持ち地域運営にあたりると同時に、公民館も運営協議会というボトムアップの色彩が強い組織を持ち、吉里吉里地区全体を束ねているという二重の自治体制が築かれていた。

住民の目線から見ると、町内会が普段の生活の自治を担っている。町内会は、ゴミ収集や街灯の電球切れなど、生活上の環境整備のパイプ役となる<sup>47</sup>。また、町内会ごと、あるいは吉里吉里地区全体の活動に参画する窓口としての役割を担うのが各町内会であり、住民にとっては最も身近な存在である。一方の公民館は、普段の活動として意識されるというよりは、住民の目線でも、各町内会の活動を束ねているという認識が強いとみられる。

なお、I 章で見たように、第二、三次産業を生業とし、吉里吉里地区外に働きに出る住民も多い吉里吉里地区においては、働き手の 40～60 代が中心になって自治組織を運営していく体制を維持するため、地域内の様々な会議は大半が夜の 19 時以降や休日に行われている。

また、20～30 代の間は全国転勤で吉里吉里（ないしは大槌、釜石等の沿岸）を離れていた人が、転勤から戻ってきたのちに町内会に積極的に参加し始め、現在の町内会の重要な役割を担っている、というケースも多い。

## 1-2. 震災後の変容及び対応～緊急・救援期<sup>48</sup>（避難所運営時期）～

前節で述べたように、吉里吉里地区は、もとより山に囲まれた地形をしており、陸路で隣の地区に向かうためには、トンネルを抜けて山を越えなければならない。しかし、東日本大

---

<sup>45</sup> たとえば 2 丁目では、総務部、自主防災部、環境整備部、青少年育成部、幼年・少年消防隊等がある。

<sup>46</sup> なお、大槌町（2013b）には、町内会の単位で活動している団体として婦人会、老人クラブ、青年会、ておどり会が挙げられており、吉里吉里全体あるいは大槌町全体で活動する組織・団体として吉里吉里国 NPO、若だんな会、消防団、保育園、PTA（小学校・中学校）、教育振興協議会、郷土芸能保存会、神社を中心とした活動組織、お寺の護持会、スポーツ少年団、ボーイスカウト、ガールスカウトが挙げられている。

<sup>47</sup> 解決できるものについては町内会で解決し、難しいものについては公民館や役場に陳情している。

<sup>48</sup> Rebecca Solnit の議論を引き、大災害後の緊急・救援期には「災害ユートピア」が形成される、あるいはその「災害ユートピア」は時間の経過とともに消失するという言説が多数見られる（林 2013 等）。筆者はその言説を完全に否定するわけではないが、この吉里吉里地区においては、緊急・救援期に見られた地域のつながりが、いわゆる「災害ユートピア」のような、災害後に初めて誕生した一時的かつ限定的なものであるとするのではなく、過去からの文脈によって規定され、その後も続いていくものであるという立場を取る。



震災による津波で甚大な被害を受けた吉里吉里地区は、道路が寸断され、孤立状態となった<sup>49</sup>。吉里吉里地区で被災した住民は、地区内にある吉里吉里小学校、吉祥寺、福祉施設などに避難した。

このうち、震災直後に約 400 人<sup>50</sup>が避難した吉里吉里小学校では、町役場が壊滅し行政支援が見込めない中、自衛隊が到達するまでの数日間<sup>51</sup>、自主的に災害対策本部を立ち上げるほど円滑に行われた避難所運営のありかたが全国的にも注目を浴びた<sup>52</sup>。以下に、地区の住民へのヒアリング及び公民館長 H 氏、若葉会会長 NM 氏提供資料、内閣府（2012）記載の当時の吉里吉里小学校校長による報告資料をもとに、具体的に説明する<sup>53</sup>。

被災直後、吉里吉里地区では地域のリーダー層（消防団、消防団 OB、町内会、自主防災会、小学校（教諭））により、自主的に「吉里吉里地区災害対策本部<sup>54</sup>」が立ち上げられた。同対策本部は、図 2-3 のように、消防団長などを歴任した東谷寛一氏を災害対策本部長とし、以下に副本部長（校長も含め数名）、総務班（本部会議、記録連絡）、被災者管理班（名簿管理、問い合わせ対応）、情報班（情報収集、発信・伝達）、食糧班（炊き出し受入、配給）、施設管理班（防火・防犯・ゴミ・トイレ）、燃料管理班（燃料管理・配給）、保健衛生班（医療・介護）、ボランティア班（受入・管理）が置かれた。この体制に基づき、震災後の混乱のなか、リーダー層が中心となって秩序だった避難所運営<sup>55</sup>がなされた。

---

<sup>49</sup> ただし、仮に孤立していなかったとしても、隣の地区も甚大な被害を受けており、震災直後に他の地区から支援を受けることは困難であったと考えられる。ゆえに、以下に述べる震災直後の吉里吉里地区の取り組みは注目に値する。

<sup>50</sup> 公民館長 H 氏提供資料による。なお、同資料によれば、被害のあった 1～3 丁目の住民の約 25%にあたる。

<sup>51</sup> この日数について後述の A 氏は 3 日間と述べている。なお NHK（2015）には「5 日間」とある。いずれにしても数日の間、吉里吉里地区には外部支援が到達しない状況にあった。

<sup>52</sup> たとえば、当時の大槌町立吉里吉里小学校校長であった佐藤良氏の報告が、2012 年に行われた内閣府の「避難所における良好な生活環境の確保に関する第 2 回検討会」の資料として使用されている。また報道関係では、毎日新聞で 2011 年 4 月 14 日に「吉里吉里人」が「独立精神」で避難生活を支え合う」様子が紙面に掲載され、2015 年に NHK で「救援を他人頼みにせず自分たちの力で住民の命を守った吉里吉里地区の自主災害対策本部」を描いたドキュメンタリー「「岩手県大槌町吉里吉里」～待たずに動け 自主災害対策本部～」が制作及び放送されている。

<sup>53</sup> 緊急・救援期の吉里吉里地区の自立的な動きについては、竹沢（2013）にも住民へのヒアリングに基づく詳細な記述が見られる。

<sup>54</sup> 通称が複数存在するが、今回は公民館長 H 氏提供資料の表記に則った。

<sup>55</sup> 後述するが、「災害対策本部」という名称の通り、避難所運営を行うのみに止まらず、町の復旧作業などの活動までを対象として行っている。なお、竹沢（2013）には、このような名称を付けていたことに加え、本来設立されるはずだった役場の災害対策本部が機能していなかったため、当初マスコミに町が設立した災害対策本部だと誤解されたという住民の語りが掲載されている（p.127）。

図 2-3 吉里吉里地区災害対策本部



出典：公民館長 H 氏提供資料より筆者作成

具体的にどのような避難所運営及び復旧作業が行われていたのか、以下に述べる。

震災当日は、校庭に停まっていたバスのエンジンを利用し、電気を避難所に送る仕組みを地区の住民自らで整えた。そのため、初日からある程度の電気使用ができるようになり、暖房が確保された。また、流失を免れた地区の住民がおにぎりや食材を提供した。

震災翌日からは、動く重機を先頭に、吉里吉里地区の住民自ら生活道路の開通作業を行った。ガソリン等も、各自の自家用車には一切補給せず、作業を行う車輛のみに補給を認めた（2015年11月実施のA氏へのヒアリングによる）。生活道路の復旧過程としては、具体的には、行方不明者の搜索、発見された遺体の安置、身元確認、瓦礫の撤去作業を地区の住民らが担った。一方避難所の内部では、若い男性が力仕事を、女性が中心となり炊き出しを担い、避難所に避難した人々や在宅避難者への配給を担った。また、小中学生も清掃など様々な活動を積極的に手伝った。

物資が届き始めてからは、避難所に避難している住民だけではなく、在宅避難者にも物資が行き渡るよう、必要な物資を調査した。そのうえで、在宅避難者へは避難所に避難している住民に遠慮せずに物資を入手できるよう、場所を変えて配布するなどの工夫をした。

また、避難所間で連携を取り合うため、各避難所のスタッフが、どの避難所に誰が避難しているのかを逐一調査し、毎日2度情報共有を行った。この際、自宅の被災を免れた4丁目の住民も、避難所運営に協力した<sup>56</sup>。

以上のように、地域の旧来のリーダー層が統率力を発揮し、避難してきた住民や被災を免れた住民の一部がリーダー層に協力する形で、秩序だった避難所運営を円滑に進めてきた<sup>57</sup>。このような吉里吉里地区の避難所運営のありかたを評して、当時の吉里吉里小学校校長

<sup>56</sup> たとえば、吉祥寺避難所の人員確認を行っていたのは、自宅は流失を免れた若葉会副代表のTS氏であった（2017年2月ヒアリングより）。

<sup>57</sup> 竹沢（2013）には、町内の他の地区において、震災後3～4日経っても暖房が見つからない

の佐藤氏は、前掲の内閣府（2012）資料において「運営状況は、自主的な予想していた以上の素晴らしい活動ぶりであった。特に、地区の若い男性の動きには驚かされた。避難所の受付事務や水の運搬等、昼夜を問わず積極的に動いてくれた。また、本校家庭科室を使い、地域の女性を中心に炊き出しが行われ、避難民への一日 3 食の準備から、自宅避難者への食事の配給まで一手に引き受け、文字通り精力的な活動であった。本当に頼りになった。地震発生の翌週に盛岡赤十字のスタッフが本校を訪れた。救護所とトイレ等を見た後、「こんなに衛生状態のよい避難所はない。県の衛生部にも話しておきます。」と述べていただいた。」と報告している。

この自主災害対策本部が指揮を執る体制は、避難所が吉里吉里地区体育館に移動する 2011 年 4 月 30 日まで続いた。移動後は総務班、物資班、食糧班が引き続き続した。

### 1-3. 震災後の変容及び対応～復旧期以降～

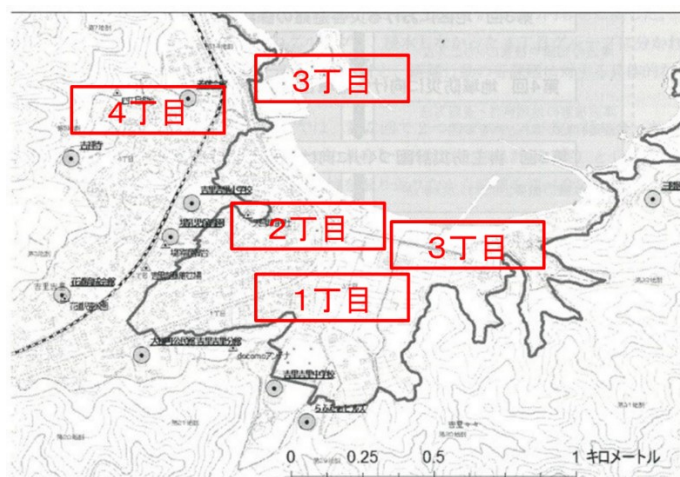
前項では、吉里吉里地区の住民が、緊急・救援期（避難所の運営段階）に自主的に災害対策本部を立ち上げ、避難所運営や行方不明者の捜索、土木事業にあたるなど、震災以前から存在する地域の自治組織のリーダー層を中心としながら、住民がそれに協力し、外部支援を待たずに自ら動く姿を記述してきた。本項では、緊急・救援期の後にも続く、吉里吉里の住民による復興まちづくりの様子について述べる。

先述のように、震災前の吉里吉里地区では、住民の生活に近い分野として公民館と 5 つの町内会による二重の自治が行われてきた。しかし、2011 年の東日本大震災で、町内会の集会場が流されたり、家を流失し別の地区に避難、転居する住民が数多く現れたりしたため、4 丁目の花道育成会、若葉会以外の 3 町内会は壊滅状態になり、現在まで活動ができていない状況にある。

---

どころか毛布もない寒い部屋で過ごしたという避難所や、避難者が我先にと行動し緊張を強いる場面が頻発した避難所など、吉里吉里地区とは対照的な例も描かれている（p.156-161）。

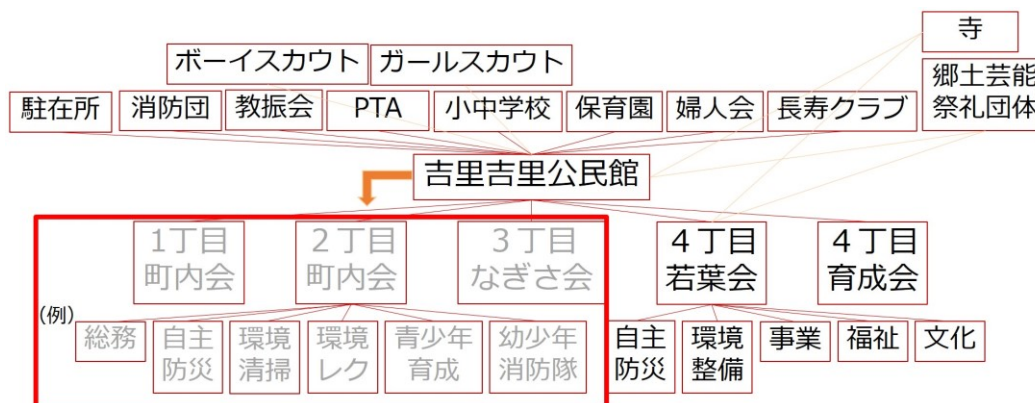
図 2-4 津波浸水域及び該当町内会



出典：大槌町吉里吉里地区自主防災計画（丁目は筆者追記）

しかし、一部町内会が活動停止を余儀なくされても、公民館が各町内会の該当地域に住む住民の数やニーズを把握したり、公民館が旧町内会の垣根を超えた活動を実施したりすることで、旧町内会の活動を、完全にとは言わないまでも、ある程度カバーしようと試みてきた。

図 2-5 吉里吉里地区の自治体制（震災後）



出典：ヒアリング及び公民館長 H 氏提供資料を元に筆者作成

先に、町内会は生活を営む際に必要となる環境整備のパイプ役となる側面と、地域活動参加の窓口を担ってきたと述べた。以下の図 2-6 にまとめたように、震災後、前者については公民館長自ら地区を歩いて確認を行い、解決できるものについては自ら解決し、解決が難しいものについては集約して役場に伝えている。後者については、震災前に各町内会が行っていた活動の全てを実施できているわけではないものの、一部については公民館主催の活動

として開催している。また、それまで町内会ごとに案を出し合っただけの方針を決めていた地区全体の行事<sup>58</sup>については、公民館側から実施を提案し、町内会の垣根を超えて参加できる仕組みづくりを行っている。

図 2-6 震災前後の公民館と町内会の関係性変化

### ◆ 生活の必要（ゴミ、電灯等）

<p><b>震災前</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• 町内会が集約</li> <li>• 解決できるものは町内会で解決、難しいものについては役場に陳情</li> </ul>	<p><b>震災後</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• 公民館長自ら街を歩き確認</li> <li>• 解決できるものは公民館で解決、難しいものについては役場に陳情</li> </ul>
------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

### ◆ 地域活動参加の窓口

<p><b>震災前</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• 町内会ごとの活動</li> <li>• 運動会など、町内会ごとに実施案を議論、公民館協議会に持ち寄り激論の末方針決定</li> </ul>	<p><b>震災後</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• 公民館主催、4丁目主催の活動に他町内会も参加を呼びかけ</li> <li>• 公民館側から実施を提案、町内会の垣根を超えて参加できる仕組み作り</li> </ul>
----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

出典：公民館長 H 氏へのヒアリングをもとに筆者作成

吉里吉里地区では、このような公民館の働きによって、一部の町内会が機能しなくなっても、自治的な活動がある程度維持しようとしている。またそれに加え、今度は公民館が中心となって新たな自治組織（町内会）の再編に動き出している。次項では、その新たな自治組織（町内会）の再編をめぐる展望について述べる。

#### 1-4. 自治組織をめぐる今後の展望

嵩上げ工事が終わり、街並み再建の見通しが立ち始めた 2017 年度より、新たな町内会を再編するための会議が公民館主導で始まった<sup>59</sup>。これは、住所表記（丁目）に拠らず、道路の位置、日常的な行き来のしやすさ、人口比などを考慮して町内会の線引きを行うものである。具体的な再編のエリアを図 2-7 に示した。図 2-7 の赤線は三陸鉄道<sup>60</sup>山田線の線路を指し、線路より山側が 4 丁目の若葉会、花道育成会の所轄範囲である。今回町内会再編の対象

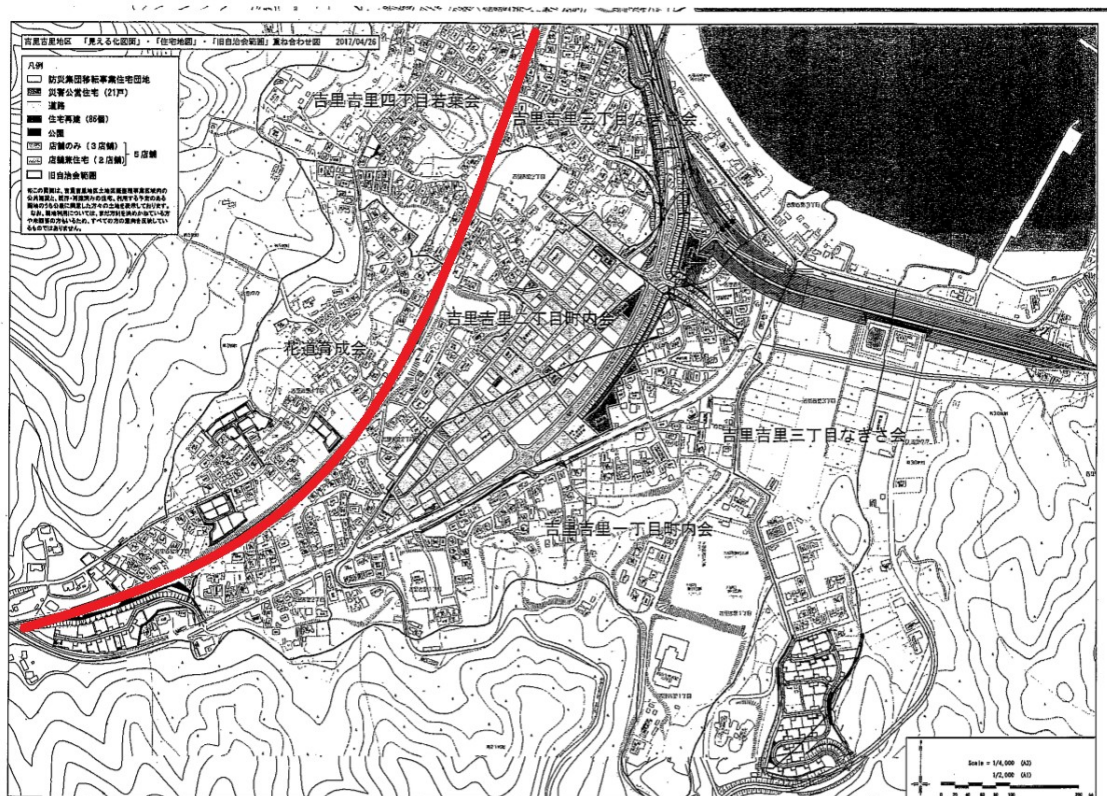
<sup>58</sup> 例として、毎年 10 月第一日曜日に開催される吉里吉里地区大運動会が挙げられる。震災以前は町内会対抗の運動会を行っていたが、震災後は紅白に分け、旧町内会や外部支援者を紅白に振り分ける形で実施している。

<sup>59</sup> なお、大槌町内の他の地区（例えば町方地区の大ヶ口や桜町など）では、行政からの働きかけによって住民に依頼する形で集会場を作ったという。また、町方地区の復興住宅で行政主導のもとで作られた自治会も、住民からは「会ったことがないしよくわからない」という声が聞かれた（2016 年 7 月に実施した町方地区復興住宅在住 60 代女性へのインフォーマルインタビューより）。この町方地区の実情と比較しても、吉里吉里地区の自治意識の強さが明らかになるといえよう。

<sup>60</sup> 震災以前は JR 山田線であった。

となっているのは、先の津波で被害を受けた、線路より下側のエリアである。

図 2-7 町内会の再編



出典：公民館長 H 氏提供資料より筆者作成

この町内会の再編は、もとより公民館側から大槌町役場側に要請していたものであるが、嵩上げ工事が長期にわたって続く中で、街並み再建後の宅地等の資料を町が提示できるようになるまでは実施が難しかった。2017（平成 29）年になって嵩上げ工事が終わったことを受けて、再建後の街並みの見通しが立ったため、漸く当該資料の提示に至り、本格的に再編を議題とした会議がスタートした。2017（平成 29）年 11 月段階で 3 回会議が行われた後、2017（平成 29）年 12 月 17 日の合同拡大役員会（旧各町内会から 5 人ずつが代表として参加）にて、参加者の総意で新たな町内会の区割を決定した。2018（平成 30）年 1 月 18 日には「吉里吉里地区町内会発起人準備会」が開催され、町内会ごとに町内会の樹立に向けた準備を始める。同準備会をもって、これまで続いてきた町内会再編事業は公民館の手を離れ、各町内会に委ねられることとなり、「二重の自治」体制の復活に向けて大きな一歩が踏み出される。また、この機会に、H 氏や旧町内会の会長たちの世代<sup>61</sup>から、次の世代に役員を引き継ぐことを見込んでいる。

<sup>61</sup> 若葉会以外は 60 代。なお、若葉会は今回再編の対象外である。

公民館長 H 氏によれば、2017（平成 29）年度中に町内会の区割り及びその呼称を確定させるという当初の目標は達成される見込みで、2018（平成 30）年 4 月には新たな町内会の総会を実施できる見通しとなっている<sup>62</sup>。2018（平成 30）年度の吉里吉里地区大運動会では、新しい町内会による町内会対抗戦を実現したいとのことであった<sup>63</sup>。また、町内会設立後には、町内会をさらに細分化する班を組織し<sup>64</sup>、近隣同士のネットワークを再編することも一つの課題と位置付けている。

#### 1-5. 小括 「流動的補完性」をもつ地域的結合

これまで見てきたように、吉里吉里地区では、もとより公民館と町内会を中心とする、地縁的なつながりに依拠した自治組織が備わっていたことが、震災後にも活きたといえる。このことについて、「補完性原理」を手掛かりに考察を試みたい。

「補完性原理」は、現在では地方分権を理論的に裏付ける文脈で使用されることが多い。補完性原理という思想の由来は、古代・中世の哲学者であるアリストテレス、トマス・アクィナスなどに遡ることができるが、補完性原理という名称が初めて詳細に論じられたのは、ローマ教皇ピウス（イタリア呼称ピオ）11 世（Pius PP.XI. 治世 1922-1939 年）が 1931 年に出した社会回勅『クアドラジェジモ・アンノ（Quadragesimo Anno）』であると言われる（矢部 2012）。具体的には、「個々の人間が自らの努力と創意によって成し遂げられることを彼らから奪い取って共同体に委託することが許されないと同時に、より小さく、より下位の諸共同体が実施、遂行できることを、より大きい、より高次の社会に委譲するのは不正であると同時に、正しい社会秩序に対する重大損害かつ混乱行為である。けだし、社会のあらゆる活動は、その権能と本性ゆえに、社会体の成員たちに補助を提供せねばならず、彼らを破壊し吸収するようなことは決してあってはならないからである。」（澤田訳、1992）と記述されている。この内容を矢部は、「第 1 に、あらゆる意思決定は、できる限り個人、個々の市民に近いところで行われるべきである、つまり下位にある社会単位ほど優先されるべきである。第 2 に、上位にある社会単位は、下位の社会単位がある機能を行使する能力に欠ける場合、下位の社会単位を「補助」、「補完」する立場に立つ。この場合、この「補助」「補完」する機能は、上位の社会単位の、下位の社会単位に対する義務として位置付けられる。第 3 に、上位の社会単位が下位の社会単位を「補助」する場合であっても、足らざる部分を「補助」ないし「補完」する限度にとどめるべきである。」という 3 点に要約している。

この「補完性原理」は、災害からの復興過程の文脈でも度々使用されてきた。たとえば、岡村（2017）は、国と都道府県、集落の関係性を指して使用しており、また、熊本地

<sup>62</sup> 以上の部分は、2018 年 1 月 17 日に実施した公民館長 H 氏へのヒアリングによる。

<sup>63</sup> 註 58 で述べた通り、震災後は町内会対抗ができず、紅白対抗の形を取っていた。

<sup>64</sup> 旧町内会にも班はあったものの、震災の影響で町内会自体同様に人数の多寡が出てきている。また、旧町内会の班は行政が指定する班と別になっている地域もあり（若葉会）、この機会に整理を試みようとしている。

震の際の情報発信が行われた「2016 熊本地震救援ニュース<sup>65</sup>」では、被災地 NGO 協働センターが行政とボランティアの関係性を指して使用している。

吉里吉里地区の場合、この「補完性原理」を、震災以前の公民館と町内会の関係性にも適用することができるであろう。また、町内会の機能が失われても、公民館が町内会の担ってきた役割の一部を肩代わりしながら新たな地域の自治組織の再編を目指していくありかたは、この「補完性」の関係が固定的なものではなく、従来の関係をそのまま成り立たせることができなくなっても、流動的に機能しうる<sup>66</sup>ことを示している。

以上より、震災を経て一部町内会が機能停止に陥っても、公民館と町内会とが、公民館が従来の活動範囲を一時的に「拡張」することができるような「流動的補完性」の関係にあったことで、従来行われてきた住民主体の活動を完全に喪失することなく維持することができたと言える。

## 2. 震災後の新たな必要（ニーズ）>に回答する復興のありかた

前節で述べたように、吉里吉里地区には震災以前から公民館及び町内会を中心とした自治体制が成り立っており、それが震災後の吉里吉里地区の復興のありかたをある程度支えてきたと考えられる。しかし、当然のことながら、震災後には新たな課題やニーズが顕在化しており、それに対して活動を自ら行ってきた人々もいる。本節では、そうした必要（ニーズ）>に応じて活動を立ち上げた事例に着目していく。

本節では、前節で述べてきたような旧来の地縁的組織を活かし活動を立ち上げた事例と、旧来の地縁的なつながりに拠らず新たな活動を立ち上げた事例に分けて、3名の取り組みに着目しながら詳述する。

### 2-1. 旧来の地縁的なつながりを活かした活動を立ち上げた例

まずは、旧来の地縁的なつながり、すなわち、前節で述べた公民館や町内会など、震災以前から存在した地域を運営する仕組みを上手く活用し、活動を立ち上げた例について述べる。本項では、公民館運営協議会メンバーである PTA 会長の立場に就任し活動を行ってきた A 氏を紹介する。

---

<sup>65</sup> 2016年7月20日取得, <http://blog.livedoor.jp/kyodocenter-kumamotojishin/archives/2016-05-15.html>.

<sup>66</sup> 具体例は1-3. で示した通りである。



### 事例① A 氏（大槌町立吉里吉里学園 PTA 顧問、40 代、福祉職）

A 氏は、震災以前から、2011 年 4 月に PTA 会長に就任することが決まっていた。その直前の 3 月に被災し、自身の近い親戚は皆助かったものの、2 丁目にあった家は津波で流失した。それでも彼は、震災直後から地域のための活動を続けてきた。以下の表 2-1 に、彼が行ってきた活動の一部をまとめる。

表 2-1 A 氏の立場で行ってきた活動の例

時期	活動内容
震災前	スポーツ少年団監督 (2011 年 4 月より PTA 会長就任が決定していた)
震災直後	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自主防災組織（吉里吉里 2 丁目町内会）の情報係として 1 週間働くなど、吉里吉里小学校避難所の中心として活動</li> <li>・仕事関係者（高齢者福祉）が集まって高齢者、災害弱者の把握</li> <li>・学校再開に向けた学校関係者との打ち合わせ（代替避難所の確保、行事への協力等）</li> </ul>
学校再開後 (2011 年 4 月) ~ <sup>67</sup>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学校行事实施の手伝い（学校関係者との打ち合わせ、子供への呼びかけ、地域関係者への呼びかけ）</li> <li>・休日、休暇中の子供たちのケア（週末に行われる学習会やわんぱく広場、夏季休業中に行われるサマースクールなど）の計画、実行</li> <li>・明治学院大学ボランティアの受け入れ（震災直後から毎月）、宿泊場所提供、コーディネート</li> <li>・地域のイベント時に学生が来た場合のコーディネート（明治学院大学、早稲田大学、東京大学など）</li> </ul>

※これらと並行して、PTA 会長の立場で公民館の協議会、公民館主催の活動にも運営側で参加。

※震災前から引き続きスポーツ少年団（野球チーム）では監督を務める。

出典：複数回のヒアリングより筆者作成

彼が震災後に始め、現在も継続している活動の一つに、休日・休暇中の子供たちの居場所づくりがある。これは主に、休日に学校を開放し、小学生の子供たちに学習する場や、地域の中で活動を行う機会を提供するものである<sup>68</sup>。いずれも、震災後に彼が指揮を執り始めた

<sup>67</sup> A 氏は、今年 4 月より吉里吉里学園中等部 PTA 会長を次期会長に引き継ぎ、大槌町立吉里吉里学園全体の PTA 顧問に就任している。

<sup>68</sup> 現在でも、月に 1 回明治学院大学のボランティアが入り、明治学院大学の学生が主導する形で学習支援や遊びの場を提供している。A 氏はそのコーディネートを行う立場である。震災から年月が経つにつれ、ボランティアとしてやって来る学生の顔ぶれも変わるが、新しい学生が来た場合には、活動を一旦やらせてみてフィードバックをしたり、吉里

活動である。

このような活動を始めた経緯について、彼は以下のように語っている。

「最初の頃は子供もあの当時、8歳9歳10歳が大人と同じ体験をしてしまったから、やっぱり子供たちにこれ以上辛い思いをさせたくない。仮設だから勉強大変だから、っていうのが先行したんだよ。今でもそういう親はいっぱい。じゃあこの子たちが就職して大人になった時に、東日本大震災で家無くした子だよ、じゃあ就職させっから。っていう会社があるかつたらない(中略)。サマースクールとかもやってるんだけど、だから勉強する、だから言い訳を作らせたくないんです。仮設で勉強できない。いやいやいや。だったら学校開放すっから。(子供たちは)勝負する場所ここじゃないんだ、って。(中略)被災地は新聞とかでよく(子供たちも)年寄りも学力低下体力低下が著しい、当たり前なんだよそういう環境だから。ただそれを良しとしてる学校側もあつたり、親もあつたり、それはやっぱりだめだよねって気づいた人間がやんなきゃないじゃん。だから、それが役目だったんじゃないかな。

(中略)やっぱり俺らも地域に育てられたって思ってるのよ。周りの人に。家もそうなんだけど、地域の人に怒られながら育ってきたっていうものがあるから、それは決して今思えば悪いことではない良かったと思うから、余計その役としてやってやんなきゃないのかなって思う。」

(2015年11月ヒアリングより、下線部筆者)

実際に、明治学院大学の学生ボランティアが主導する活動において、小学校1年生から6年生まで、毎回30人程度の小学生が集まり、大学生とともに宿題や自主学習に取り組んだり、学年の垣根を超えてレクリエーションに取り組んだりしている様子が見られた(2015年以降複数回の参与観察による)。

A氏自身も上記のヒアリングの中で語っているように、彼は、自分の子供でなくても、ボランティアに訪れた学生であっても、約束を守らない、挨拶をしない、といった態度をとった場合には真摯に怒る。それは、彼自身が地域において親以外の人にも怒られながら育ってきたという経験に基づいている。

なお、これらのA氏主宰の活動に対し、町内で母親を支援する活動を行っており、自身も小学生の子供を持つM氏は、「(震災後に)子供のケアは結構入ってくれてて。学校の方でも大学生とか来て遊んでくれたり、結構子供は子供でやってくれてる。前よりは変わったところ、そうですね。子供にちゃんと目が行くことはあるかもしれないですね。(子供たちの支援は)手厚いですね。放課後預かってくれるようになって。小学校。だからきつと親たちは助かってますね。」(2017年2月ヒアリングより)と語っている<sup>69</sup>。

---

吉里の地域を紹介したりといったサポートも行っている。

<sup>69</sup> このヒアリング自体は、母親のための支援を行う「ままりば」の活動について尋ねる趣旨で行っている。

以上より、A氏は、PTA会長という役職自体は震災以前から就任が決まっていた既存の枠組みであったものの、震災後に顕在化した地域の子供たちに関する問題やそれに伴うく必要（ニーズ）>を自ら「発見」した。そして、自身のPTA会長という立場を活かし、そのく必要（ニーズ）>に対応すべく活動を行ってきたことがわかる。また、これらの活動について、M氏が間接的に評価しているように、A氏が発見した地域のく必要（ニーズ）>に即した「支援」が、他の保護者にとっても役に立ち、地域を支える活動であると意味づけられていることも明らかになっている。

## 2-2. 旧来の地縁組織に拠らない新たな組織を立ち上げた例

震災後の吉里吉里地区における特徴のもう一つに、元々地域の中心として公民館や町内会を通して地域運営に携わってきた人以外にも、震災後にリーダーとして立ち上がってきた人々がいることが挙げられる。本項では、母親のための活動を行う「ままりば」を立ち上げたM氏と、A氏の弟で、「はまぎく若だんな会」の代表を務めるHH氏に焦点を当てる<sup>70</sup>。

### 事例② M氏（ままりば代表、設立時30代、美容師、4人の母）

吉里吉里出身で、震災直後に3人目の子供を出産し、現在は大槌町の母親向けに月1~2回ペースでサロン活動等を企画・運営するM氏（ままりば設立時30代・現在4人の母）に焦点を当てる。

M氏は、震災直後の2011年4月27日に3人目の子供を出産した。彼女自身は、3人目の出産であったため、比較的余裕があった。また、家もぎりぎりのところで流されずに残っていた。しかし、彼女は「他のお母さんたちってどうなんだろう」と気掛かりであったという。そもそも子育ては大変だということに加え、仮設住宅では周りに気を遣うことも多い。また、仮設住宅の集会所には高齢の方々が集まっていて、母親世代は「行けないっていうか。来ちゃだめだよって言われる方だった」ため、ストレスが溜まっているという話を耳にしていたそうだ。

そこで「何かしなきゃ」と思っていたところ、偶然内閣府のインキュベーション<sup>71</sup>に関する記事が岩手日報に掲載されているのを見つけ、「あっこれだ!」と思い、同事業を担う釜石の団体の下で勉強し、2013年2月に個人で「ままりば」を立ち上げるに至った<sup>72</sup>（2017

<sup>70</sup> 2人とも、必ずしも吉里吉里地区だけを対象としているのではなく、大槌町全体を対象とした活動を展開している。ただし2人とも吉里吉里地区出身であり、まちづくりの会議に吉里吉里地区として参加するなど、地域とのつながりは深い。

<sup>71</sup> 2012年に内閣府が実施した復興支援型地域社会雇用創造事業のうち、社会起業インキュベーション事業を指すものと思われる。

<sup>72</sup> 立ち上げ当初の思いについて、M氏は「最初、ただ集めようと思って。で、何か作ったりすれば、興味があるのだけ、家から、仮設から出そうと思って。お母さんたちをとにか

年2月ヒアリングより)。

具体的な活動としては、2013年より、母親が子供連れで集まることのできるサロン活動(趣味、健康、美容など)を毎月2回程度企画、運営している。

また、2017年9月には、託児所の不足などを背景に、「待機児童があったり、介護はあったりとかって言って、働きたくても外に出れない人のために何かできたらいいな」(2017年9月ヒアリングより)という、ままりば立ち上げ当初からの思いが遂に実現へとつながり、母親が自宅に居ながらにして行える内職の仲介を始めている。

このように、M氏は、震災以前に存在していた地縁的なつながりでは網羅できていなかった母親たちが抱える〈必要(ニーズ)〉を「発見」し、それらを解決するべく活動を行っている。

表2-2 ままりば(M氏)の立場で行ってきた活動の例

※2013年2月設立

時期	活動内容
2013年2月～	母親たちが集まれる場づくり (月2回のサロンイベント開催。趣味や美容、料理など)
2015年頃	活動拠点「ままりば」の建設
2017年9月～	母親たちの内職の仲介

出典：複数回のヒアリングより筆者作成

図2-8 ままりばの活動拠点



出典：2017年7月筆者撮影

く。こもりっきりだとストレスがたまるし。で結局子供に当たってしまうし。で、外に出そうと思って、で何をやったらいいかなっていうので考えながら」と語る。

### 事例③ HH氏（はまぎく若だんな会代表、40代、自営業）

自営業のHH氏（40代）が代表を務めるはまぎく若だんな会は、経済産業省の「グループ型補助金<sup>73</sup>」への採択を目指す大槌町内の若手自営業者が集まったことが結成の最初の契機である。彼は会の結成時の様子について、以下のように語る。

「途中から、俺らがいつもこう毎日（補助金の獲得に向けて）どういの申請しようかって会議してるときに、これってほんとに町のことを本気で考え始めるきっかけだったんだよね。変わったのわかったもんね、途中から。こういうことやったら元気になるよな〜とか、今必要なものが何なんだろうなって、本気で議論。（中略）メンバーの中で本気が出てきた、変わってっから形になってるし、本気で考えたから責任もあるし、やらなきゃない」（2017年2月ヒアリングより）

このように、HH氏が代表を務めるはまぎく若だんな会では、「グループ型補助金」への採択を目指す真剣な議論の過程で、地域に起こっていた課題や〈必要（ニーズ）〉を「発見」した。そして、それを「やらなきゃない」と、「発見」した〈必要（ニーズ）〉の解決に向けた取り組みを行ってきた。以下に活動の一部を紹介する。

表 2-3 はまぎく若だんな会（HH氏）の立場で行ってきた活動の一部  
※2012年10月結成

時期	活動内容
2013年12月～	地域見守り隊活動 <sup>74</sup> （釜石警察署に申し出を行い、委嘱を受けて、メンバーが仕事時に使用する車輻に青色回転灯を設置し、町内の防犯パトロール活動を実施。）
2014年2月	大槌お宝マップの作成、配布 （大槌町内の観光スポット、郷土料理や食材、大槌に生息する動植物の情報、家族での防災についてメンバーが知識を出し合い、情報を集めて制作。町内の小中学生や保育園児 900人余に無料配布。現在も町内の書店で購入可。）
2014年5月～	ふるさと科の講師 （震災で失われた郷土を見つめなおし、復興への力になるようにと、大槌町が町内の小中学校で独自に行うカリキュラム。年に数回メンバーが講師を務め、大槌お宝マップに基づいた座学や、大槌の山の恵み、海の恵みを現地で学ぶ体験学習等にメンバー各自の経験やネットワークを駆使して協力。）

<sup>73</sup> 中小企業組合等共同施設等災害復旧事業（グループ補助金）。

<sup>74</sup> 2014年10月に「安全安心なまちづくり関係功労者内閣総理大臣表彰」を受けている。

<p>2013年～ 4年連続開催 ※2018年度以降は防潮堤建設のため、開催については不透明である</p>	<p>砂の芸術祭 (20年程前まで行われていた、吉里吉里地区夏の恒例イベントで、砂像を作るコンテスト。震災後に海を怖がる子どもの姿を目の当たりにし、「海の楽しさや豊かさを感じてもらう機会を設け、子ども達が海に親しんでほしい」と2013年に復活させる。地元住民による屋台が出て、海開きや海岸での映画祭も併せて行われ、地域内外から多くの人が集う一大イベントになっている。筆者も2016, 2017年に参加。2016年には震災後初めて参加者で地曳網を引いた。)</p>
<p>2012年以降～</p>	<p>地域の窓口 (役場を通すと実現までに時間がかかってしまう地域の人を巻き込んだイベントの窓口として機能。最近の目立ったイベントでは、桐谷健太の「海の声」撮影協力、EXILEのダンスレッスン、映画撮影協力など。)</p>
<p>(2017年～)</p>	<p>(キッチンカー貸出) (※HH氏が代表となって新たに作られた一般社団法人 COLERE による。町内でキッチンカーを使ったコミュニティ・ビジネスにチャレンジする若者や起業・事業再開を目指す飲食店経営者の支援を目的に、役場と共同で始めたもの。)</p>

出典：HH氏へのヒアリング、「はまぎく若だんな会パンフレット」より筆者作成

図 2-9 大槌お宝マップ



出典：「はまぎく若だんな会パンフレット」

これらの活動の中で、たとえば「砂の芸術祭」は、表 2-3 でも簡単に記した通り、震災後に海を怖がる子供たちの姿を目の当たりにしたことが契機となっている。以下は砂の芸術祭に関連する HH 氏の語りである。

「なんで砂の芸術祭かっていえば、(町内で) 唯一残った砂浜で、全国世界の人たちがボランティアできれいにしてくれて、でも町としては海開きっていう壁があって。で子供たちも海に行きたくても怖いとか、親も行くな、子供も危ないっていう、でもそれってなんなんだ

ろうな一とかって思って。楽しいことだけ教えるのっておかしいよなって、やっぱりあれだけ怖い思いをして、つらい思いをしてるけど、やっぱり海のそばだし、海と一緒に生きていかなきゃないっていうことを子供たちに教えていかなきゃないよなー、それ大人、俺たちしかできないよなーって思ったの。」

(2017年2月ヒアリングより)

このようなきっかけで復活した「砂の芸術祭」は、毎年100人を超える人々が参加し、海辺で楽しむ様子が報告されている（はまぎく若だんな会 砂の芸術祭実行委員会 2014等）。実際に「砂の芸術祭 2016」「砂の芸術祭 2017」では、大勢の子供たちが砂像を一生懸命作ったり、砂像づくりもそこそこに海に飛び込んでゆく様子が数多く見られた（筆者の参与観察による）。また、同日には「海と森の映画祭」も開催し、はまぎく若だんな会は協賛として、前日、当日（終日）、翌日のイベント運営及び準備、片付けに携わった。これらのイベントでも、地域で活動する団体が演奏や演出を行ったり、伝統芸能を披露したり、屋台や映画祭を皆で楽しむなど、大きな盛り上がりを見せていた。



図 2-10  
砂の芸術祭・海と森の映画祭 2016 の  
一場面  
出典：左/T.S 氏撮影、下/筆者撮影



現在では、町内に存在を知らない人はいないほど、はまぎく若だんな会が地域で果たしてきた役割は大きい。また、その「顔」として、HH氏は何かと注目される機会が多く、仕事を依頼されることも多い。それでも彼は、冒頭で述べたように、あくまで地域のためにできることを本気でする、という姿勢を貫いている。

以上の二人の事例では、震災後に生まれた、あるいは震災以前から存在していた可能性は

あるものの表面化していなかった問題を「発見」し、そこに既存の枠組みでは解決できない<必要（ニーズ）>を見出した。そして、それぞれが「発見」した<必要（ニーズ）>に対応する活動を継続的に行っている。

このような活動に対する地域住民の受け止め方も肯定的である。ままりばについては、公民館長 H 氏<sup>75</sup>が「若いお母さんたちのことは任せている」（2017年7月ヒアリングより）と評している。また、はまぎく若だんな会については、頻繁に「こういうことはできないか」という問い合わせが届く。HH 氏自身は「求められなければ自然となくなればいいし、だれか若い人たちがこう継ぎたい、引き継いでいきたいっていったら引き継げばいい」（2017年2月ヒアリングより）と述べているが、現状、はまぎく若だんな会に求められる役割は大きい。いずれも、彼らの「発見」した<必要（ニーズ）>に即した活動が、地域にとっても意味を持っていることが明らかになっている。

### 2-3. 小括 住民自身による<必要（ニーズ）>の発見と継続的な応答

本節ではこれまで、吉里吉里地区の住民が震災後に様々な契機で<必要（ニーズ）>の存在を「発見」し、それらに応答しようとしてきた様子を描いてきた。その応答の表れ方として、旧来の地縁的なつながりを上手く活用した事例や、旧来の地縁的なつながりでは網羅しきれない部分については新たな団体を立ち上げ活動にあたる事例を紹介した<sup>76</sup>。ここで重要なのは、吉里吉里地区の住民自身が<必要（ニーズ）>を「発見」し、それに対して自分たちの手で解決しようとしている点である。そのプロセスで行政や外部支援者の手を借りることはあっても、行政や外部支援者が「これをやれ」と指示することも、自分たちが「発見」した<必要（ニーズ）>を全て行政や外部支援者に委ねてしまうことも、決してしない。言われてやる、依頼して終わりにするのではなく、あくまで住民自身が主導権を握りながら<必要（ニーズ）>を「発見」し、対応を続けていくのである。

ここで翻って、前節「地縁的なつながりに依拠した復興のありかた」で明らかにしてきた公民館及び町内会の「流動的補完性」について改めて確認する。この「流動的補完性」その

---

<sup>75</sup> なお、前節の註でも述べたが、公民館長 H 氏の取り計らいによって、震災後の 2016 年には大槌町内や吉里吉里地区内で重要な組織となった団体の代表（NPO 法人吉里吉里国理事長やはまぎく若だんな会会長）や、行政の組織のなかでも住民の生活に密着している領域の人々（民生委員）を新たに公民館運営協議会のメンバーに加えている。今後も、各町内会の自主防災組織の長などをメンバーに加えるか検討しているとのことであった。ままりばの M 氏は、公民館運営協議会には参加していないものの、町のまちづくり関連の会議には招聘され、ともに吉里吉里地区所属として参加している。

<sup>76</sup> 旧来の自治組織に依拠した復興を行う場合、ともすると、それまでの地縁的なつながりではカバーできていなかった<隙間>（似田貝 2008b）が見過ごされてしまう危険性がある。しかし吉里吉里地区の場合、その<隙間>を別の住民が「発見」し（=<必要（ニーズ）>の「発見」）、それを旧来の地縁的なつながりの側の人々も評価し、地域の活動に巻き込んでいくことによって、地域全体として捉えたときに、比較的<隙間>の少ない地域運営がなされているとも説明することができるだろう。



ものも、旧来の地縁的な組織の内部（本事例では公民館）において、主導権を握りながら＜必要（ニーズ）＞を「発見」し、対応を続けていく吉里吉里地区の住民の存在なしには起こり得なかったはずである。この観点から言えば、＜必要（ニーズ）＞に直面した時の吉里吉里地区の住民がとった行動は、旧来の地縁的なつながりへの依拠の有無にかかわらず、実は同一であったといえる。

このことから、旧来の地縁的なつながりに基づく組織に依拠しその範囲内で復興を目指した活動を行う場合、及び震災後に「発見」された新たな＜必要（ニーズ）＞に応答する場合のいずれにおいても、吉里吉里地区住民が主導権を握りながら＜必要（ニーズ）＞を「発見」し、対応を続けていくことが、吉里吉里地区の復興を支える鍵となっていると考えられる。

次章以降では、住民のこのような行為を可能にする思想や、その思想が形成され維持されていく背景について詳しく分析していきたい。

### Ⅲ 考察 — 「当たり前」を軸に一

#### 1. 「当たり前」を「拡張」する住民のありかた

前章で述べてきたように、吉里吉里地区では、住民自身が主導権を握りながら必要（ニーズ）を「発見」し、対応を続けていくその過程において、新たな活動を生み出している例が現在進行形で見られている。本節では、この根底にある思想を明らかにしていく。

##### 1-1. 「当たり前」のことを「当たり前」にする住民

住民自身が主導権を握りながら必要（ニーズ）を「発見」し、対応を続けていくという、吉里吉里地区の住民のありかたを支える思想について、前章で事例を挙げた大槌町立吉里吉里学園 PTA 顧問 A 氏の言葉を手掛かりに考察する。

A 氏は、「被災者がいつまでも被災者であるのではなく、「支援」者にならなくては、地域の復興はあり得ない」という。以下の部分は、なぜ被災者が「支援」者にならなくてはならないのかという点に関する A 氏の語りである。

「外部の支援者っていうのは一時的には多く入ってくるんだけど、だんだんだんだん少なくなってく中で、はい少なくなりました、はいじゃあ自分たちでできますか、ったらそうではないんだと思うんだよな。そのなかでやっぱり、人がいっぱい入ってきてる中でも動いていかないとだめなんだろうな、というところ。やっぱり自分たちのところは自分たちで守るっていう意識がないと。(中略)ただ被災者ですって座ってるとかなにしたらいいんだろうとかこれからどうしたらいいんだろうって不安に思ってるよりは動いていた方が、そういう意味で、だからそれがたとえば、自分のためにしかならないではなくて、誰かのためになったり。っていうのがひとつの「支援」っていう意味にもなるんだろうし。で、そうすることによって、今何が必要かっていうのが各々がわかってくるし、考えるようになる。そうすれば、外部から何したらいいですか、何でもしますよ、ってボランティアが来た時に、じゃあこれ手伝ってちょうだいとかじゃあこれ一緒にやろうっていう発想が出てくる。それを、ただ被災者だっただけでなると、何してほしいも出てこないんだよね。全部してほしいから。」  
(2016年12月ヒアリングより)

災害直後であっても、「支援」を行うことによって、外部の支援をただ受容するだけではなく、自分たちに何ができて何ができないのか、何が必要で何が必要でないのかを判断することができる。また、やがては撤退していく外部支援に頼らずとも、自分たちで自らの地域の復興を考えていく契機となり得ることがわかる。彼が述べている通り、現実には外部支援者が減少している<sup>77</sup>中で、彼の思想の重要性は増している。

ただし、彼の言う「支援」とは、何か特別なことをすることではない。どんなに多く外部から支援の手が届いても、「被災に遭ったから当たり前のことのできないのではなくて、当

---

<sup>77</sup> 第 I 章冒頭参照。

たり前のことを当たり前に」することだと述べる。ゆえに彼は、災害弱者と呼ばれる子供であつても高齢者であつても「支援者」になれるという。

加えて、彼にとっての「支援」は、必ずしも災害直後の緊急支援期にのみ適用される考え方ではない。彼自身にとつても、震災直後から現在に至るまで「当たり前」のことはする、という形の「支援」が続いているのである。彼は、震災直後に止まらず、その後もずっと、PTA 会長という自分の立場を通して、「支援」をしてきた<sup>78</sup> <sup>79</sup>という。彼自身は、自らが行ってきた「当たり前」たる「支援」について、以下のように語っている。

「震災で町がなくなったんだけど、6年生にしたら最後の運動会ができた、っていう思いの  
方が、(中略)震災前と同じ行事はすべて、小さくても、種目が減ろうが午前中で終わらせ  
ようが、やろう。やらないっていう思い出にはしたくない。規模は小さいのはあつたけど、  
ほとんどの行事はやらせてもらったし、やってきたし、そうすればやっぱり、子供たちにし  
ろ、地域の人にしろ、それが力になってきたところはある。町でも祭りがなかったとか、運  
動会中止にしたとかっていうのは後々聞くけど、ただできえ「負」なんだけどマイナスなん  
だけれど、「震災で何もできない」っていう思い出にしたくないっていうところがあるから、  
その線はぶれないで、不自由だけどやったっていうふうな記憶にしたいっていうのが。  
だからそれがもう積み重ねじゃない。去年できて今年できないっていうのは絶対ないわけ  
で。だから、去年あんだだけ大変なんだけどここまでできたから、今年はまだ少しできるよね、  
っていうふうに、それが毎年の積み重ねで今がある、のかなあと思うのよね。」

(2016年12月ヒアリングより)

A氏のように、自身の活動について「当たり前」のことであると語る住民は多い。たと  
えば、以下のような語りである。

---

<sup>78</sup> なお、彼は「(地域で中心になっている人は)仕事と思つてないんだと思う」という語  
りをしている(2016年12月ヒアリングより)。この発言からもわかるように、ここでい  
う「支援」は、あくまで、彼の言う「当たり前のことを当たり前」するという文脈で使  
用しており、意識的な行動や規範的な行動ではないという点については指摘しておきた  
い。

<sup>79</sup> 岩崎(2013)にも、津波で被災した保育者が支援者となって活動を続けた例が挙げられ  
ている。しかしこの場合、その保育者を支えているのはあくまで「保育者である」という  
職能意識である。「被災者であり、支援者という立場は厳しかった」という発言や、「本人  
は必死だけど被災者同士ではだめで、第三者の存在(筆者註：ここでは被災者ではない  
NPOや主婦グループ)があつて(中略)頑張った」という様子が描かれており、A氏の発  
言で見られるような、吉里吉里地区住民のような、住民相互に「当たり前のことを当たり  
前に」するという「支援」とは、質的に大きな差異がある。

「大したことやってるわけじゃないんだけどね<sup>80</sup>、なんか当たり前のことしかっていうか」  
(はまぎく若だんな会会長 HH 氏・2017年2月ヒアリングより)

また、直接的に「当たり前」という言葉を使用しているわけではないものの、「この地域はこのような地域だから」というように、震災以前に存在したであろう地域のありかたを語り、それを実行するのは「当たり前」のことであるという趣旨の語りも数多く見られる。たとえば、以下のような語りである。

「(吉里吉里では) 誰がどういうノウハウを持っているか頭に入っているから、すぐに担当を決めて行動ができる。トップが決まって自分が何をしなきゃいか決まってるから (いかなるときでも) それで動く。」

(公民館長 H 氏・2017年2月ヒアリングより)

ここで重要となってくるのが、そもそも吉里吉里地区の住民にとって「当たり前」に行われていた営み(活動、行為、それらを支える風土等)が何を指しているのかという点である。そこで次項では、再構成<sup>81</sup>された「当たり前」、すなわち震災前の姿として住民が震災後の時点から想起する「当たり前」の営み、そしてその営みが行われていた「日常」がどのようなものであったのかという点を明らかにする。そのうえで、彼らが震災後に「当たり前」のものとして行っている活動や行為のありかたについて、改めて議論していきたい。

## 1-2. 住民にとっての「当たり前」の営みとは何であったのか

前項で述べたように、本項では、震災後に再構成された「当たり前」のありかた、すなわち吉里吉里地区の住民にとって、震災前に「当たり前」に行われていた営み(活動、行為、それらを支える風土等)が何を指しているのかについて、筆者が行ったヒアリングを元に検討する。そのうえで「震災前の吉里吉里の姿」として、吉里吉里地区の住民が震災後の時点から想起する「日常」の状態を描き出す。

そこでまず、筆者がこれまで(2015年11月~2018年1月)に行ってきたヒアリング結果を参照し、震災後に吉里吉里の住民が語ったかつての吉里吉里の「日常」の例について、以下のようにまとめた。

---

<sup>80</sup> HH 氏自身はそのように語るが、若だんな会の活動のために、本業の事業の時間や労力が削られていることを地域住民に心配されている様子が浅川(2016)に描かれている。

<sup>81</sup> ここで再構成という語を使用しているのは、住民の語りの中で「当たり前」であるとされているものは、震災以前には当たり前すぎてそもそも認識すらされなかった可能性が高いからである。ここで「これが吉里吉里の「当たり前」であった」と語られるものは、あくまで震災後という「事後」の時点から過去を振り返ったうえで、「事後」の視点で捉えられ直した(=再構成した)「当たり前」であるというニュアンスを含んでいる。

図 3-1 吉里吉里地区住民により再構成された「当たり前」の営み（＝「日常」）の例

<p>複層的な「回帰的な時間」</p> <p>&lt;場所性&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"><li>- 景観(海)と景観に紐づく経験の履歴</li><li>- 生業とのかかわり</li><li>- 帰ってくる場所(日常の仕事、進学や就職で一度離れた後)</li></ul> <p>&lt;機能性&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"><li>- 隣近所との「顔の見える」付き合い</li><li>- 地域を把握する力</li><li>- 地域が子供を育てる</li><li>- 潜在化されたニーズ</li></ul> <p>&lt;地縁的結合&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"><li>- 独立心の強さ、閉鎖性</li><li>- 強力なリーダーの存在</li></ul>
-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

出典：ヒアリングデータを元に筆者作成

住民が想起する「当たり前」の営みや、それらが行われる「日常」は、「回帰的な時間」（川島 2011）として説明可能であろう。「回帰的な時間」については、社会学者の植田今日子が、川島（2011）を踏まえ、「季節や年中行事のようにまったく同じではないものの、繰り返し同じ周期がやってくるものが想定された、過去から未来に向かって繰り返しらせん状に進行していく時間」（植田 2013）と定義している<sup>82</sup>。植田は、新潟県中越地震で被害を受けた山古志村の牛の角突きや、東日本大震災で被害を受けた福島県相馬市の相馬野馬追が災害後にも遂行されることを事例として挙げ、祭礼が持つ（1）毎年ハレの日の神事としてのルーティンであると同時に、準備段階（牛の世話など）も含めると必然的に（2）日常的なルーティンでもあるという性質を踏まえ、「震災下での祭礼の遂行はふたつの意味で回帰的な時間を作り出す」という。この文脈からも明らかのように、「回帰的な時間」は、単に毎年同じ行為を遂行するという意味でのルーティンのみならず、日常的なルーティンを伴っている。

植田は祭礼を事例として挙げているが、この「回帰的な時間」は、祭礼のみに当てはまる時間感覚ではない。吉里吉里地区でかつて存在していた「当たり前」の営みも、毎年行われるルーティンと日常のルーティンから成る複層的な「回帰的な時間」によって支えられていたと考えられる。この点は、筆者が行ってきたヒアリングからも明らかである。

吉里吉里地区において聞かれた、「回帰的な時間」に該当する語りとしては、毎年10月第一日曜日に行われていた吉里吉里地区大運動会についての語り（「運動会は町内会が（費用やスタッフを）出し合っていて」「参加率大賞っていうのがあって、町内会ごとの参

<sup>82</sup> 植田はこれに対して、「過去から未来にむけて」直線的に流れる予測のつかない時間」のことを「直線的な時間」と定義する。「直線的な時間」は、具体的には、いつまで避難生活が続くのか見通せない、次はいったいどんな困難が待ち受けているのか予想のつかない、といった時間のありかたを指している。（p.54）

加率で表彰する。そのために、各町内会の役員は一軒一軒声をかけて回るんだ」、公民館長 H 氏) や新年交賀会に関する語り(「私は新年交賀会を1月1日にやった、ずーっとね。全部の地区が、会費制でね。会費は1000円で。あとはお母さん方、各地区にも手伝ってもらいながら。これが公民館行事の一つだから。(中略)私の場合は地区の新年交賀会をしなければ俺の正月はないと、そういうつもりでずっとやってきました」、TA 氏) のように、地域で行われる年中行事とそれに向けたプロセスに関する語りや、毎月行われる地域の清掃活動や学校行事に関する語りなどが該当する。日常のルーティンでは、子供たちが学校行事に一生懸命に取り組む様子や親が子供の将来を気に掛ける様子(A 氏)、インフォーマルインタビューの中で聞かれた、それぞれの仕事の様子や子供を学校に送り出す様子の語りなどが該当するであろう。

もちろん、直接的に毎年あるいは毎日のルーティンに言及しているものでなくても、「回帰的な時間」を構成している要素は数多く存在する。それらを、図 3-1 のように、〈場所性<sup>83</sup>〉〈機能性<sup>84</sup>〉〈地縁的結合<sup>85</sup>〉の3点に整理した<sup>86</sup>。

〈場所性〉とは、吉里吉里という場所に紐づけられた「日常」である。たとえば、「山があつて海があつて自然が豊かで」(A 氏)「私は毎朝来て鯨山<sup>87</sup>のすがすがしい山さ見てここ(デイケア施設)さ入るわけ」(80代利用者)「海と一緒に生きていかなきゃない」(HH 氏) という語りからは、吉里吉里を特徴づける景観があり、それと紐づいた日常的な経験が蓄積されていることが読み取れる。また、第 I 章でデータを示したように、吉里吉里地区では第三次産業に従事している人が多いものの、かつては「半漁半農」の地域であり(TA 氏)、漁を生業にしている人々や、漁師と飲食店を兼ねている人、自家用として漁に出ている人も一定数いる(公民館長 H 氏及び MF 氏)。彼らにとっては吉里吉里という場所そのものが生きていくための糧を得る場所である。また、吉里吉里地区で暮らす第三次産業従事者には町外で働く人も多く、彼らにとって吉里吉里は毎日仕事から帰ってくる場所である。また吉里吉里地区の場合、進学や異動を機に地域を離れる人も多い(MK 氏や S 君)。彼らにとっては、日常の労働とは違った文脈で「帰ってくる場所」であり、「帰ってくることのできる」場所

<sup>83</sup> ここでは、Edward Relph の「没場所性 (placelessness)」(1999) を意識し、これに相対するものとして、「経験」を伴う「場所」というニュアンスで〈場所性〉を位置づけている。

<sup>84</sup> 「機能」という用語自体は、総務省(2017)において記述がみられる、「地域運営組織」が持つ特徴として、「地域の課題の解決を「実践・実行」する」(=「地域の運営」)及び「自ら考え、意思決定する」(=「地域の自治」)の2つの「機能」を持つという表現に示唆を得ている。すなわちここでいう〈機能性〉は、これら2つの「機能」を具現化している活動という位置づけをしている。なお、「機能」という言葉を使いながらも、その実態は生活感覚を伴っている営みだという点については改めて指摘しておきたい。

<sup>85</sup> 〈機能性〉との境界線が曖昧であるが、ここでは、地域における先述の〈機能〉の実現を支える風土や地域の構造を指して使用している。

<sup>86</sup> 3点に分類し、以下の部分では代表的な語りを記述してはいるものの、複数の観点にまたがる発言も数多く見られる。

<sup>87</sup> 大槌町吉里吉里にある山。

でもある（いずれも若葉会で役員を務める、NM氏の「2年くらいの（会社の）研修が終わってから参加した」、TS氏の「高校終わって埼玉で就職。10年ほど草加に住んでたんだけど、そっからはまあ離れてたんだけど、11年までまた釜石に転勤してきて、そっからまた町内会に参加して。っていう感じかな。」という語りなど）。

<機能性>とは、吉里吉里という地域がもつ機能が住民の生活の環境維持や利便性向上に寄与してきたという面での「日常」である。たとえば、「みんな知り合いで声をかけてくれる」（M氏）、「コミュニティはあるのが当たり前で「コミュニティだ」と意識したことがない」（A氏）、「困っている人がいたら助けるのが当たり前」（HH氏）という語りや、「子供たちの健全育成と生活環境」を目的に若葉会が設立されたこと（NM氏やTS氏）、「地域で誰がどこに住んでいるかは把握している」（公民館や若葉会など）「地域を歩いて電気が切れていないかとかチェックする」（公民館長 H氏）といったように、地域の「顔の見える」関係や、実際の住民の生活環境向上に寄与する活動をしてきた旨の語りが該当する。また、地域で子供を育てるという観点の語りも非常に多くなされ、「大人が子供に教える」「（自分も）地域に大きくしてもらった」「他の家の子供でも怒る」「叱ってくれてありがとうという関係」「地域で子供を育てる」（MF氏やA氏、HH氏など多数）という機能を吉里吉里という地域が「日常」的に担ってきたことがわかる。一方この<機能性>には、震災以前には必要（ニーズ）>が「発見」されず、潜在化したままになっていたという「機能」（M氏の「町内会には女性はあまり参加しなかった」「震災前から母親たち向けの活動はあまりなかった」という趣旨の語りなど）も含んでいる。

最後に、<地縁的結合>である。第I章でも紹介したように、吉里吉里は元々独立心の強い地域とされてきた。これについても、住民の語りの中に見られる<sup>88</sup>。「独立心が強い」という語りが多く聞かれたことはもちろん、「震災前は外の人に来ることはなかった」（公民館長 H氏）「まとまりがあるのと、その裏返しで閉鎖的なのと」（F氏）、という、ある種閉鎖的な側面を示す語りも見られた。一方、この「独立」を担保しているのが、住民自身が地域のことをよく知り、地域で必要なことを自分たちで成し遂げてきたという点にあると、複数の語りから読み取れる。たとえば、「自分たちの地域は自分たちで守る」「行政からお金をもらわなくても自分たちで全部まかなってやってきた」「必要なものは自分たちでつくる」（公民館長 H氏）という。また、吉里吉里においては「動ける町内会」（公民館長 H氏、A氏）であることが必須で、「先輩たちから教わり」（公民館長 H氏）ながら、「若い人たちが主力」（TA氏）となっていくという語りにもあるように、このような「独立」を支える組織が形

---

<sup>88</sup> ただし、これには世代による差が大きいと考えられる。例えば、ヒアリング時に20～30代であった住民は「それほど地域の差は意識していない」という。40代には「閉鎖的ではない。住みたいと思ってもらえるまちにしたい」という住民もいれば、「吉里吉里は吉里吉里だ」と語る住民もいる。普段は意識していないと語りつつも、「祭りはやっぱり吉里吉里の方がいいなあ」と語る住民もいる。60代以上になると、比較的「吉里吉里」と他の地区を区別して呼んでいるという印象を受けた。とはいえ、必ずしも他の地区を排除するという文脈で語られるわけではない。

骸化しないような取り組みもなされている。そして、この「独立」を支える存在として不可欠なのが、地域における強力なリーダーの存在である。彼らは、自らの「仕事と両立」しながら（NM氏ら多数）、「リーダーは本気でないと地域の人に認めてもらえないし、認めてもらえた人でないと地域のことはできない」「死に物狂いでやらなければ」（H氏）「行動が伴う」「行動することが染みついている」（TA氏）というように、常日頃から本気で地域のために尽力する。また、地域で活動を行う際には、「何の活動をするにも、最終的に公民館や町内会を見ている<sup>89</sup>。子供の活動をするとき子供だけ見てはダメ。吉里吉里はそれをやっている地域。最低限のことしかしてないと、来やすい人しか来ない。それでも活動は活動だから成り立つけど、めんどくさいけどそういうこと（工夫）をしていかないと一緒にはなれない。」（A氏）という語りにも表れているように、リーダーたちは地域住民を巻き込む工夫もしている。そのような過程を経て、リーダーたちの姿勢が吉里吉里地区全体の「日常」を形成する契機となっている。

このように、震災以前の吉里吉里地区の「当たり前」の行為がなされる「日常」は、毎年行われるルーティンと日常のルーティンから成る複層的な「回帰的な時間」によって支えられていたものであったことを、「回帰的な時間」そのものと、それを支えうる〈場所性〉〈機能性〉〈地縁的結合〉の観点から整理してきた。次項では、本項で整理した「当たり前」が指す営みを踏まえ、震災後に語られた「当たり前」について、より詳細に分析を深めたい。

### 1-3. 「当たり前」の営みの質的転換

本項では、前項（第2項）で確認した吉里吉里地区で再構成された「当たり前」の営み（＝「日常」）を踏まえ、再び第1項の吉里吉里地区住民の語りを参照し、語りのなかの「当たり前」を再検討していく。

先に、A氏自身にとっても、震災直後から現在に至るまで「当たり前」のことをする、という形の「支援」が続いていると述べた。しかし、前項の引用部分（本稿50ページ参照）を注意深く捉え直すと、同じ「当たり前」という言葉であっても、その営みが指しているものは質的な転換を遂げていることがわかる。

まず、最初の「震災前と同じ行事はすべて、小さくても、種目が減ろうが午前中で終わらせようが、やろう。やらないっていう思い出にはしたくない。」という部分では、震災以前

---

<sup>89</sup> 具体的にA氏の場合、子供たちやその親が地域の活動に参加するように、学校側が仕掛けとなるような工夫をしていると述べている。たとえば、吉里吉里地区全体の祭りでは、町内会だけで呼びかけを行うと、親の都合に左右されて出席できる子供と出席できない子供が出てきてしまうため、部活動関係者や教員へも協力を要請しながら、子供たちが参加できるような環境をまず整え（部活を休みにする、先生たちも参加するように依頼するなど）、それに親も付いて来ることでより多くの住民を活動へと巻き込んでいくと述べていた（2017年6月ヒアリングより）。なお、この具体例そのものは、震災後の活動の様子を指している。



の同じ行事を参照した際に、それまで存在していたものを最低限きちんと守り、継続させようという意味で「当たり前」の営みが語られる。しかし、後半の「去年あんだだけ大変なんだけどここまでできたから、今年はまだ少しできるよね」、そして、「それが毎年の積み重ねで今がある」という部分からは、単に継続するだけではなくて、前年を超えよう、という「当たり前」の営みが、毎年積み重ねられていることが読み取れる。つまり、前者の「当たり前」は、現在の視点から震災前に「あったはず」の「当たり前」の営みを再構成し—この部分では「回帰的な時間」が再構成された「当たり前」に相当する—、その「当たり前」が喪失または喪失の危機に瀕したときに、それらを蘇らせるか、あるいは途絶えることなく継続することを目指す行為を指す。一方で後者の「当たり前」は、前年を参照点としながらも、それを「超えよう」とする営みである。その過程に依拠する以上、この「当たり前」は、震災前にあったはずのものを現在の視点から再構成し、蘇らせるか継続するという性質のものではない。結果的には震災前と同じものを復活させたことになっていたとしても、この「当たり前」の視点は将来を向いている。すなわち、単に「元」の水準に戻そう、「元」のものを維持しようというのではなく、昨年度のものをより良く行い、次につなげようとする、将来に向けた「再構成」の営みなのである。これらの「当たり前」が指す営みの質の転換が、「当たり前」という同じ言葉の語りの中で、シームレスに展開している。

表 3-1 「当たり前」としてなされる営みの質の転換

表現	「当たり前」の再構成	「当たり前」の将来に向けた「再構成」
視点	過去	将来
内容	震災前にあったはずのものを現在の視点から再構成し、蘇らせるか継続する行為	過去を参照しながらも、より良く行い、次（翌年や将来）につなげようとする行為
語りの例	「震災前と同じ行事はすべて、小さくても、種目が減ろうが午前中で終わらせようが、やろう。やらないっていう思い出にはしたくない。」	「去年あんだだけ大変なんだけどここまでできたから、今年はまだ少しできるよね」「それが毎年の積み重ねで今がある」

出典：ヒアリングデータをもとに筆者作成

このように、吉里吉里地区の住民が行う活動に、質的に意味の異なる2つの「当たり前」の営みが内包されていることは、A氏以外の活動や語りにおいても確認される。A氏のように、同じ活動をしているなかで「当たり前」の質的転換が行われている場合もあれば、活動によって内包される質的意味が異なる場合もある<sup>90</sup>。

<sup>90</sup> たとえばA氏の場合であっても、前章2-1. で述べたような休日に学校を開放する取り組みは、後者の「将来に向けた「再構成」という質を持った活動であると言えるだろう。

本稿でこれまで挙げてきた事例から確認すると、たとえば前章第 1 節で見た、自治組織の「流動的補完性」は、震災前に「あったはず」の「当たり前」の営み—この部分では、「回帰的な時間」及び町内会や隣近所との付き合いといった「機能性」—を再構成し、その「当たり前」が震災によって喪失したことを踏まえ、従前にあったはずの「当たり前」を途絶えることなく継続することを目指す性質の営みであったといえよう。一方で、町内会の再編は、単に過去の「当たり前」の営みを再構成し蘇らせるだけではなく、まさしく将来の新たな地域に向けた「再構成」を行っている事例であると言える。また、はまぎく若だんな会会長の HH 氏が行ってきた活動についても、たとえば、そもそもの会結成の契機であった補助金獲得は、地域を拠点に商いで生計を立てるという「当たり前」の営みを震災後も実現しようという意図で行われたであろう<sup>91</sup>、具体的な活動の一つである砂の芸術祭は、震災後に海を怖がる子供たちの様子を見て、震災前の「当たり前」の営み—「場所性」のうち、景観とそれに基づく経験—を蘇らせようとする営みであったといえよう<sup>92</sup>。一方で、大槌お宝マップの作成やふるさと科の講師といった活動は、過去の「当たり前」を参照しながらも、それらを記録や記憶とし次世代につなげていこうとする、将来に向けての「再構成」の営みであると言える。ままりばの M 氏に至っては、それまでの「当たり前」—地域が持つ「機能性」のうち、潜在化されたニーズの側面—ではそもそも見逃されてきたことを、震災後に「発見」し、自分の子育てが終わってからも、将来の母親たちのために活動を続けていきたいと語る。

以上のように、震災後の吉里吉里地区で「当たり前」の営みとして住民の手で行われてきた活動には、過去の「当たり前」を再構成し、その復活または継続を目指す性質のものと、過去の「当たり前」を参照しながらも、将来に視点を定め、「再構成」していく性質のもの、という 2 つが存在することは既に確認した。そして、その 2 つは断絶したものではなく、連続的に、あるいは時に同時的に存在しながら、やがて「当たり前」の営みの内実は前者から後者へと転換していく。

ここで吉里吉里地区の特徴として非常に重要なのは、吉里吉里地区の住民が、再構成された「当たり前」の営みのある程度復活または維持することができたらそこで活動を終わらせるのではなく、そこから将来に向けた「再構成」までを含めて住民自身が担い続けており、そしてそれを「当たり前のことである」と語ることができてしまう<sup>93</sup>という点にあ

<sup>91</sup> 当初の契機が補助金であっても、その獲得に向けた話し合いの中でメンバーが本気になり、補助金を獲得した後も、その計画を単なる絵に描いた餅で終わらせずに、本気で活動に取り組んできたという経緯は前章に述べた通りである。

<sup>92</sup> 語りからは明確に読み取れていないものの、砂の芸術祭についても、回数を重ねるごとに、単なる「当たり前」の再構成及び復活ではなく、将来へ向けた「再構成」に変わっていったということもできるだろう。例えば筆者が行った 2016、2017 年の参与観察では、地元住民だけではなく、これまでボランティア等で吉里吉里（大槌）を訪れた人々が再び集う場としても機能していた。これは、かつて「閉鎖的」（＝「当たり前」。図 3-1 参照のこと）であった地域が、外部の人間と関係性を築きながら在るといふ、新たな将来に向けた「再構成」が行われている現場となっていたということもできるであろう。

<sup>93</sup> 吉里吉里地区の住民は、これらの営みを「当たり前」であると語ってしまうものの、実

ろう。すなわち、吉里吉里地区の住民の行為に表れる「当たり前」というのは、これまで述べてきた2つの質の「当たり前」の営みを指すことはもちろん、それを

「当たり前のこととして引き受けてしまう」という住民の「行為すること」（＝動作）それ自体も指しているのである。

しかし、当然のことながら、震災を経たこの地域で求められているのは、「マイナスからのまちづくり<sup>94</sup>」だ。震災で失われたものを取り戻すという過程においても、そこから将来に向けた「再構成」を行うという過程においても、従来の「当たり前」と同じことを行っているだけでは対応できないはずである。「当たり前」と語ってはいながらも、表面化した〈必要（ニーズ）〉を発見し、それに無我夢中で応答するなかで、彼らは自らの「当たり前」の範囲を「拡張」させているのである。吉里吉里地区の住民は、この「当たり前」の「拡張」を当たり前に行えるからこそ、住民自らが〈必要（ニーズ）〉を「発見」し、更なる解決に向けて具体的な行動を伴わせていくことができるのであろう。

では、なぜ吉里吉里地区の住民が「当たり前」を「拡張」することができていたのかについて、次節以降で検討を深めていく。

## 2. なぜ吉里吉里の人々は「当たり前」を「拡張」できたのか

前章では、吉里吉里地区の住民が、震災後に「発見」した〈必要（ニーズ）〉に対し、旧来の地縁的なつながりを活かす、新たな組織を結成するなどの手段によって、〈必要（ニーズ）〉への応答に向けて活動を立ち上げていたことを確認した。更に前節では、それらの活動には、過去の「当たり前」の営みを再構成し、その復活または継続を目指す性質の営みと、過去の「当たり前」の営みを参照しながらも、将来に視点を定め、「再構成」していく性質の営み、という2つがあり、それらは連続的に、あるいは時に同時的に存在しながら、やがて前者から後者へと転換していくことを述べた。また、吉里吉里地区の住民は、この2つの性質を持つ営みをいずれも当たり前のこととして引き受けている（＝「行為する」）ものの、実際には、吉里吉里地区の住民自身が従前の「当たり前」を「拡張」させることによって実

---

際に同様の取り組みを他の地域で行おうとしても非常に難しく、実現できていないという地域の実情を描いた先行研究が複数見られる。たとえば、佐々木らは、2011年に岩手県田野畑村の鳥越・羅賀地区で行った研究で、自治会があっても活動が停滞している地区や、住民によって震災復興を目的とした生活再建委員会が立ち上げられても、住民だけでは必要な情報を集められず、前向きな議論が行えなかったために参加者が減っていった地区について報告している。また、地区のどのエリアに避難したかによって、情報格差が生まれてしまっている例も報告している（佐々木ほか 2012）。また、2012年から岩手県釜石市で行った研究でも、町内会員の所在を把握することができていなかったり、住民主導で復興協議会を設立したものの、地域内での協議が思うように進まず協議の開催が停滞していたりする例も報告している（佐々木ほか 2013）。大槌町内で筆者が行った参与観察中にも、他の地区では「まだ自治会を作る段階にない」という声や、「たくさん会議に参加したけれど結局役場は何もしてくれない」という声が聞かれた。

<sup>94</sup> はまぎく若だんな会会長 HH 氏のヒアリング（2017年2月実施）及び復興協議会長 F 氏のヒアリング（2017年11月実施）における発言を参考にした表現である。

現されている点を指摘している。

そこで本節では、なぜ吉里吉里地区の人々は「当たり前」を「拡張」することができたのかという点に焦点を当てて、分析を進めていく。ここでは、「当たり前」の営みの内容ではなく、「行為をすること」(＝動作) そのものに注目している点に前節までとの差異がある。

「当たり前」を「拡張」していくという行為には、まず「当たり前」が存在しているということ、そして、従前の「当たり前」以上の活動を行うこと(＝「拡張」)、の2段階の説明が必要になる。そこで本節では、「「当たり前」が存在しているということ」について、吉里吉里という地域がもつ経験の歴史的な蓄積や、地域や家庭の内部で親などの年長者から子世代に伝えられることによって規定されている側面(通時的背景)から検討する。そのうえで、「従前の「当たり前」以上の活動を行うこと(＝「拡張」)」について、地域の中で同時代的な関係性のなかで規定されている側面(共時的背景)から検討していきたい<sup>95</sup>。

## 2-1. ～通時的背景～ 「当たり前」が存在しているということ

まずは、「拡張」の対象となる「当たり前」が、いかにして形成され、存在し得たのかという点に関する分析を行う。ここでは、吉里吉里という地域がもつ経験の歴史的な蓄積(①)、地域や家庭の内部で親などの年長者から子世代に伝えられること(②)の二つの観点から整理する。

### ① 地域における経験の蓄積がもたらす「当たり前」の醸成

吉里吉里地区は、これまで述べてきたように、「自分たちのことは自分たちでやる」という地域住民の意識が非常に強い。この意識が醸成されてきたプロセスを、近代以降に地域を襲ってきた津波災害からの復興という文脈と、町内会に代表されるように、自らの生活の必要を自らで解決してきたという「日常」の文脈から捉えていきたい。なお、前者については、岡村(2017)の先行研究を整理する。後者については、地域住民へのヒアリングに基づき整理を試みたい。

前章でも述べたように、三陸一帯は津波常襲地帯であり、大槌町も何度も津波災害に遭遇してきた。吉里吉里地区における集落やまちづくりも、過去の津波災害と切っても切り離せない関係にある。そこで、本項では岡村(2017)『「三陸津波」と集落再編』を手掛かりに、近代以降に焦点を当て、過去の津波災害において吉里吉里地区がどのような復旧・復興過程を辿ってきたのかについて概観する。

近代国家設立以前は、津波災害に対する中央政府(幕府)からのトップダウンの災害対応の仕組みはなく、各々の災害における被災地の領主が対応していたとみられ、吉里吉里地区も例外ではないと考えられる(pp.87-89)。

近代国家設立(明治時代)以降、土木事業や区画整理事業を伴う復旧・復興が行われた災

<sup>95</sup> なお、「通時」「共時」という用語については、影浦(1998)を参照のうえ、Saussureが提唱した言語学上の定義に示唆を得ている。

害は、明治三陸地震津波（明治 29（1896）年）、昭和三陸地震津波（昭和 8（1933）年）、チリ地震津波（昭和 35（1960）年）、そして東日本大震災（平成 23（2011）年）である。ここでは、集落移転を伴う復興を遂げた明治三陸地震津波と昭和三陸地震津波に言及する<sup>96</sup>。なお、各々の災害における具体的な被災状況等については、I 章にてすでに述べている。

明治時代になると、大規模災害発生時に大規模災害由来の各種問題に対処しうる主体としての近代国家が成立した。しかし、明治三陸地震津波の際は各種法制度の整備が途中段階にあったことに加え、政治の面でも藩閥政治から政党政治への移行段階にあり、中央政府と地方政府の関係性が安定的ではなかった。このような背景から、明治 29（1896）年に発生した明治三陸地震津波の際に中央政府が関与したのは土木インフラの復旧のみであり、それ以外の住宅や産業の再建については県や町、被災者自身に委ねられていた。吉里吉里集落の場合も同様で、公的機関から金銭的援助を受けながらも、篤志家や地主層が中心となって集落の再建を図ったと考えられる<sup>97</sup>（pp.87-91, pp.259-260）。

昭和三陸地震津波が発生した際には、中央政府による資金提供および事業メニューの提示といった支援が行われ、行政資料にも、吉里吉里地区が他の被災地に先行して集団移転が計画された「理想部落」であるという記載がみられる。しかし実態としては、地方政府（岩手県及び大槌町）や集落（産業組合）が事業主体となり復興を果たしたと言える（p.43, pp.260-261）。この際に、集団移転後の「復興地」の区割が、被災住民に平等に区画がいきわたるよう計画されたように見受けられるものでありながら、実際には区画ごとの面積が大きく異なるほか、複数区画を所有する者が存在するなど、集落側の事情が相当反映されているということが明らかになっている。一方で、新興の漁家が地域の中心人物に挙げられるなどの社会構造の変化も見られる（pp.200-203）。

いずれにしても、行政の役割が明治三陸地震津波の時期より増したとはいえ、引き続き集落が復興過程で大きな役割を果たしてきたことがわかる。そして、集落内部の旧来の社会構造が維持された側面と、新たな中心人物が登場してきたという側面が見られる。

このように、津波災害に関する文脈を辿ると、吉里吉里地区では過去にも大きな津波災害からの復興過程において、集落の住民が中心となって集落の再建を担ってきたことが分かる。

以下の部分では、災害復興以外の文脈から、「自分たちのことは自分たちでやる」という住民の「日常」的なありかたの蓄積について、住民の語りから整理していきたい。

まず、既に前章で詳述したように、自らの生活の必要性に即してボトムアップで行われた吉里吉里地区における町内会の創設そのものに、「自分たちのことは自分たちでやる」とい

---

<sup>96</sup> チリ地震津波の際には集落再編は行われなかったものの、防潮堤の建設は行われた。防潮堤の建設に加え、その後のインフラ整備が進んだこともあり、チリ地震津波は吉里吉里地区の低地に住宅が広がっていく契機となった（p.304）。

<sup>97</sup> 吉里吉里集落では、被災住戸の約 4 割が自ら所有する農地や他人の所有する農地、地主が所有する土地への高所移転によって集落の再編を果たしたとされる（p.259）。

う意識が表れている。

また、地域活動とは異なる文脈であるが、前々公民館長を務めた TA 氏は、自身が昭和 32 (1957) 年から勤務していた会社での「通勤会議」立ち上げについても語った。TA 氏が隣の釜石市の製鉄所に勤務していた当時、まだ自家用車を所有している人は少なく、また吉里吉里地区には始業に間に合う汽車が走っていなかった。そのため、毎朝吉里吉里地区から山を越えて大槌まで行き、大槌から汽車通勤する必要があった。そこで、若手を中心に「通勤会議」を立ち上げ、鉄道管理局へのダイヤ改正に関する陳情を会社に頼らずに行ったという。このように、地域活動のみならず、自身の仕事に関しても自ら必要な組織を立ち上げ必要な活動を行ってきたことがわかる。このように、「なぜ若い人たちが中心となって活動を立ち上げてきたのか」ということについて、TA 氏自身は、以下のように語っている。

「いやそれはやっぱり必要性。必要性と、それとあとはほら、俺もずっと青年会やってきたから。だからそういう、若いときからの、幼いときからの、先輩たちからも教わりながら、仕込まれながら、そして年月とともに一こうしたほうがいい、あーしたほうがいい、改善だったりさ、そういうこともやってる過程の中で身についたのが、こう直していく修正していくという。個性もあるけれどもな、そういうものが身についておるものだから、やっぱりこれじゃ不便だ、だめだなあ、やっぱり行動しなければ、というのは、そういう自分の幼い時の下積みが、もう体に染みついていることだから。だから、不便だ不便だと言っても会社がしてくれるわけではない。それがやっぱり、自分たちの不便さを訴えて、それで関係するところに行ってお願ひする。」

(2017 年 9 月ヒアリングより、下線部筆者)

自分で必要性を感じたことについては、誰かの手が差し伸べられるのを待つのではなく、必要性を感じる自分自身が行動を起こしていく。この発想は、震災後にく必要 (ニーズ) > を「発見」した吉里吉里地区の住民の思想と相通ずる部分大きい。そしてまた TA 氏は、通勤のみならず、地域の活動を役場に頼らずに自分たちでやるということについても、上記の語りと同様に、地域の「土壌」として染みついているという。

「役場の手待ったって、役場ったって当てになんないのよ。だって 3 年ごとでポジション変わってくっぺ。ね。で吉里吉里の人がいたとこじゃねーんだから (筆者註：役場の担当の人が吉里吉里の地域をよく知っている人とは限らない)。ね。こうしてくれああしてくれと言ったって、地域の実態をわかっていなければ、しゃべったからって、はいそうですか、担当窓口の環境あるけれども、わからないのは当たり前なんだよ。それをね、1 回言ったからやってくれるだろう、待てど暮らせど返事が来ない、来ないわけだ、わからないんだもの。そういうことの繰り返したから、(中略) こうしたほうがいいっつーことは自分たちでやってっていうのが自分たちの特徴。やっぱりここの土壌っていうのか、そういう性格があるん

じゃねえかな。」

(2017年9月ヒアリングより、下線部筆者)

TA氏の語りにも明らかなように、この地域では、必要なものは自分たちでやるのだ、という意識が、地域活動の場で先輩の姿を見て育つことから醸成されてきていることが窺える。このような語りは、震災からの長期的視野での復興を見据えて、TA氏より30歳余年下のA氏が語った内容<sup>98</sup>にも重なる。

「(吉里吉里地区で) やるのは当たり前で育ってきたことを (他の地域にそのまま導入しようとしても)、やっぱり違うんだよな。困った時にだけやるんだったら誰にでもできるんだけど、普段からそういうつながりを持ってるか持っていないかなんだと思う。 (中略) (吉里吉里地区で活動の中心になっている人は) 支援だとは思っていないんだと思う。当たり前、声を掛け合ったり。確かに、いざこざがなかったわけではないし、もめごともないわけでもないんだけど、ただ柱がちゃんとしてるので、そういう方向に行ったんだと思う。」

(2016年7月ヒアリングより、下線部筆者)

このように、吉里吉里地区ではもともと、「地域のことは地域でやる」という土壌があると住民が感じていることが明らかになった。ここで見たTA氏やA氏の語りは、地域の土壌が「地域内で親(あるいは親より上の)世代から子世代へと引き継がれた」ものであるということを明らかにしているとも言えよう。続く②では、その点をより明確に記述していく。

## ② 地域及び家庭内で親世代から子世代へと伝承される「当たり前」

①で述べたように、吉里吉里地区では歴史的に、災害復興過程や生活上の必要に応じて、地域住民自らが活動を立ち上げてきた。その活動の蓄積のみならず、その活動を中心となって行ってきたリーダー層の人々の姿勢や、リーダー層の人々の語りが次の世代に引き継がれ、吉里吉里全体として「当たり前」が継承された可能性が高いと考えられる。この点について、これまで述べてきた活動のリーダー層の人々の語りから整理を試みる。

まず、東日本大震災の津波による流失を免れ、現在まで町内会の機能が継続している若葉会で会長を務めるNM氏を例に挙げる。NM氏は4代目の若葉会会長であるが、II章で述べた通り、彼の父親は若葉会の創設者の一人であり、初代会長であった。NM氏は、小さい頃から地域の子供会に参加していた。自身が学生の頃から自宅には頻りに地域の人々が集まっており、当時は「うちって居酒屋なのかな?」「普通の家に生まれていたら(中略)、どんだけ楽か」と感じていたこともあるという。就職先の企業で2年程の研修が終わり吉里

---

<sup>98</sup> このヒアリングの語り自体は、A氏が吉里吉里小学校、中学校のPTA会長を務め、活動の成果を挙げてきた経緯から、大槌町の教育委員会に「大槌のPTAにも伝えてほしい」と依頼を受けた、という文脈でなされたものである。

吉里に帰ってきてから、父親が若葉会の会長であったこともあり、「半分義務」で若葉会の活動に再び参加するようになったという。その後、若葉会の事業部を経て、年間行事統括補佐を10年、事業部長（若葉会の事業を統括する役職）を5年務めたのち、「いざという時には（自分が会長を）やらなければならないと思っていた」という言葉通り、2010年に40代前半で4代目の会長に就任している。このようにして、父親の思いを引き継ぎながら地域の活動に尽力しつつ、より時代に即した若葉会のありかたを模索し続けている（2017年2月ヒアリングより）。

このような会長の姿は、他の会員にも伝わっている。NM会長就任と同時に若葉会副会長に就任したTS氏<sup>99</sup>は、「若葉会の会長さんのお父さんが、初代の会長なの。立ち上がった当初27（歳）とか。やっぱりすごい方なんだよね。で、目的は、町内会の目的が、子供たちの健全育成っていうことで。すごいだから、ね、27で、町内をまとめるっていうのがすごい。（中略）うちの会長になって、さらに新しいことを模索してる会長でね。他でやってないようなことを、今の時代に沿って、常にその会長のお父さんが立ち上げたものをみなさん継いで。」（2017年2月ヒアリングより、下線部筆者）と述べる。

このように、NM氏自身が家で父親の姿勢を見て育ち、当初は「半分強制」であっても、徐々に地域の活動にコミットしていく様子が見える。また、そのようなNM氏の姿勢は地域の別の住民にも伝わっていく（TS氏発言の下線部参照）。

同様の事例は、公民館長H氏の場合にも見られる。彼は「（小さい子であっても）親の背中を見て育っているから（地域の活動を）普通にやれる」と語っているが、彼の父親も、町内会ができる前に地域がまとまる契機であった祭りの小踊会に参加していた。彼自身も小さい頃から地域活動に参加し、ボーイスカウトに1回生として参加したり<sup>100</sup>、27歳の時には6年間停滞していた青年会を再開し、7代目の会長として会を再興させたりしてきた。やがて2丁目の町内会長や町の教育委員、公民館長を2度経験している<sup>101</sup>。公民館長H氏は日頃より「亡くなったリーダーたちを背中に感じて」と言う。そして、自分が育てられた地域は絶対に裏切ることができない、自分が育てられた地域に恩返ししなければならないという思いを持ち、「地域のことは地域の人でないと、地域の人に認められた人でないとできない」「死に物狂いでやらないとできない」「先輩たちもそうやってきたのを見て」と語っている（以上の部分は2017年2月、6月、7月、9月のヒアリングによる）。

---

<sup>99</sup> TS氏自身も吉里吉里出身で、子供のころから子供会等の行事には常に参加していた。高校卒業後に就職した会社で埼玉配属となり、10年ほど草加市に在住。その後、釜石に転勤となり、30歳頃から再び町内会の活動に本格的に参加するようになった。

<sup>100</sup> これについて公民館長H氏は、「生きる力を学ぶ場所だった。リーダーとして生きて」と語っている。

<sup>101</sup> 公民館長H氏と同じ2丁目に所属するPTA会長のA氏へのヒアリング（2016年12月実施）によれば、公民館長H氏は震災以前に2丁目の町内会長と公民館長を経験している。一旦両職を引き継ぎ顧問に就任したものの、震災後、当時の会長が震災の影響で吉里吉里を離れたり、当時の公民館長が病気で亡くなったりした経緯があり、「H氏しかいない」と例外的にH氏が再任することになった。



公民館長 H 氏の姿は、次の世代にも伝わっている<sup>102</sup>。

たとえば、はまぎく若だんな会代表の HH 氏は、以下のように述べる。

「やっぱり先輩たち、たとえば公民館の H さんなんか素晴らしいじゃん。あの人も昔から青年会の活動とかさ、一生懸命やってきた人で、みんなにも声かけるし、にこにこして地域のためにほんとに頑張ってくれる姿も見てる。」

(2017年2月ヒアリングより)

HH 氏の語りからも、「地域の先輩方」の影響を受け、地域に尽力するようになり、それが次の世代にも伝わっている様子がわかる。

また、HH 氏及び兄の A 氏は、地域における役割意識の醸成が家庭内でもなされていると述べている。A 氏によれば、震災の 2~3 日後に、きょうだい 4 人水入らずで話すことができ、そこで「〇〇(苗字)家は生かされた」という意識を共有した。そのときの意識が震災後もずっと続いてきているという(2015年11月及び2016年7月ヒアリングより)。

弟の HH 氏も、地域の先輩方に加え、自身の親や兄、姉が地域のために尽力してきた姿を見て育ち、それが「普通」(=「当たり前」)であるという。

「兄貴たち、ねーちゃんたちもすごいやってんじゃん。でもそれが普通になってんの。もう小さい時からそれが当たり前。困ってる人がいたら助ける、そこで倒れてる人がいれば、事故った人がいればすぐ駆け寄ったりとか火事があっても消防団じゃなくてもすぐぱっ行ってすぐ消す、たとえばね、とか、それが普通。知らんぷりはもちろんできないし(中略)。

(家の 4 人きょうだいが地域のリーダー的な存在として地域のための活動をしていることについて)それはやっぱ親があっただし、先祖が残してくれたものだからね。」

(HH 氏、2017年2月ヒアリングより)

このように、地域の中での年長者はもちろん、親がリーダー層を担う家庭の中では、親の背中を見て地域の中でリーダーとなっていくことを学び、それを自らの「当たり前」のこととして捉えている様子が窺える。

本項で見てきたように、吉里吉里地区では、過去の数多の経験によって、「地域のことは地域の住民がやるのだ」という意識が蓄積されてきた。また、地域でリーダー層として中心になってきた人々が、その姿を次の世代にも見せていくことによって、地域の現場や家庭の

---

<sup>102</sup> なお、公民館長 H 氏の上の世代にも、H 氏の働きは認められている。前々公民館長の TA 氏は、「公民館活動っていうのは世話好きでなければな、頼まれた留守番っていうものじゃないのよ。自分の体を張りながら、(中略)頼まれる人でなくてはならない。だからよくやってる。老人クラブや漁協のお手伝いまでしながら。本当にね、世話好きでなければそういう地域活動ないしは人を集めるまとめる、それができない。だからよくやってると、私もそう思ってます。」(2017年9月ヒアリングより)と述べている。

内部で地域に対する意識や姿勢が「当たり前」のものとして共有され、引き継がれていったと考えられる<sup>103</sup>。

## 2-2. ～共時的背景～ 地域における役割意識がもたらす＜責任 engagement＞

通時的な背景によって、地域住民が自発的に地域にかかわっていく仕組みが「当たり前」のものとして成り立っていたとしても、各個人が自らをその「当たり前」を担う存在として立ち上がらせようとする際に、単に歴史的な文脈だけでその動機が規定されると考えるのは早計であろう。ましてや、震災後、地域の大部分が被災した状況においては、いくら「当たり前」とはいえ、平常時と比べ、いかなる行動を起こすにもより多くのエネルギーを要することは想像に難くない。本項では、前項で述べた通時的背景の存在は前提としたうえで、震災後の地域の復興を「当たり前」に担った人々による語りのなかから、彼らの行動を後押しした同時代的な要因について分析していきたい。

ここで、まず、はまぎく若だんな会代表 HH 氏の語りを参照する。

「まだまだみんな家を再建できてないのが半分だけだし、なんかあればあったで大変だけど、俺だってなくてもこうやって5年も6年もさ、給料払って借金払ってまあやらせてもらってるけども、まあね。大変なことはだっていっぱい、それ以上大変な人はいっぱいあからね。たいしたことはねえ。自分で大変だっていうのは大変じゃねえんだから。本当に大変なら言えないと思うんだよね。」

自分以上に大変な人はもっといる。その認識が、自らの活動を押しとどめようとするのではなく、むしろ「だから自分ができることをやらなくては」と前へ進めようとする方向に働く。

「日本全国いろんな場所でまちづくりまちづくりって言うんだけど、そこはちょっと違うまちづくりをしないと、気持ち的に違うじゃん。本当にいろんな犠牲があって、マイナスからのものを作ろうとしてるのとき。」

「(ある若だんな会のメンバーを指して) 親も亡くして子も亡くしてるからさ、結構いるの

---

<sup>103</sup> なお、これらの地域に対する思いを次の世代へとつなげていきたいという発言も見られる。たとえば、はまぎく若だんな会会長 H 氏は、「子供たちってこう、うーん、都会に憧れたりするんだけど。ここにいっても生活はできるんだよね。まあ全然出てもいいけど、誇れる、なんていうかな、ふるさとって、津波があったからなくなってしまおうような気がしたったから、でも俺はここで生きてくしかないから、出ても、年に1回しか帰ってこなくても、やっぱりここいいよねって思ってく、っていうのは、そういう気持ちを持った人がここにいなきゃだめだし、で俺はここで生まれ育ったメンバーだからなおさらそういう気持ちが強かったからね。」(2017年2月ヒアリングより) と語る。

よメンバーでも。やっぱそういうことになれば、引けないところもあるからね。でもそこはそこでやっぱ、俺ら忘れちゃいけないところでもあるから。楽しければいいってことじゃないからね。やっぱり責任も出てくるから。（中略）こっちにもプラスになるものがあればいいけど、なんか労力的に疲れるだけで何も残らないってのもなあみたいなの、やっぱりそこは **WinWin** じゃないけどお互い良くなないとダメだしさ。俺たちのためにとはなかなか思えないから。やっぱり地域のため、（それ）がイコール1人でも多くね、みんなが楽しんだり感じたりすることができれば。そこなのかなスタイルは。」

（以上、2017年2月ヒアリングより。下線部筆者）

自身も被災しながらも、それ以上に大変な人たちのことを思い、地域のためにできることをやる。この「地域」とはすなわち、自身も育てられてきた、歴史的蓄積を持っているとともに、現に自分自身がいま生きている「地域」である。HH氏は、その「地域」に対し、「マイナスからものを作る」「忘れちゃいけない」という思いを背景に、「責任が出てくる」という。

彼は、自身の被災も、地域全体の被災も、ともに活動を担う仲間たちの痛みも、＜受け止めつづけて＞いる。そして、その＜責任＞を果たそうと活動を行い、それらが何かしら周囲に対して意味を持っていたということを裏付ける反応や、何かしらの影響を与えているという実感が得られることで、再び彼はその＜責任＞を果たす役割を期待される者として、地域や地域住民から「拘束」され、そのように求められる限り活動を続けよう、という更なる意識を呼び起こす。

ここで、HH氏の兄であり、PTA会長を務めてきたA氏の語りにも着目する。

「ふっと考えれば、そこまでやんなくてもな一、文句も言われながら、要は自分も親だから、自分の子供がちゃんとしてれば別にいいわけであってさ。他の子供はって思うんだけど、やっぱり自分の生まれ育った吉里吉里の子はね、っていうのはある。だから、やっぱり俺らも地域に育てられたって思ってるのよ。周りの人に。家もそうなんだけど、地域の人に怒られながら育ってきたっていうものがあるから、それは決して今思えば悪いことではない、良かったと思うから、余計その役として やってやんなきゃないのかなって思う。」

A氏の場合も、地域に育てられたという思いと役割意識、そして、それに基づく「やってやんなきゃない」という＜責任＞意識を持つ。また、前項で既に紹介したように、A氏は震災の2～3日後、きょうだい4人で「〇〇（苗字）家は生かされた」という意識を共有した。そして、そのときの意識が震災後もずっと続いてきているという。そのことを踏まえて、彼はこのように述べる。

「吉里吉里とか大槌を考えた時に、そう言い聞かせる意味でも、兄弟 4 人でうちらは生かされた人間、生かされた家族、じゃあ何をしなきゃない、っていうのは今でも続いているの。だからやっぱり伝えてかなきゃいけないとか。これで誰かが亡くなればこっだけ話せないし。親戚では亡くなってるよいっぱい。ほんとにこう（近しい人）っていうのはみんな生きててくれたから、だからきょうだいみんなそうなんだけど、いろんなところで話させてもらう機会あるからだけど、それができるのも伝えられるのも、そういう身内が生きてて、立場的にもそういう立場にいる、話せる立場も役職もそうなんだけど。だからやっぱり残ったのっていうふうなのは残されたって思ってやんなきゃいけないなって」

（以上、2015 年 11 月ヒアリングより。下線部筆者）

A 氏の場合も、自身は家を失いながらも「残された」者として前を向こうとする。「残された」という意識が彼にとって遠慮し行動を押しとどめるのではなくて、むしろ、彼自身の役割を再認する契機となっている。彼自身が地域の中で育てられてきたという思いと、震災以前から彼が地域の中で担ってきた立場、そして、双方を兼ね備えていたとしても、震災後の境遇によってそれを全うできなくなってしまった存在もいる<sup>104</sup>なかで、震災を経て「残された」という境遇から、彼の役割意識は、生まれ育った吉里吉里という地域に向いていく。それはある意味で、震災後に地域の場に出てくることができなくなった存在の役割を＜受けとめつづけて＞いるとも言える。この役割意識は、その役割を果たし続けることによって一層、そのような役割を担うものとして期待され、それを再度認識することで、HH 氏の事例でみたような地域に対する＜責任＞に結びついていくと考えられる。そして A 氏は、彼自身についてのみならず、地域で中心になって役割を担ってきた人々についても、実際の役職の有無にかかわらず、地域の中における役割を認識しており、そのような人々がみな中心となって一緒にやっ払いこう、という雰囲気にあることが、吉里吉里という地域を支えているという。

「（地域の様々な役員には）そこに住んでて役割的にその人がならなきゃないんだろうなっていう人たちがなってるから。だから、別にその人たちは会長じゃなくても、役はやるんだと思うし、（筆者：別に役職がなくても？）そうそうそう。うん。でもそういうふうなものが、責任だったり情報の収集だったりっていうものが、能力があるから会長に推薦されて会長になってるわけだから、逆に会長じゃなかったとしても、だから会長退いた人たちでも、やはり震災の時には役に立つんだよな。（中略）それを仕事だとは誰も思っていないじゃねえかなと思うんだけどね俺はな。だから逆にまとまるんだと思う。これ会長がやればいけど会長がっていうのではなくて、みんなでたまたま、たまたま責任取るのが会長であったり、

---

<sup>104</sup> A 氏自身はこのことについて、「震災によって地域活動に積極的に出てくるようになった人も、逆に震災がきっかけで、それまでは積極的であったのに精神的に出てこれなくなってしまった人もいる」という趣旨の発言をしている（2016 年 12 月ヒアリングより）。

まあ命令をするのが会長であるだけっつーだけで、ほらみんな会長だろうが、なんだろうが一緒になってやるっていう雰囲気があるから。」

(2016年12月ヒアリングより)

地域との関係性の中で自身の役割意識を持ち、その役割を地域に還元していこうという<責任>を持ち振る舞う例は、他の「支援者」として自ら活動を進めていく人々にも共通に見られる。

公民館長のH氏は、吉里吉里という地域について、「地域のことは地域の人でないと、地域に認められた人でないとできない。役場がどうのこうのと言っていてはできない。死に物狂いでやらないとできない。」(2017年2月ヒアリングより)という。H氏は、吉里吉里という地域が、元来地域住民が自主的に活動を創造してきた地域であるからこそ、リーダーに求められている役割を認識し、リーダーは住民から認められるように、住民の何十倍も働くのだ、という<責任>意識を持つ。だから彼にとって、「リーダーは苦しい。でも、リーダーは苦しんで楽しむ、苦しんで苦勞する。やればやるほど成果が出る」(2017年7月ヒアリングより)。

ままりば創設者のM氏も、「地域のことは地域の人自身で担いたい<sup>105</sup>」という意識を強く持つ。むしろ、外部の支援団体が自身のやろうとしていたことを先にやってしまうと「悔しい」という。

「やっぱり法人になって外の団体さんは来てるので、やりやすいんですね。お金はあるし。予算が。で私、やろうと思ってもやっぱりね、個人なので、動きが悪くて。そう。悔しい思いばかり。よその人だからありがたいんだけど、やっぱり地元のことは地元の人が一番わかってるし、やりたいっていう思いが強くて、そう、そこがねー。うん。地元の人を使って、動かしてくれればいいんだけど、やっぱりそうじゃなくて、その団体も名前があるから、自分たちがやりたいわけだし、なんか、そうそう、悔しかったんです(笑)。」

(2017年2月ヒアリングより)

彼女は個人で活動を行っており、法人化が難しく、活動の限界を感じることも多いという。また、参加費だけで資金が賅えない時には自身で資金を拠出しながら活動を続けている。それでも、彼女は地域の母親のための活動を、自分の子供たちが大きくなった後でも「細く、長く続けていきたい」と語る。

---

<sup>105</sup> 地域の母親たちのために自ら活動を立ち上げたM氏であるが、彼女自身はもともと地域活動に積極的に関わっていたわけではないという。とはいえ、町内会や地域の行事には参加していた。

M氏はまた、保育士の不足から待機児童問題がなかなか解消されないなかで、「母親たちの活動は自分が続けなければ」という役割意識を強く持つ。2017年に4人目の子供（2017年9月末現在で6か月）を出産した前後、そして育児に追われる日々の中でも「ハードだよねえ(笑)。やだよもう(笑)。大変だよねー。大変だよ本当。」と冗談を言いながらも、「なるべく休みたいけど、でも空けちゃうと(せつかく集まれるようになったお母さんたちが)離れていくかな。」と活動を継続していた。4人目の子供が生まれ、自身も子供を保育所に預けられない、フルタイムで働くこともできない当事者となっているなかで、他の母親たちを<受けとめ続ける>存在としての自らの役割を再認し、それが活動を続ける<責任>につながっている。

これらの例から、同時的背景で「当たり前」を「拡張」できる要因について、前章までの記述も踏まえて検討してみたい。

ここで、J・P・サルトルが提唱した「アンガージュマン (engagement)」に着目する。日本語では政治的文脈で「社会参加」の意味合いに使用される例が散見されるが、被災地支援に関する文脈では、似田貝 (2008a) がこの「アンガージュマン (engagement)」を、個人の主体性の議論に展開している。似田貝は、J・P・サルトル、E・レヴィナスの「責任」概念、I・イリイチの「積極的関与」の概念を踏まえ、<約束・関与=責任 engagement>と定義する。すなわち、支援者は、被支援者の人生・生活・苦しみ等を一生活者として受け止めることなしには引き受けることができないことを知る。そのうえで、その被支援者に関心・関与することによって約束を果たすだけでなく、同時に自らもその目的を達成するような支援実践に向け、自己自身の生きるありかたを「拘束」することを指す。つまり同書では、この<約束・関与=責任 engagement>概念が規範的概念としてではなく、<そのつど><具体的、一時的、局所的>に当事者と応答するというコミュニケーションとして理解されている。似田貝は、ここに、被災者の痛みを<人として受け止める>支援者の<受動的主体性>をみている。そしてそれは、被災者の痛みを前に無力感に苛まれる支援者の<可傷性>とも関連する。支援者は、<可傷性>を抱えながらも、被災者の痛みを<人として受け止め>ようとする<弱い主体>だというのである。

吉里吉里地区の場合、これまで見てきたように、被災した地域住民自身が「支援者」となり、自らの地域のことを自らの手でやるのが「当たり前」であるという。つまり、吉里吉里地区における「支援者」は、同時に別の側面では被支援者でもあり得る。この点で、似田貝が想定しているような「外部の支援者が、被支援者に関心・関与することによって約束を果たし、同時に自己の生き方を「拘束」する」というような支援者一対一被支援者のような関係性は成立しない。吉里吉里地区における「支援者」、とりわけ地域のリーダー層として地域を引っ張っていく立場の人々は、震災以前から、自分の関心の有無とは無関係に、地域や地域の中での役割という関係性によって、既に振る舞いや生き方がある程度は形作られている(=「拘束」されている)からである。あるいは、震災後にリーダーとして行動を起こ

し始めた人にとっては、自分自身も一人の当事者として、関心・関与することを避けようがないからである。このことから、吉里吉里地区の事例で重要なのは、震災を経た状況においても、彼らが〈約束・関与＝責任 engagement〉を、実際の行為によって、果たし続けていくことができるようになってきているのかどうかという点にある。

もちろん、吉里吉里地区の中でも、今回の震災で家が流されたか否か、近しい親族が亡くなったか否か、といったような、一瞬の、しかし巨大な差によって、住民の間に溝ができたり、程度を比較して傷ついたり、遠慮したりするケースは、町内の他の地区と同様に見られている（浅川 2016 及び筆者の 2016 年 1 月に行った参与観察、2017 年 11 月に実施したヒアリングによる）。それまで地域で中心的なリーダーとして活躍してきた人であっても、今回の震災を機に、地域の場に出てくるのが難しくなってしまった人が存在する<sup>106</sup>のは紛れもない事実である。

しかし、吉里吉里地区で自ら〈必要（ニーズ）〉を発見し、「当たり前」のこととして活動を立ち上げて実行に移していく「支援者」の人々は、そうした〈可傷性〉を乗り越えているように見える。存在しているはずの〈可傷性〉を乗り越えさせているものは、本章で整理してきた文脈に従えば、当然のことながらそこに〈必要（ニーズ）〉が存在しているということと、その〈必要（ニーズ）〉に応答する存在としての地域における自己の役割<sup>107</sup>を自覚すること、そして、その役割を果たす行為を成したことが、自身も含めた吉里吉里（あるいは大槌町）という地域全体に何かしらの意味を持っていると実感できることである。そのことがより一層、その役割を地域から期待されていると認識することにつながり、更にその役割を全うしようという意識につながる。この役割を果たそうとし続けることそれ自体が、〈約束・関与＝責任 engagement〉を、実際の行為によって果たし続けていくということなのである。そして彼らは、先に「当たり前」の営みの転換で見てきたように、単に過去の「当たり前」を再構成するためだけではなく、将来を「再構成」という形で、一度引き受けた〈責任 engagement〉を、引き受け続ける。

ここで、改めて似田貝の議論を参照する。地域における「支援者」たる彼らは、決して「可傷性」を持たないわけではないし、「個」のみの力で地域を引っ張るような、〈強い主体〉でもない。彼らの存在も、彼らが持つ役割意識も、地域それ自体や地域に生きる人々によって規定されているからである。そして、地域の外部、とりわけ東日本大震災における「被災地」の外部から見れば、「支援者」自身も家や家族、友人を失ったり、地域で生活を営んでいく上で様々な不便や困難に直面したりしている。その点を考慮すると、「弱い」という位置づけを当てはめることができなくもない。

ただ、これまで整理してきた文脈から明らかなように、吉里吉里地区の「支援者」たるリーダーたちは、似田貝がいう〈弱い主体〉という状態を当てはめただけでは語れない。

---

<sup>106</sup> A 氏や公民館長 H 氏への複数回のヒアリングによる。

<sup>107</sup> この役割には、地域の場に出てくることができなくなった人々の〈責任 engagement〉を引き受ける、という側面も内包している。

彼らは、歴史的文脈（通時的背景）や他者との関係性（共時的背景）のなかで、＜責任 engagement＞を引き受け続け、自分たちの力で将来を「再構成」し続けようとする、言わば＜強くあろうとする主体＞である。震災後の吉里吉里地区を支えているのは、＜弱い主体＞の状態に留まらず、「当たり前」のこととして自ら働きかけを続ける、逞しい＜強くあろうとする主体＞の存在なのではないだろうか。



## IV 「復興」の再定義及び今後の展望

### 1. 吉里吉里地区における主体的な「復興」とは

前章まで、震災から現在に至るまでの吉里吉里地区及び吉里吉里地区の人々のありかたを記述し、「当たり前」という観点を中心に考察してきた。本章では、視点を将来に定め、前章まで述べたような経過を辿ってきた吉里吉里地区が、今後どのような地域としてあろうとしているのかについて分析していきたい。

これまで述べてきたように、吉里吉里地区では、震災以前から地域のつながりが強く、震災後もそのつながりを活かした復興まちづくりが進められてきた。震災以前には公民館と町内会という二つの制度で地域の自治的な活動がなされていたが、震災によって一部町内会が機能停止状態に陥ると、公民館がその役割を一部肩代わりし、地域の自治的な仕組みを完全には失することなく維持することができた。また、公民館主導で、新たな町内会の再編も進められている。一方で、吉里吉里地区の復興まちづくりは、決してこれらの制度のみに依存しているわけではなく、従来の制度を上手く活用し、時には従来の制度的枠組みを超えて〈必要（ニーズ）〉に応答しようとする人々がいるからこそ成立可能であった。そして、その応答は、営為の質的転換を伴いながら存在し続ける「当たり前」の思想に支えられていることを見てきた。

さて、2018年1月現在の吉里吉里地区は、住宅の再建が進み、2月には新たな公民館の完成披露を控える。嵩上げ工事が2016年末に完了してからの1年余りで、地区の街並みは急激に変化している。2017年の秋には、遅れていた防潮堤の工事も漸く始まった。ハード事業が進捗し、目に見える形での復旧が進む中で、「見かけの復興」は完成に近づいているように思われる。ここで本節では、本稿冒頭で確認した通り、多様な文脈で使用される「復興」という言葉について、吉里吉里地区においてはどのようなものとして捉えることが可能であるのか、改めて検討する。またそのうえで、「復興」を住民が主体的に担うとはどのようなことを指していたのかを明らかにしていく。

#### 1-1. 吉里吉里地区における「復興」とは何か — 「当たり前」と「復興」の関わり —

上記の内容を検討するにあたり、復興協議会長のF氏の発言を参照する。

「ハードとソフトの両輪があっただけで進んでいるんですね。震災で平成23(2011)年がここだとすると、震災で奈落の底に落ちちゃったんですよ。で今3年、4年5年たってやっと、プラマイゼロのところに戻ってきたんですよ。これまではマイナス、氷点下の世界だったんですよ。で、これからこうなる(筆者註：平成23年に一旦底に落ち、平成23年の水準にゆっくり戻ってきた様子を指し示す。現時点では平成23年の水準に戻っており、そこから更に上に伸びていく様子を表しながら)んで、こっからがスタートです。これから家が建ちましたけど、家がゴールじゃないんですよ。だからそういう意味では今まではハードの時代だった。(筆者：つまり、今までは「復旧」だったってことですか?) そうそうそう。家が

建ったら、せっかく建てた家で幸せな生活を送るためにはソフトの面が大事。」(2017年11月ヒアリングより<sup>108</sup>)

ハード事業に関する合意形成が早く、ソフト事業にも公民館を中心に早くから取り掛かってきた吉里吉里地区であっても、まだこれから取り組むべきことは山積しているのだと彼は言う。たとえば、先のヒアリング(2017年11月実施)で、F氏は町内会再編についても言及している。

F氏によれば、2~30年前は公民館よりも町内会活動が「行け行けどんどん」であった。町内会の側から公民館に「公民館とかがって(=重なって)しまう」「公民館が事業やると町内会が独自の事業できないからやめてしろ」と頼むほど、各町内会の活動が盛んであったという。しかし、年月の経過とともに地域住民の世代の変化や、社会的な環境の変化が起こるなかで、後継者不足などの問題を考慮し始める町内会も現れ始めていた<sup>109</sup>。その渦中に起こったのが今回の東日本大震災であり、その津波被害によって、4丁目以外の3町内会は「ゼロになった」、すなわちリセットされた状態になっている。

現在、町内会の再編を進めるにあたり、震災以前から問題となりつつあった高齢化、そして人口減少を見据えながら、それでも維持可能な自治組織の仕組みづくりを検討している。具体的には、ある程度の人口減少にも耐えうるように従来の区画より大きめの区切りで町内会を作ることや、あくまで町内会中心の仕組みに拘り続けるのではなく、再建後の地域の中心部に位置する公民館を、町内会の「接着剤、場合によっては司令塔になる」という役割として地域の合意を醸成していくといった可能性を議論の俎上に載せながら検討を進めている。これは、吉里吉里地区において過去を参照し再構成、あるいは将来に視点を定め「再構成」された「日常」を、地域のアイデンティティを維持する重要な側面と捉え、形を変えても維持していこうとする営みに他ならない。

このことから、吉里吉里地区における「復興」は、単なるハード面における復旧に留まらないのはもちろんのこと、ソフト面でも、単に震災以前のシステムを再建するだけではなく、震災前から地域が抱えていた課題を視野に入れながら、将来起こりうる課題までを考慮した地域のありかたを考え、実践に移していくことを指していると考えられる<sup>110</sup>。

また、F氏は「運動会に出て来れるような人はいいんだ。これからは出て来れないのことをやらなくては」(2017年10月参与観察より)、各種会議を経て「今(はまだ)考えただ

<sup>108</sup> 同様の発言は、2017年10月に筆者が吉里吉里地区大運動会後の懇親会に参与観察した際にもなされている。

<sup>109</sup> 具体的には、役員を担う人が減っているという問題のほかにも、各町内会の中にある単位としての「班」も、人口減少によって単独では維持できなくなり、近隣の班とまとめている例は、A氏へのヒアリング(2017年6月実施)等でも見られている。

<sup>110</sup> これは、室崎(2015)のいう「大きな復興」と近い捉え方である。「大きな復興」とは、原状回復的な復旧(=「小さな復興」)ではなく、災害によって顕在化した、社会が従前から持っていた社会的矛盾の本質的な解決を図ることまでを課題として含めた復興のありかたを指している。

けなのさ。じゃあそれを具現化するなり行動するのは、これからの課題だ」(2017年11月ヒアリングより)と述べている。このように、地域の将来までを見据えた計画を立案し、それらを実践に移していくことまでも含めて、「復興」を捉えているということがわかる。そして、この「復興」—震災前から地域が抱えていた課題を視野に入れながら、将来起こりうる課題までを考慮した地域のありかたを考え、実践に移していくこと—は今、まさに始まったばかりであり、今後も続いていくのである。

この「復興」のありかたは、質的転換を経た「当たり前」の思想—将来に視点を定めた「再構成」—とも通ずる<sup>111</sup>。この「復興」の主導権を握るのは、行政でも外部支援者でもなく、「当たり前」の思想を持った吉里吉里地区の住民なのであろう。

表 4-1 「当たり前」としてなされる営みの質の転換と「復興」との関連性

表現	「当たり前」の再構成	「当たり前」の将来に向けた「再構成」
視点	過去	将来
内容	震災前にあったはずのものを現在の視点から再構成し、蘇らせるか継続する行為	過去を参照しながらも、より良く行き、次(翌年や将来)につなげようとする行為
語りの例	「震災前と同じ行事はすべて、小さくても、種目が減ろうが午前中で終わらせようが、やろう。やらないっていう思い出にはしたくない。」	「去年あんだだけ大変なんだけどここまですでできたから、今年はもう少しできるよね」「それが毎年の積み重ねで今がある」
本稿の捉え方	「復旧」	「復興」

出典：ヒアリングデータをもとに筆者作成

## 1-2. 吉里吉里地区における主体性とは何か — 一個の「当たり前」から地域の「当たり前」へ —

前章で、吉里吉里地区において復興を中心になって進めてきた人々は、歴史的文脈(通時的背景)や他者との関係性(共時的背景)のなかで、<責任 engagement>を引き受け続け、自分たちの力で将来を「再構成」し続けようとする、言わば<強くあろうとする主体>であった。そして、震災後の吉里吉里地区を支えているのは、<弱い主体>の状態に留まらず、「当たり前」のこととして自ら働きかけを続ける、逞しい<強くあろうとする主体>の存在であろうという点を指摘してきた。

ここで一旦、これまで行ってきた吉里吉里地区の住民個人の主体のありかたに関する議

<sup>111</sup> 一方で、過去を再構成する「当たり前」の行為は、「復興」と対置して「復旧」と捉えることもできよう。表 4-1 ではこれを踏まえた表記を行っている。

論から離れ、町内の別の地区との比較の中で、吉里吉里地区における地域としての主体的なありかたが如何に発現してきたかについて、整理を試みたい。ここでは、防潮堤の高さをめぐり意思決定のプロセスを手掛かりとする。

吉里吉里地区から見て山を越えた町方側に位置する大槌町赤浜地区では、県が提示した高さ 14.5 メートルの防潮堤案を住民が拒否し、震災前と同じ海が見える高さ（6.4 メートル）での防潮堤再建を決めている<sup>112</sup>。これを「主体」的であるとみる文献や映像資料が複数存在し<sup>113</sup>、そのうち何点かはこの決定を肯定的に捉えている<sup>114</sup>。

一方、吉里吉里地区の場合、県が提示した最大 9 メートルの盛土（嵩上げ）を伴う区画整理や、12.8 メートルの防潮堤案をそのまま受諾している。特に防潮堤は、完成後は海が見えなくなってしまうのにもかかわらず、大きな反対は出なかった。

図 4-1 吉里吉里公民館仮庁舎から見た吉里吉里海岸



出典：筆者撮影。2017 年 7 月現在、道路の先に海が見える<sup>115</sup>。

<sup>112</sup> これについて、坂口は第 89 回日本社会学会発表資料のなかで、県が提示した 14.5 メートルの案をそのまま受諾した隣の安渡地区と比較する形で、「防潮堤の高さを規定する要因は、震災前の平時における産業構造の差異（地域に占める漁業者割合の程度）や生活構造の土着性の差異、そして海と住民との生活をつなぐような共有資源の有無の 3 要因であった。中でも、海を媒介とした共有資源に対する住民の集会的意識の差が大きく影響していることが伺えた。」と結論付け、地区のシンボリック存在であった蓬莱島が見えなくなることへの抵抗が赤浜地区住民の主体的な選択につながったとしている。

<sup>113</sup> 註 113 の文献及びドキュメンタリー映画『赤浜ロックンロール』など。

<sup>114</sup> ただし、この決定によって、かえって赤浜地区の復興が遅れ、住民の流出が相次いでいるという指摘を行う記事（岩手日報 2016 年 7 月 30 日付）も見られる。

<sup>115</sup> 2017 年 11 月訪問時、防潮堤の建設工事が始まっていた。

第Ⅰ章で述べたプロセスを参照すると、吉里吉里地区においては、このような街づくりに大きくかかわるような決定は、まずは役員会（または復興協議会）に事前に提案され、地域の中心となってきた人物の意見を聞き、更に調整したうえで、復興まちづくり懇談会の場で住民に提示される。吉里吉里地区の場合は、この場で赤浜地区のような反対が出ず、当初の方針が概ね変更なく決められたとみられる。

本稿でこれまで述べてきたことから明らかなように、ハード事業に関して大きな反対意見が出ず、行政の提案をそのまま受け入れたからと言って、吉里吉里地区が主体的でないと思えるのは早計である。詳細は第Ⅱ章で述べた通りであるが、吉里吉里地区では、町内の他の地区では実現が不可能であった被災年からの祭りの開催を実現し、行政から提案されるよりも先に自治会の創設や町内会の再編を行い、町内会が一部機能停止に陥っても既存の公民館制度を活用した地域包括型の活動を行うなど、他の地域と比較しても先進的な地域ということができると考えられる。つまり、赤浜地区で見られたような「主体」的なありかたと、吉里吉里地区で見られるような主体的なありかたは質的に異なるということができよう。

この点について、下北沢再開発問題を対象とした三浦（2016）の議論を手掛かりに、吉里吉里地区の主体的なありかたを整理する。

三浦は、望ましい「共生」社会<sup>116</sup>をいかに実現するかという点においては、複数の構想<sup>117</sup>が存在することを明らかにし、＜対抗型の政治的構想＞＜連帯型の政治的構想＞＜イベント型の政治的構想＞に分類している。以下、それぞれ＜対抗型＞＜連帯型＞＜イベント型＞として説明を試みる。

＜対抗型＞とは、一連の都市計画を推進する制度内の諸エージェントを「敵」として設定し、境界線を引き、そして制度内外で自身の主張の正当性、正統性を主張することで、計画を止めることが共生社会を実現するには最重要であるという構想である。＜連帯型＞とは、「敵/味方」というような境界線を引くのではなく、運動主体と制度内の諸エージェントが協働して討議をしていくことが、より良い共生社会に向けた第一歩となるという構想である。最後の＜イベント型＞とは、さまざまなイベントによって、問題に関して無自覚な多くの人を巻き込んでいくことを優先する構想である。

下北沢の再開発と大槌町における東日本大震災からの復興では異なる部分も大いに存在するものの、ある種の新しい「社会」を生み出していくという点では共通する部分も多い。そこで、この3つの型を参照し、赤浜地区及び吉里吉里地区の主体的なありかたを再検討すると、県の提案を拒否し、案を修正するに至った赤浜地区の事例は＜対抗型＞に近いとい

---

<sup>116</sup> 立場によって、どのような「共生」社会が望ましいのかに齟齬があることについては、三浦自身も同書の中で言及している。

<sup>117</sup> 「この構想は、どのような「政治」で既存の制度を問題化し、新しい社会の形成を実現させるのかという意味世界であり、理論的、経験的に空間的な対象である」（p.241）と述べている。それぞれの型に付された「政治」という言葉も、同様の意味を踏まえていると考えられる。

えるのに対し、吉里吉里地区のような事例は〈連帯型〉に近いといえる<sup>118</sup>。第 I 章で述べたように、吉里吉里地区はもともと、町内でも独立意識の強い地域であった。しかし、これまで明らかにしてきたように、震災後の吉里吉里地区では、地域住民自身がリーダーシップを執る、自分たちでできることは自分たちでやりながらも、行政や外部支援者を上手く「活用<sup>119</sup>」し、納得のいく提案や必要な情報は受け入れながら「復興」を進めていると考えられる。

以上の分析を踏まえ、本稿では、吉里吉里地区の主体性について、「活動の主導権は吉里吉里地区の住民自身が担いながらも、行政や外部支援者を上手く「活用」し、協働しながら復興まちづくりを進めていくこと」というものであったと捉える。なお、このことは、震災直後より地域のリーダーとして地域を引っ張ってきた一人である、公民館長 H 氏の発言からも裏付けられる。

「確かに海が見えなくなるって人もいたけど、元々家が建ってて海は見えなかったから、とにかく早く受け入れて復興を前に進めようと説明した。」「ハードを先にやるんじゃなくて、その分ハードとソフトを一緒に復興させようとやってきた」

(2017 年 10 月、参与観察時の発言より)

「震災前は外部の人が来ることは(定期的な交流を除いて)ほとんどなかった。」「(震災後は)吉里吉里はこう(いう地域)なんだ、と受け入れる、一緒に作っていく。」

(2017 年 2 月ヒアリングより)

以上のように、吉里吉里地区では「活動の主導権は吉里吉里地区の住民自身が担いながらも、行政や外部支援の手を上手く「活用」し、協働しながら復興まちづくりを進めていく」という形での主体的な在り方で「復興」がなされてきた。

繰り返しになるが、このような主体的な「復興」が成り立つのも、吉里吉里地区の住民の「当たり前」という思想があってこそである。「当たり前」という思想のもとで、過去の日常を再構成し、再構成された「日常」を取り戻す、あるいは維持することはもちろん、震災以前に抱えていた地域の課題の解決を目指すことまでを含めた「再構成」を行っている。そして、その将来に向けての「再構成」は、歴史的な文脈(通時的背景)や他者との関係性(共

---

<sup>118</sup> 〈連帯型〉を裏付けるものとして、公民館長 H 氏は、他の地区と比べて早く町内会の再編が進んでいることについて、「スケジュールをきちんと決めて、役場と一緒に共同でいかないと、官民一体とならないと進んでいかないと述べている。更に、町内会を公民館から徐々に独立させていくプロセスに関する語りの中で、「もう 7 年も経っているからこの辺で自立しないと」という発言も見られており、震災から時間の経過が経つ中で、スケジュールを組み、早く着実に実行していくことの重要性を認識していると考えられる(いずれも 2018 年 1 月ヒアリングより)。

<sup>119</sup> この「活用」という語には、単に幅広く受け入れて協働するというだけではなく、地域住民自身が必要に応じて取捨選択しているという意味も含んでいる。

時的背景) のなかで、〈責任 engagement〉を引き受け続けようとする行為に支えられている。言い換えると、本節で改めて捉え直してきた主体性を実現しうる〈責任 engagement〉は、歴史的文脈や他者との関係性の中で〈役割〉を自覚した者でなければ、引き受け続けることは困難である。

吉里吉里地区の地域としての主体性は、このように地域における〈責任 engagement〉を「当たり前」のものとして引き受け続けようとする、そして引き受け続けることのできる住民が複数存在しているという点に担保されているのであろう。

## 2. 今後の展望 —吉里吉里の主体性は継続し得るか—

前節で述べたように、現在、吉里吉里地区では、将来に視点を定めた「復興」の最中にある。将来にわたっても現在の吉里吉里の主体的なありかたを支えていくためには、〈責任 engagement〉を引き受け続ける存在が必要不可欠だ。このありかたが継続しうるのかについて、明確な予測を立てることはできないものの、今後の展開可能性について本節では考察を試みたい。

まず、公民館長 H 氏は、(人口減少等の様々な問題を抱えてはいるものの)「吉里吉里は若いリーダーが育ってるから大丈夫だ」(2017年2月、11月ヒアリングなど複数回)という。H 氏自身は、H 氏らの次の世代を意識していることはもちろん、現在の子供たちや高校生までを巻き込みながら地域の活動を行うことを目指しており、意識的に将来の吉里吉里地区を担う世代を育てていこうとしている<sup>120</sup>。

また、震災を機に、これまで地域の活動にはあまり積極的でなかった若手が地域に対する目を向け始めた例も見受けられる。

現在は大槌町の社会福祉協議会に勤務する 20 代の MK 氏は、自身の親も自分自身も震災以前はそれほど地域の活動に積極的ではなかったという。しかし、釜石での就職を控えた大学 4 年生の春、帰省している時に被災し、避難所で声をかけられたことをきっかけに地域の手伝いをするようになった。彼は最初、「やっぱり、本能的というか、ばって見たときに、ご高齢の方が多くて、男ってなって、若い人っていうのは目立ったりっていうか、そんなかで自分がやっぱり、大変なときに動ける人が手伝わなくてっていう単純な」動機で手伝っていたそうだ。しかし現在では、「仕事して帰って来てって (同世代が地域のことまでなかなかできない)、って気持ちはわかるんですよね、やっぱり。大変だしっていう。まあ (でも)、徐々にね、少しでも地域の関わりっていうのをしていくことで、これからの生き方っていうか、ここで、吉里吉里とか大槌で死ぬまで住んでいくっていうところで考えれば、やっぱりそういうつながりっていうのは絶対、絶対助けてもらうことってあると思うんですよ。ちょっと同級生、同世代にも伝えていかなきゃない。」「10年20年したときにどうなってるかわ

---

<sup>120</sup> 「新しい町内会や班を作って、次世代のリーダーを育てて引き継ぐのが仕事」であると公民館長 H 氏自身は述べる。活動自体も、小中学生や高校生を上手く巻き込みながら行っている。(2017年2、6、7月実施のヒアリングより)

からないですけど、劇的に環境がよくなるということは考えにくいと思うので、そうなったときはみんなで助け合える、そういう関係性が一番、これからの、時代っていうかここで生きていくうえで一番必要なことなのかな」と語る。この語りからは、それまで地域活動に関心を持ってこなかった人々が地域に目を向け、地域の人々となつなかりを築いていこうとする様子が見て取れる（2017年2月ヒアリングより）。

また、更に下の世代に目を向けると、「当たり前」を「拡張」し地域の活動に当たった一人であるA氏の長男のS君<sup>121</sup>は、自ら生徒会長として「中学校をもっと地域に開こう」と取り組んできたと語る。また、自身は進学を機に一旦吉里吉里を離れるものの、「大人になったらまた戻って来たい」「地域をつくる大人になりたい」と語る。

「改めて見ると、やっぱり中学生とかがどんどんそういうの（祭りや運動会はもちろん、海岸清掃等の「楽しい」わけではない地域活動も）を引き継いでいかないと、この町もどんどんこうなくなっていくのかなって思うと、そういうのもやっぱり嫌なので、自分が大人になって来ても吉里吉里がこのままで残ってるためには、自分たちがどんどん継いでかなきゃいけないのかなって思って、じゃあ参加しなきゃないだろうっていうふうに思って。」

「（地域の方に向けた挨拶運動を）やり終わって思ったのが、成果と課題がわかりづらい活動なんですよね、全部。学校内だったら、自分が感じたように挨拶良くなってきた、とかそういうことなんですけど、地域の反応を聞くわけにもいかないし、どうなったかがわからない活動の中で、どんどんいろいろやって、なんか合ってるかどうかはわからない活動だったので、（中略）地域の方に目を向けすぎたのかもしれないかなって思ったんですけど、今、今度自分たちの下の代に引き継がれたときに、（中略）みんななんか、「地域とのつながりが」っていうふうに言ってくれたので、あ、そうやって後輩にこう語り継いでいくことがこの活動の成果なのかなって、やっぱり、地域の人がどう思うかはわからないので。やっぱり、そうやって語り継ぐじゃないですけど、自分たちが作ったものを下の代がどんどんやってってくれるっていうのは、やっぱり、この一緒にやってきた人たちの中ではこの活動がいいっていうふうに思ってくれたのかなと思ったので、続けてもらえればうれしいかなってふうには思います。」

「やっぱり、将来的には大人になったら帰って来たいって思うし、ずっとそういう風に思っ  
て、中学校のうちから地域とのかかわりっていうのを大事にしてきたので、やっぱり戻って来たいと思うんですけど、自分は野球をやるので、応援してもらいたいですし、（中略）吉里吉里出身のやつだからって応援してもらえると嬉しいし、そういうのもやっぱり力にな

---

<sup>121</sup> 2017年2月にヒアリング実施。ヒアリング時は中学3年生であった。中学3年時には生徒会長を務める。現在は高校1年生で、町外の高校に進学し、寮生活を送る。



と思うので、それを目的にやってたわけじゃないんですけど、今後そういうのがやっぱりやっててよかったかなって思うところは出てくるんじゃないかなと思います。そういうふうにやっぱ地域の人も応援してくれる町なので、みんなわかっててくれるし、やっぱりそういうところでやっぱりこの町が好きだなんていうのは改めてそういうところが、あったかさとか、だからやっぱり大人になったら帰って来たいし、自分もそういう街を創る大人になりたいなんていうのは思います。」

被災当時小学校低学年だった S 君は、「(震災) 前の吉里吉里を深く知ってるわけでもないし、(中略) 大人みたいに長く吉里吉里にいて、こういうところがこだわりがあったっていうのがあんまりない」という。すなわち、S 君の発想には「「当たり前」の再構成」のプロセスが存在しているわけではない。しかし、それにもかかわらず、彼は彼なりに吉里吉里という地域の魅力や吉里吉里の「当たり前」—当然のことながら震災を含めた歴史的な文脈の上に成り立つ—を感じ、将来は自分が地域を担おうと考えている。

MK 氏のように、それまで地域活動に関心がなかった層が地域のことを考え始めたり、S 君のように、震災前の吉里吉里を深く知らない世代が将来の地域を創ろうという意志を持つ。このように、次世代以降の吉里吉里地区を担おうとする人々が確かに現れている点は、吉里吉里地区の主体的な地域のありかたを維持するうえで大きな希望となることは間違いないだろう。

一方で、課題がないわけではない。

A 氏は、地域の現状を見ていて「震災を機に地域活動に積極的になってきた若手もいる。逆もいる。」「だから今の若い人たちってそんなにコミュニティってところに、意識いつてねえのかなあとかって思いながら、寂しさもあるんだけど、どうなんだろうね。微妙だねそれはね。(中略) だからといって地域愛がないわけじゃないんだけどね」(2016年7月、12月ヒアリングより) と語る。また、ままりばの代表 M 氏も、母親たちの活動に参加するのは 30 代以上の母親に限られていることに触れながら「20 代のお母さんたちってどこにいるのかな。」(2017年9月ヒアリングより) と述べている。

このように、地域の現状に鑑みると、従来の主体的なありかたをそのまま踏襲することは難しくなっていく可能性も孕んでおり、楽観的に捉えることはできないだろう。吉里吉里らしい主体的なありかたを維持していくためには、何らかの工夫が必要となってくる可能性もある。

言うまでもないが、吉里吉里地区は、震災後に大きな変容を遂げた。震災後のこの地域では、従来の「当たり前」の価値観を共有するばかりではない、様々な価値観を有する人々が集っては去り、様々な生活の時間を共有しながら約 7 年が経過した。そのような過程で、地域を動かしていく人々も、震災前から続く「吉里吉里の「当たり前」」を維持しながらも、震災後にそれまでは潜在的であった〈必要(ニーズ)〉を発見し、その〈必要(ニーズ)〉

に対応していく中で、それが新たな吉里吉里の一つの側面—新たな「当たり前」—を築いているとも言える。

吉里吉里は、震災によって変わったものと変わらないもの、双方を受け止め、この地域なりの地域運営のありかたを再度模索しながら、「復興」を進めていく軌跡の途中にある。まさに今こそ、街並み再建の「次」のステップへと進むための、重要な「通過点」であるのだろう。

### 3. 他地域及び将来の災害時への展開可能性について

最後に、吉里吉里地区のこのような主体的なありかたが、他の地域や将来的に起こりうる災害の際に展開可能であるのかという点について考察したい。

これまで見てきたように、吉里吉里地区では、リーダー層が地域に存在する〈必要（ニーズ）〉を「発見」し、またリーダー自身が地域の中での〈役割〉を認識し、それを果たそうという〈責任 engagement〉を引き受け続けること、そして、その〈責任 engagement〉によってそれまでの「当たり前」を無意識のうちに「拡張」し、地域の活動に当たってきたこと、更に、その「当たり前」の「拡張」が、震災直後に止まらず、7年間にわたってずっと続いてきたことを確認してきた。これらは、吉里吉里地区において歴史的に積み重ねられてきた経験の履歴が存在しており、更に地域の住民との間に「当たり前」を「拡張」できるような関係性がある、という基盤のうえに初めて実現されうるものであった。そして当然のことながら、これだけの長期間、相当な密度で「当たり前」の「拡張」を実行していただくの力量も必要であろう。そのため、吉里吉里地区の事例が東日本大震災時に機能していたと評価できるからといって、東日本大震災で被災した他の地域や、将来の災害で被災した地域において吉里吉里地区のようなありかたをそのまま移植しようとしたところで、そもそも難しいであろうし、仮に可能であったとしても、何年にもわたる復興過程の間ずっと、そのありかたを貫き通すことができるのかという点には懐疑的である。

吉里吉里地区のような水準での地域運営が実効性のあるものとして機能し続けていくためには、少なくとも吉里吉里地区の場合には、それだけの〈責任 engagement〉を担える存在がおり、そして、その存在の〈役割〉が地域からも認められ、一層〈責任 engagement〉を果たしていくという構造に支えられている必要があった。吉里吉里地区ですら、この主体的なありかたを世代が変わった後も継続していくためには、更なる工夫が必要となる可能性を孕んでいる。ましてや、住民の意思と覚悟がない地域で、単に行政主導で新しいコミュニティを作ったとしても、それらを吉里吉里地区ほどの〈責任 engagement〉を引き受けるに足るものとして機能させるのは難しいであろう。

とはいえ、吉里吉里地区の事例から、どの地域においても活かせる視点も確かに存在する。

前節で整理したような「復興」のありかたを想定すると、復興まちづくりを行う際には、災害後から見た過去の「日常」を再構成し、それらの復活や継続を目指す側面と、災害以前の地域が抱える潜在的な問題点までを包括しながら構想するという行為に代表されるよう

に、単に「過去」を取り戻すだけではない、将来を「再構成」という視点が必要である。この「再構成」は、インフラやハード面での復旧やソフトの仕組みづくりの進捗の程度といったような、測定可能な側面で先の見通しを持つだけでなく、住民自身が将来に向けた「再構成」を行える、すなわち被災した人々が将来に向けて視線を向けることができるようになるということが非常に重要であろう<sup>122</sup>。そして、より具体的な構想を行う場面においては、それが地域で（行政や外部支援者の手を借りるにせよ）実現可能なのか、そして遡及的に見て単なる構想に止まっていないかどうか、検証していくことの必要性はどの災害についても共通していると考えられる。

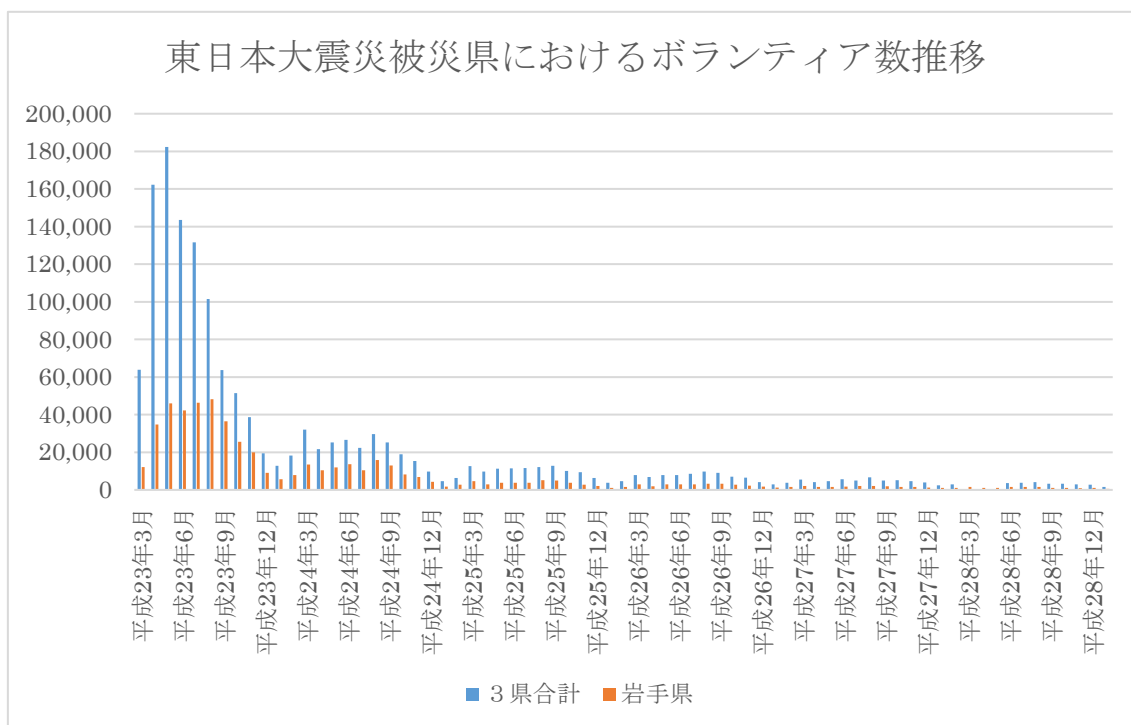
どのような地域であれ、災害からの「復興」を目指すとき、それらは単なる原状回復でも、住民が参画して意見を出し合いハード面での街並みやソフト面の仕組みをともに構想するだけでも不十分である。いわば、「復興」は一つの「契機」に過ぎない。そこから地域が抱える課題も包括的に検討し、将来のまちづくりを行っていく必要があるということ、そして、その実現のためには大きな覚悟と＜責任 engagement＞が必要であるということ。これこそが、吉里吉里地区の事例から得られる示唆なのではないだろうか。

---

<sup>122</sup> 当然のことながら、一人ひとり、どのようなタイミングで将来に視線を向けられるかには差異がある。これをやったから気持ちが前を向く、ということを一律に決めるのは不可能であるし、全員が前を向けているわけではない状況でもまちづくりは進めなければならない。逆に、まちづくりが進んで、たとえば自宅を再建できたことによって気持ちが前を向く、ということもあろう。吉里吉里地区の場合で言えば、将来に視線を向けられている人が、そうではない人々の分も役割を引き受け続ける、そして引き受け続けながら、未だに前を向くことのできない人々の存在を忘れずにきちんと心に留め（公民館長 H 氏や A 氏、F 氏）、急かすこともなく、いつか地域の活動に出て来ることができるよう待っているということが、実は地域の「復興」を目指すうえで忘れてはならない視点を網羅しているとも言えるだろう。

## 参考資料

### 東日本大震災被災県におけるボランティア数推移（3県及び岩手県）



出典：全社協（2017）より筆者作成

大槌町における東日本大震災前後の漁業従事者数

		単位	2013	2008	
漁業経営体数		経営体	132	225	
漁船	無動力漁船		隻	1	9
	船外機付漁船		隻	191	296
	動力漁船	隻数	隻	27	99
		トン数	T	388.9	567.7
11月1日 現在の海上 作業従事者数	計		人	240	408
	家族	小計	人	91	178
		男	人	90	159
		女	人	1	19
	雇用者		人	149	230
陸上作業 最盛期の 陸上作業 従事者数	計		人	503	848
	男		人	301	482
	女		人	202	366
	家族	小計	人	240	369
		男	人	138	248
		女	人	102	121
	雇用者	小計	人	263	479
		男	人	163	234
		女	人	100	245
新規就業者	計		人	5	2
	個人経営体の自家漁業のみ		人	4	2
	漁業雇われ		人	1	-

出典：農林水産省（2015）及び（2010）より筆者作成

大槌町の男女年齢別人口（平成 27 年度）

単位：人

	男 女 合計	男	女
総数	11719	5758	5961
0～4 歳	367	192	175
5～9 歳	375	196	179
10～14 歳	447	229	218
15～19 歳	462	212	250
20～24 歳	347	186	161
25～29 歳	437	234	203
30～34 歳	492	261	231
35～39 歳	597	316	281
40～44 歳	722	414	308
45～49 歳	761	408	353
50～54 歳	783	408	375
55～59 歳	876	455	421
60～64 歳	1048	577	471
65～69 歳	1063	525	538
70～74 歳	891	405	486
75～79 歳	810	320	490
80～84 歳	660	249	411
85～89 歳	408	134	274
90～94 歳	129	31	98
95～99 歳	38	5	33
100 歳以上	4	-	4
年齢「不詳」	2	1	1

出典：総務省統計局, 「国勢調査結果」より筆者作成

### 大槌町の震災前後の世帯数変化（平成 22 年及び平成 27 年度）

単位：世帯

平成 27 年度	平成 22 年度
4927	5689

出典：総務省統計局，「国勢調査結果」より筆者作成

### 吉里吉里地区人口及び世帯数推移

単位：人

※括弧内は世帯数（単位：世帯）

年	1 丁目	2 丁目	3 丁目	4 丁目	計
2015	212(91)	258(133)	348(124)	631(246)	1549(594)
2010	491(165)	635(214)	452(134)	555(197)	2133(710)
2005	531(169)	682(215)	449(137)	641(211)	2303(732)
2000	553(178)	710(217)	493(143)	672(218)	2428(756)

出典：総務省統計局 「国勢調査結果」より筆者作成

なお、東日本大震災で津波浸水被害を受けたのは 1～3 丁目の一部である。

大槌町民及び大槌町内事業者における男女 15 歳以上の就業者人数（平成 27 年度）

単位：人

産業割合	大槌町民	従業地町内
総数（産業大分類）	5769	5138
A 農業，林業	183	178
うち農業	152	147
B 漁業	173	141
C 鉱業，採石業，砂利採取業	56	83
D 建設業	1160	1201
E 製造業	1006	623
F 電気・ガス・熱供給・水道業	24	21
G 情報通信業	25	28
H 運輸業，郵便業	259	176
I 卸売業，小売業	662	543
J 金融業，保険業	44	39
K 不動産業，物品賃貸業	36	53
L 学術研究，専門・技術サービス業	98	112
M 宿泊業，飲食サービス業	272	251
N 生活関連サービス業，娯楽業	126	114
O 教育，学習支援業	148	171
P 医療，福祉	632	573
Q 複合サービス事業	79	81
R サービス業（他に分類されないもの）	373	308
S 公務（他に分類されるものを除く）	382	410
T 分類不能の産業	31	32
第 1 次産業	356	319
第 2 次産業	2222	1907
第 3 次産業	3160	2880
（割合（%））第 1 次産業	6.204252	6.247552
（割合（%））第 2 次産業	38.72429	37.34822
（割合（%））第 3 次産業	55.07145	56.40423

出典：総務省統計局，「国勢調査結果」より筆者作成



大槌町における昼夜間人口及び従業・通学地<sup>123</sup>（平成 27 年度）

単位：人（昼夜間比率のみ%）

総数（夜間人口）	11759
従業も通学もしていない	4880
自宅で従業	426
自宅外の自市区町村で従業・通学	4325
他市区町村で従業・通学	2092
県内他市区町村で従業・通学	1991
他県で従業・通学	82
従業・通学市区町村「不詳・外国」	19
従業地・通学地「不詳」	36
総数（昼間人口）	11034
うち県内他市区町村に常住	1186
うち他県に常住	162
流出人口	2073
流入人口	1348
昼夜間人口比率	93.83451
総数	5769

出典：総務省統計局，「国勢調査結果」より筆者作成

<sup>123</sup> 1) 労働力状態「完全失業者」，「家事」及び「その他」。2) 労働力状態「不詳」を含む。3) 従業・通学市区町村「不詳・外国」及び従業地・通学地「不詳」で，当地に常住している者を含む。

大槌町の有史における主な地震・災害被害のまとめ

西暦 (年)	和暦 (年)	名称	M <sup>124</sup>	規模 125	具体的記述 <sup>126</sup>
869	貞観 11	貞観地震	8.3±1/4	4	五月二六日、陸中大いに震動し、流光昼の如くになり、城郭・倉庫・門墻垣頽落顛覆するもの数知れず。また津波も襲来し溺死したもの数千人となる。
1088	寛治 2				五月一三日、宮古の辺に午後八時頃より翌朝まで九回の地震あり。大波午前一時まで三～四回来襲したと伝わる。
1586	天正 14				五月一四日、陸中地方に津波あり、被害は不明。 なお大槌町史編纂委員会（1966）『大槌町史 上巻』によれば、震源地はペルーであった。
1611	慶長 16		8.1	4	一〇月二八日、三陸の地大いに震い、仙台・南部・津軽・松前沿岸海嘯。大槌地方は大地震三度の後大波が押寄せ、浦々にて人死数知れず。鶴住居大槌村横沢の間にて二十人死亡、大槌・津軽石は市日で数多く死亡する。 なお宇佐美（2003）前掲書によれば、津波の波源は昭和 8 年の三陸津波の波源とほぼ一致する。

<sup>124</sup> マグニチュード。宇佐美龍夫（2003）『最新版 日本被害地震総覧 [416]-2001』東京大学出版会による。特に記載が見られないものについては空白とした。

<sup>125</sup> 津波の規模。-1 は波高 50 cm 以下、無被害。0 は波高 1m 前後でごくわずかの被害がある。1 は波高 2m 前後で、海岸の家屋を損傷し船艇をさらう程度。2 は波高 4~6m で、家屋や人命の損失がある。3 は波高 10~20m で、400 km 以上の海岸線に顕著な被害がある。4 は最大波高 30m 以上で、500 km 以上の海岸線に顕著な被害がある。宇佐美（2003）前掲書によるが、それ以外の文献を論拠としたものについては註釈を付けた。特に記載が見られないものについては空白とした。

<sup>126</sup> 特に註釈のない記述については大槌町漁業史編纂委員会（1983）『大槌町漁業史』による。

1616	元和 2			1 <sup>127</sup>	一〇月二八日 <sup>128</sup> 、大槌地方、朝から度々地震、沖で「どんどん」となり大波山の如く来襲する。この日は市日にて死亡者が多数となった。 前掲の『大槌町史 上巻』によれば、震源は陸前沖である。
1624	寛永元				一一月二三日、相州小田原地方にて大海嘯、三陸沿岸も余波をうけて死傷があったという。
1662	寛文 2				九月九日、南部領大震海嘯、被害不明。
1677	延宝 5		7 1/4~ 1/2	2	三月一三日、陸中国南部大地震、大槌浦・宮古浦・鉾ヶ崎浦等海嘯暴溢家々を破る。大槌では大津波来襲し家の敷居まで水が上がる。二〇軒余流失した。
1689	元禄 2				月日不明、陸中国海辺津波あり、被害不明。
1700 <sup>129</sup>	元禄 12		9	1~ 2 <sup>130</sup>	極月、大槌地方夜九ツ（午前零時）に大汐さし海辺は大騒ぎをするが、怪我人はなかった。 なお、宇佐美（2003）前掲書によれば、三陸沿岸の大槌浦に大汐上がり漁師家 2 軒、塩釜 2 工破損。津波高推定値は大槌 3.3m。北米沖カスケード沈み込み帯の地震（北米での津波高 10m 余）による。
1704	元禄 17				一一月二二日、此の年一一月より江戸上方方面殊の外大地震 <sup>131</sup> 。大槌地方でも二二日の晩四ツ（午後一〇時）過大地震があり、大騒ぎする。

<sup>127</sup> 大槌町史編纂委員会（1966）『大槌町史 上巻』による。また同書によれば、慶長 16 年と元和 2 年の伝承が混じっていることが指摘されている。

<sup>128</sup> 宇佐美（2003）前掲書によれば、同年 7 月 28 日に仙台沖を震源とする M7 の地震が発生したことが明らかにされているが、10 月 28 日に発生した地震に関する記述はない。

<sup>129</sup> 前掲『大槌町漁業史』には 1699 年と記されているが、元禄 12 年極月は西暦表記では 1700 年 1 月に相当すると考えられるため、宇佐美（2003）前掲書に合わせ 1700 年とした。

<sup>130</sup> 宇佐美（2003）前掲書の記述を元に筆者判断。

<sup>131</sup> これは元禄 16 年の地震（元禄地震）を指していると思われるが、発生年の齟齬の原因については不明である。

1751	宝暦元		7.0~ 7.4		四月二六日、高田大地震の余波として陸中国に津波あり。 五月二日、大槌地方、未刻（午後二時）より浦々へ大汐小汐数度指入、民家の敷板まで上がる。四日町八日町は海の様になるが、怪我人はなかった。 なお前掲の『大槌町史 上巻』によれば、震源はチリであった。
1763 <sup>132</sup>	宝暦 12		7.4	1	一二月一六日、暮六ツ（午後六時）過大地震、夜中拾二度の地震、宮古浦通鉾ヶ崎浦通これにより被害ありという。また翌年三月二七日迄地震が度々あったという。
1772	安永元		6 4/3 ±1/2		五月三日、大槌地方、午刻（正午）過大地震あり、栗林一名箱崎二名岩石崩れにより即死する。三貫島四方崩れ村々所々岩石崩れや山崩れがあった。
1774	安永 3				五月三日、大槌地方大地震、夏中の為か津波なく、箱崎村では磯物貝採りの女子共、山崩れ岩落ちて圧死したものの多数あり。 宇佐美（2003）前掲書によれば、安永元年の地震の誤記らしいとの記述がある。
1782	天明 2				七月一五日 <sup>133</sup> 、陸中津波のため被害あり。
1786	天明 6				月日不明、震源地陸前沖にして、伊達南部の海岸に津波襲来、被害不明。
1793	寛政 5		8.0~ 8.4	2	一月七日、大槌地方午刻（正午）大地震、浦々へ大汐押入り大槌村では流出船三艘、人家不尠破損。この地震以来昼夜数度の地震あり。

<sup>132</sup> 前掲『大槌町漁業史』には1762年と記されているが、宝暦12年12月16日は西暦表記では1763年1月に相当すると考えられるため、宇佐美（2003）前掲書に合わせ1763年とした。

<sup>133</sup> 宇佐美（2003）前掲書によれば、同日に相模・武蔵・甲斐を震央とするM7の地震が起こっている。本記述との相関関係については不明。

1830	天保元		6.5 ± 0.2		一二月二日、辰刻（午前八時）大地震女童共動転する。 なお、宇佐美（2003）前掲書によれば、震央は京都および隣国。
1843	天保 14				四月十日、大槌通地震大汐、山田中町まで汐上がる。
1855	安政 2				七月三日、十月二日共に地震あり、津波は伴わず。
1856	安政 3		7.5	2	七月二十三日、領内三閉伊通り午刻（正午）大地震、閉伊の沿岸に海嘯あり、宮古附近は最も被害が多かった。大槌では溺死一人、船二艘流され家々にも被害があった。
1864	元治元				二月二二日、三閉伊海岸地震、所々破損する。
1896	明治 29	明治三陸 地震津波	8 1/4	4	後述
1931	昭和 6				下閉伊・上閉伊両郡教会の山間で道路の亀裂、石垣の崩壊、壁の亀裂・剥落などがあった。（宇佐美 2003, p.301）
1933	昭和 8	昭和三陸 地震津波	8.1	3	後述
1960	昭和 35	チリ地震 津波	9.5	2~3	後述
1968	昭和 43	十勝沖地震	7.9	2	波のいちばん高かったのは八戸の北（百石-北沼）、野田・宮古湾・大槌湾等で、平均潮位上約 5m に達した。ちょうど干潮時であったせいもあり、津波の被害はそれほどでもなかった。（宇佐美 2003, p.410）
2011	平成 23	東日本大 震災	9.0		後述

出典：大槌町漁業史編纂委員会（1983）、大槌町史編纂委員会（1966）、大槌町史編纂委員会（1984）、宇佐美（2003）、秋道（2012）を元に筆者作成

註：「M（マグニチュード）」の出典と「具体的記述」の出典が異なるため、マグニチュードの値は必ずしも一致していない。

本稿に引用したヒアリング対象者の属性

N o.	名前	年齢 <small>134</small>	性別	震災前 町内会	本業	地域における役割	備考
1	公民館 長 H 氏	60 代	男	2 丁目	役場臨時 職員	大槌町公民館吉里吉里分館長ほか 吉祥寺、神社役員等	
2	A 氏	40 代	男	2 丁目	福祉職 (町内)	大槌町立吉里吉里学園 PTA 顧問 (小学校 会長、中学校 (中学部) 会長を歴任 <sup>135</sup> ) スポーツ少年団野球チーム監督	No.3 の HH 氏の兄 (4 人兄弟 3 番 目)
3	HH 氏	40 代	男	3 丁目	自営業 (町内)	「はまぎく若だんな会」会長	No.2 の A 氏の弟 (4 人兄弟 4 番目)
4	NM 氏	40 代	男	4 丁目 若葉会	製造業 (釜石)	4 丁目若葉会会長 消防団員	父親が若葉会創設 者
5	TS 氏	40 代	男	4 丁目 若葉会	製造業 (釜石)	4 丁目若葉会副会長 吉里吉里学園小学部 PTA 顧問 (前会長)	
6	MF 氏	80 代	女	4 丁目 若葉会		老人クラブ会長 初代若葉会副会長	
7	MK 氏	20 代	男	1 丁目	社協 (町内)	NPO 法人吉里吉里国理事	
8	F 氏	60 代	男	2 丁目	元役場職 員	吉里吉里地区復興協議会会長 天照御祖神社神主	
9	TA 氏	80 代	男	1 丁目	元製造業 (釜石)	元吉里吉里分館長 吉里吉里保育園理事長 吉祥寺護持会副会長 等	
10	M 氏	30 代	女	2 丁目	美容師 (町内)	「ままりば」代表 中学生から 0 歳まで 4 児の母	
11	K 氏	40 代	男	1 丁目	製造業 (釜石)	吉里吉里大神楽保存会	
12	KM 氏	40 代	女	1 丁目	看護・福祉 (町内)		No.11 の K 氏の妻 で、中高生 2 人の 子供を持つ
13	S 君	10 代	男	2 丁目	高校生	中学 3 年次生徒会長 ※現在は町外の高校で寮生活	No.2 の A 氏の息子

<sup>134</sup> 2018 年 1 月 1 日現在。

<sup>135</sup> 大槌町立吉里吉里小学校、同吉里吉里中学校が小中一貫校 (大槌町立吉里吉里学園) となり、それぞれ「小学部」「中学部」と呼ばれるようになったのは、2015 年以降のことであるため、表記に差異がある。

### 吉里吉里、大槌におけるフィールドワーク等の記録

日付	該当地域	内容	備考
2015/9/11	大槌	デイケア施設での交流（利用者、職員）	※1
2015/9/12	大槌	NPO 法人おらが大槌夢広場での面談	※1
	吉里吉里	デイケア施設での交流（利用者）	※1
2015/10/13	大槌	役場へのヒアリング（電話、メール） ※メールについては 2015/11/18 に回答	
2015/10/17	吉里吉里	吉里吉里小学校文化祭参与観察	※1
2015/10/18	大槌	デイケア施設運動会参与観察	※1
2015/10/19	吉里吉里	デイケア施設での交流（利用者）	※1
	大槌	子育て支援センターでの面談	※1
2015/11/27	大槌	デイケア施設での交流（利用者、職員）	※1
	大槌	デイケア施設職員の講演	※1
2015/11/28	大槌	デイケア施設でのイベント手伝い、参与観察、インフォーマルインタビュー	※1
2015/11/29	吉里吉里	わんぱく広場手伝い、参与観察	※1 ※3
	吉里吉里	デイケア施設での交流（利用者）	※1
2015/11/30	大槌	デイケア施設でのヒアリング（利用者数名）	
	吉里吉里	A 氏ヒアリング（2h）	
2015/12/1	大槌	デイケア施設でのヒアリング（利用者数名）	
	吉里吉里	デイケア施設でのヒアリング（利用者 3 名）	
2016/1/29	大槌	デイケア施設での交流（利用者、職員）	※1
2016/1/30-31	大槌、 吉里吉里	大槌感謝祭手伝い、参与観察	※1
2016/3/11	大槌	デイケア施設での交流（利用者、職員）、黙祷	※1
2016/3/12	吉里吉里	A 氏講演（2h）	※1
2016/6/14	吉里吉里	都内にて A 氏との交流（インフォーマルインタビュー）	※1
2016/7/27	大槌	役場職員ヒアリング（1h）	
2016/7/28	大槌	デイケア施設での参与観察、インフォーマルインタビュー（利用者、職員）	
	吉里吉里	A 氏ヒアリング（2h）	
2016/7/29	吉里吉里	A 氏ヒアリング（1h）	
	大槌	デイケア施設での交流（利用者、職員）	※2
2016/7/30	大槌	屋敷前復興住宅訪問	
	吉里吉里	砂の芸術祭、海と森の映画祭手伝い、参与観察	
2016/7/31	吉里吉里	砂の芸術祭片付け手伝い、参与観察	

2016/10/1	大槌	デイケア施設でのインフォーマルインタビュー（職員）	
2016/10/2	大槌	デイケア施設運動会参与観察	
	吉里吉里	吉里吉里地区大運動会、懇親会参与観察	
2016/12/19	吉里吉里	A氏への電話ヒアリング（1h）	
2017/2/15-19	吉里吉里	A氏へのインフォーマルインタビュー（数回）	
2017/2/16	大槌、 吉里吉里	M氏へのヒアリング（1h）	
2017/2/16	大槌	デイケア施設での参与観察、インフォーマルインタビュー（利用者、職員）	
2017/2/17	吉里吉里	公民館長 H氏へのヒアリング（2h）	
		TS氏へのヒアリング（2h）	
2017/2/18	吉里吉里	HH氏へのヒアリング（2h）	
		MK氏へのヒアリング（1h）	
		S君へのヒアリング（1h）	
		NM氏へのヒアリング（1h）	
2017/2/19	吉里吉里	わんぱく広場手伝い、参与観察	※3
2017/6/19	吉里吉里	公民館長 H氏へのヒアリング（2h）	
		MF氏他 1名へのヒアリング（2h）	
	大槌	住民へのインフォーマルインタビュー（1h）	
2017/6/20	吉里吉里	A氏へのヒアリング（1h）	
	大槌	役場職員による町方復興状況の案内	
2017/7/27	吉里吉里	公民館長 H氏へのヒアリング（2h）	
		A氏、TS氏へのインフォーマルインタビュー	
2017/7/28	吉里吉里	A氏へのヒアリング（1h）	
	大槌	デイケア施設での交流（利用者、職員）	
2017/7/29	吉里吉里	砂の芸術祭、海と森の映画祭手伝い、参与観察	
2017/7/30	吉里吉里	砂の芸術祭片付け手伝い、参与観察	
	大槌	福幸きらり商店街祭り参与観察	
2017/9/15	大槌	住民へのインフォーマルインタビュー（1h）	
2017/9/16-17	大槌	大槌祭り参与観察	
2017/9/18	吉里吉里	K氏、KM氏へのインフォーマルインタビュー	
2017/9/29	大槌	住民へのインフォーマルインタビュー（1h）	
2017/9/30	吉里吉里	TA氏へのヒアリング（2h）	
		吉里吉里地区大運動会準備、参与観察	
2017/10/1	吉里吉里	吉里吉里地区大運動会、吉里吉里地区大運動会片付け、懇親会参与観察、住民へのインフォーマルインタビュー	



2017/10/2	吉里吉里	公民館長 H 氏へのインフォーマルインタビュー	
2017/11/9	大槌	住民へのインフォーマルインタビュー (1h)	
2017/11/10	吉里吉里	F 氏へのヒアリング (2h) 及び公民館長 H 氏へのインフォーマルインタビュー	
2017/11/11	吉里吉里	K 氏、KM 氏へのヒアリング (1h)	
2018/1/17	吉里吉里	公民館長 H 氏への電話ヒアリング	

※1 東京大学大学院教育学研究科・教育学部のゼミに同行したもの。

※2 早稲田大学教育学部のゼミ生と共同で参加したもの。

※3 明治学院大学ボランティアセンターの活動に参加したもの。

## 参考文献

### 行政関係資料及び地域住民作成資料等

- 大槌町, 「大槌町公民館条例」(2018年1月9日取得, [http://www.town.otsuchi.iwate.jp/gyosei/reiki/reiki\\_honbun/b800RG00000236.html](http://www.town.otsuchi.iwate.jp/gyosei/reiki/reiki_honbun/b800RG00000236.html)).
- 大槌町, 2011a, 「大槌町災害復興基本条例」(2018年1月3日取得, [http://www.town.otsuchi.iwate.jp/gyosei/reiki/reiki\\_honbun/b800RG00000655.html?id=j9#e000000099](http://www.town.otsuchi.iwate.jp/gyosei/reiki/reiki_honbun/b800RG00000655.html?id=j9#e000000099)).
- 大槌町, 2011b, 「大槌町地域復興協議会運営規則」(2018年1月3日取得, [http://www.town.otsuchi.iwate.jp/gyosei/reiki/reiki\\_honbun/b800RG00000657.html](http://www.town.otsuchi.iwate.jp/gyosei/reiki/reiki_honbun/b800RG00000657.html)).
- 大槌町, 2011c, 「大槌町東日本大震災津波復興計画 基本計画」(2016年1月12日取得, <http://www.town.otsuchi.iwate.jp/docs/2012021500290/files/fukkoukihon.pdf>).
- 大槌町, 2012a, 「第1回吉里吉里地域復興まちづくり協議会」(2017年10月25日取得, <http://www.town.otsuchi.iwate.jp/gyosei/docs/2012111600015/files/20120620kirikiri.pdf>).
- 大槌町, 2012b, 「第2回吉里吉里地域復興まちづくり協議会」(2017年10月25日取得, [http://www.town.otsuchi.iwate.jp/gyosei/docs/2013112800084/files/02\\_121108kirikiri2.pdf](http://www.town.otsuchi.iwate.jp/gyosei/docs/2013112800084/files/02_121108kirikiri2.pdf)).
- 大槌町, 2012c, 「吉里吉里・浪板地域復興まちづくり個別相談会について(ご案内)」(2018年1月3日取得, <http://www.town.otsuchi.iwate.jp/gyosei/docs/2012112100019/>).
- 大槌町, 2013a, 「第1回吉里吉里地域の将来を考える会(吉里吉里地域復興協議会)」(2018年1月2日取得, [http://www.town.otsuchi.iwate.jp/gyosei/docs/2013112200020/files/kirikiri\\_s1.pdf](http://www.town.otsuchi.iwate.jp/gyosei/docs/2013112200020/files/kirikiri_s1.pdf)).
- 大槌町, 2013b, 「第3回吉里吉里地域の将来を考える会(吉里吉里地域復興協議会)」(2018年1月2日取得, [http://www.town.otsuchi.iwate.jp/gyosei/docs/2013112200020/files/kirikiri\\_s3.pdf](http://www.town.otsuchi.iwate.jp/gyosei/docs/2013112200020/files/kirikiri_s3.pdf)).
- 大槌町, 2013c, 「吉里吉里中で郷土芸能を披露～歩み出した「ふるさと科」」(2018年1月2日取得, <http://www.town.otsuchi.iwate.jp/gyosei/docs/2013071100027/>).
- 大槌町, 2013d, 「吉里吉里地区の復興まちづくり第1号」(2018年1月2日取得, <http://www.town.otsuchi.iwate.jp/gyosei/docs/2013080700034/files/kirikiri01.pdf>).
- 大槌町, 2013e, 「吉里吉里地区復興計画ワークショップの開催」(2018年1月2日取得, <http://www.town.otsuchi.iwate.jp/gyosei/docs/2013092700022/>).
- 大槌町, 2013f, 「吉里吉里、赤浜、安渡で安全祈願祭～全町で復興工事本格化へ」(2018年1月2日取得, <http://www.town.otsuchi.iwate.jp/gyosei/docs/2013110500030/>).
- 大槌町, 2014a, 「大槌町政要覧」.
- 大槌町, 2014b, 「第5回吉里吉里地域の将来を考える会」(2018年1月2日取得, [http://www.town.otsuchi.iwate.jp/gyosei/docs/2013112200020/files/hukkokyougikai\\_kirikiri\\_5.pdf](http://www.town.otsuchi.iwate.jp/gyosei/docs/2013112200020/files/hukkokyougikai_kirikiri_5.pdf)).
- 大槌町, 2014c, 「これまでの吉里吉里地域復興まちづくり懇談会・地域復興協議会資料について」(2018年1月2日取得, <http://www.town.otsuchi.iwate.jp/gyosei/docs/2013112>

[800084/](#)).

大槌町, 2016a, 「大槌町 地方創成総合戦略」.

大槌町, 2016b, 「大槌町 人口ビジョン」.

大槌町, 2017a, 「大槌町復興レポート (平成 29 年 7 月 1 日版)」 (2018 年 1 月 2 日取得, <http://www.town.otsuchi.iwate.jp/gyosei/docs/2016071100035/files/fukkou20170701.pdf>).

大槌町, 2017b, 「東日本大震災人的被災状況 (平成 29 年 7 月 21 日時点)」 (2018 年 1 月 1 日取得, <http://www.town.otsuchi.iwate.jp/gyosei/docs/2012122100023/>).

大槌町, 2017c, 「大槌町東日本大震災津波復興計画実施計画 第 3 期 発展期」 (2018 年 1 月 3 日取得, [http://www.town.otsuchi.iwate.jp/gyosei/docs/2017032700035/files/jissi\\_keikaku.pdf](http://www.town.otsuchi.iwate.jp/gyosei/docs/2017032700035/files/jissi_keikaku.pdf)).

大槌町, 2017d, 「大槌町震災アーカイブ」 (2018 年 1 月 3 日取得, <https://archive.town.otsuchi.iwate.jp/>).

大槌町漁業史編纂委員会, 1983, 『大槌町漁業史』大槌町漁業協同組合, 888-901, 1305-1341.

大槌町史編纂委員会, 1966, 『大槌町史 上巻』岩手県大槌町役場, 1218-1225.

大槌町史編纂委員会, 1984, 『大槌町史 下巻』岩手県大槌町役場, 1448-1469.

大槌町消防団第三分団誌編集委員会, 1998, 『絆・継承 大槌町消防団第三分団八十八年のあゆみ』.

釜石市, 2015, 「復興を内包した「釜石版地域包括ケアシステム」について」 (2018 年 1 月 11 日取得, [http://www.city.kamaishi.iwate.jp/shisei\\_joho/keikaku\\_torikumi/houkatsu\\_care/detail/1198099\\_3048.html](http://www.city.kamaishi.iwate.jp/shisei_joho/keikaku_torikumi/houkatsu_care/detail/1198099_3048.html)).

吉里吉里地区自主防災計画策定検討会, 2016, 『大槌町吉里吉里地区自主防災計画 ～津波からの避難について～』.

経済産業省, 2013, 「中小企業組合等共同施設等災害復旧事業」 (2017 年 4 月 23 日取得, [http://www.meti.go.jp/main/yosan2013/pr/pdf/hukkyu\\_01.pdf#page=12](http://www.meti.go.jp/main/yosan2013/pr/pdf/hukkyu_01.pdf#page=12)).

国土交通省国土地理院, 「地理院タイル一覧」, (2018 年 1 月 17 日取得, <http://maps.gsi.go.jp/development/ichiran.html#ort>).

総務省, 2014, 「平成 25 年度過疎地域等自立活性化推進交付金の交付決定」 (2018 年 1 月 19 日取得, [http://www.soumu.go.jp/menu\\_news/s-news/01gyosei10\\_02000020.html](http://www.soumu.go.jp/menu_news/s-news/01gyosei10_02000020.html)).

総務省, 2017, 「地域自治組織のあり方に関する研究会報告書」.

総務省統計局, 「国勢調査結果」.

東北地方整備局, 2016, 「復興道路・復興支援道路の開通見通しが「約 9 割」確定」 (2018 年 1 月 3 日取得, [http://www.thr.mlit.go.jp/road/fukkou/images/road/pdf/161028\\_kaitukisya.pdf](http://www.thr.mlit.go.jp/road/fukkou/images/road/pdf/161028_kaitukisya.pdf)).

内閣府, 「復興支援型地域社会雇用創造事業」 (2017 年 4 月 23 日取得, <http://www5.cao.go.jp/keizai/koyou/fukko/fukko.html>).

内閣府, 2012, 「東日本大震災、吉里吉里小学校の避難所運営の実態と教訓 (佐藤良)」(2017年1月4日取得, [http://www.bousai.go.jp/taisaku/hinanjo/h24\\_kentoukai/2/pdf/4.pdf](http://www.bousai.go.jp/taisaku/hinanjo/h24_kentoukai/2/pdf/4.pdf)).

内閣府, 2017, 『平成29年版防災白書 熊本地震を踏まえた防災体制の見直し』.

農林水産省, 2010, 「2008年漁業センサス」.

農林水産省, 2015, 「2013年漁業センサス」.

はまぎく若だんな会 砂の芸術祭実行委員会 「砂の芸術祭2014 in 吉里吉里海岸 報告書」.

復興庁, 「復興庁の役割」(2018年1月6日取得, <http://www.reconstruction.go.jp/topics/main-cat12/yakuwari.html>).

復興庁, 2015a, 『復興4年間の現状と課題』.

復興庁, 2015b, 「集中復興期間の総括及び平成28年度以降の復旧・復興事業のあり方について」(2018年1月6日取得, <http://www.reconstruction.go.jp/topics/20150602160747.html>).

#### 論文・書籍等

Edward Relph, 高野岳彦・阿部隆・石山美也子訳, 1999, 『場所の現象学』, 筑摩書房.

J.P.サルトル, 伊吹武彦訳, 1955, 『実存主義とは何か』, 人文書院.

Nii, A., 2017, “Process and challenges of the town reconstruction planning and spatial design using the local resident’s collaboration style –Base on the experience at Kirikiri district, Otsuchi town, Iwate prefecture,” *Journal of JSCE*, 5 : 256-268.

Rebecca Solnit, 高月園子訳, 2010, 『災害ユートピア なぜそのとき特別な共同体が立ち上がるのか』, 亜紀書房.

秋道智彌, 2012, 「大槌との出会いから「つながり」の未来へ」『HUMAN』2 : 62-67.

浅川達人, 2012, 「東日本大震災復興支援活動と地域再生—岩手県大槌町吉里吉里地区を事例として—」『学術の動向』17(10) : 70-75.

浅川達人, 2016, 「「実験室」としての津波被災地 : 災害リスクはコミュニティに共同性を創出し得るか (特別推進プロジェクト 大災害と社会 : 東日本大震災の社会的影響と対策の課題)」『研究所年報』46 : 109-118.

浅川達人, 2017, 「東日本大震災津波被災地の25年後の姿—人口分析&予測プログラムによる考察—」, 『研究所年報』47 : 159-168.

新井信之・戸村達彦・三矢勝司・浜口祐子, 2015, 「コミュニティ非継続型仮設住宅における自治の形成過程」『日本建築学会計画系論文集』80(716) : 2183-2190.

岩崎美智子, 2013, 「支援者であり、被災者でもあった—津波に遭った保育士とボランティア保育士の経験—」『日本オーラル・ヒストリー研究』9 : 64-80.

岩本由輝, 1968, 「近世中期の盛岡藩における特権商人の推移とその基盤——盛岡藩吉里吉

- 里村前川家を中心に―』『研究年報経済学』29(1) : 61-79.
- 植田今日子, 2013, 「なぜ大災害の非常事態下で祭礼は遂行されるのか ―東日本大震災後の「相馬野馬追」と中越地震後の「牛の角突き」―』『社会学年報』42 : 43-60.
- 宇佐美龍夫, 2003, 『最新版 日本被害地震総覧 [416]-2001』東京大学出版会.
- 浦田真由・安田孝美, 2012, 「地域コミュニティにおける ICT の利活用とその役割 : 地域情報発信のための ICT」『情報文化学会誌』19(2) : 18-25.
- 岡村健太郎, 2014, 「昭和三陸後の岩手県大槌町吉里吉里地区集落の復興に関する研究 農山漁村経済更生運動と復興計画の関連」『日本建築学会論文集』79(698) : 1045-1054.
- 岡村健太郎, 2017, 『「三陸津波」と集落再編 ポスト近代復興に向けて』鹿島出版会.
- 影浦峯, 1998, 「言語における共時性と通時性」『学術情報センター紀要』10 : 23-27.
- 川島秀一, 2011, 「浸水線に祀られるもの--被災漁村を歩く(上)(特集 東北の海--東日本大震災(2))」『季刊 東北学[第2期]』29 : 27-37.
- 菊池義浩・麦倉哲・南正昭, 2015, 「被災地における自主防災計画づくり支援と防災まちづくりへの展開 ―大槌町吉里吉里地区の事例―」『農村計画学会誌』33(4) : 422-424.
- 栗岡幹英, 1993, 『役割行為の社会学』世界思想社.
- 後藤智香子・後藤純・小泉秀樹・成瀬友梨・猪熊淳・似内遼一, 2015, 「岩手県陸前高田市「りくカフェ」における住民主体の介護予防事業の意義」『日本都市計画学会 都市計画論文集』50(3) : 1180-1187.
- 小泉秀樹, 2015, 「復興とコミュニティ論再考 連携協働復興のコミュニティ・デザインに向けて」, 似田貝香門・吉原直樹編, 2015, 『震災と市民 I 連帯経済とコミュニティ再生』東京大学出版会, 159-181.
- 坂口奈央, 2016, 「防潮堤の高さをめぐる住民の論理―岩手県大槌町赤浜地区の蓬莱島を焦点に―」『第89回日本社会学会発表資料』.
- 佐々木優希・吉田みゆき・広田純一・三宅諭・原料幸爾・若菜千穂・吉村彩, 2012, 「震災復興期間における分散居住の実態とコミュニティの維持・変容 ―岩手県田野畑村島越・羅賀地区の2011年8-12月調査に基づいて―」『農村計画学会誌』31 : 399-404.
- 佐々木優希・広田純一・和田風人, 2013, 「東日本大震災後の被災町内会の現状と課題 ～岩手県釜石市における2012年8月～2013年1月調査に基づいて～」『農村計画学会誌』32 : 203-208.
- 澤田昭雄, 1992, 「補完性原理 The Principle of Subsidiarity:分権主義的原理か集権主義的原理か?」『日本 EC 学会年報 1992』12 : 31-61.
- 清野幾久子, 2016, 「解題」, 福田徳三研究会, 2016, 『福田徳三著作集 第十七巻 復興経済の原理及び若干問題』信山社, 97-111.
- 園田千佳・坂本慧介・石川幹子, 2013, 「復興まちづくりの計画策定プロセスにおける住民ワークショップの役割に関する研究―宮城県岩沼市における復興まちづくりを通して―」『公益社団法人日本都市計画学会 都市計画論文集』48(3) : 849-854.

- 高松洋子, 2015, 「吉里吉里地区避難行動調査と犠牲者調査に見る、生死をわけた行動の分類」『弘前大学大学院地域社会研究科年報』11: 79-93.
- 竹沢尚一郎, 2013, 『被災後を生きる—吉里吉里・大槌・釜石奮闘記』中央公論新社.
- 中井祐, 2013, 「大槌町における住民主体の復興まちづくり」『新都市』67(11): 67-69.
- 中井祐, 2014, 「大槌町の復興における各地区空間計画 —大槌デザイン会議の試み—」『景観・デザイン講演集』10: 290-292.
- 中村吉治・守屋嘉美, 1966, 「近世後期の商品流通—南部領内吉里吉里村前川家を中心にして—」『研究年報経済学』28(1): 15-35.
- 西山志保, 2008, 「多様なボランティアが切り開く新たな市民社会」, 似田貝香門編, 2008, 『自立支援の実践知: 阪神・淡路大震災と共同・市民社会』東信堂, 47-75.
- 似田貝香門, 2008a, 「再び『共同行為』へ—阪神・淡路大震災の調査から」似田貝香門編, 2008, 『自立支援の実践知: 阪神・淡路大震災と共同・市民社会』東信堂, 31-45.
- 似田貝香門, 2008b, 「〈ひとりの人として〉を旨とする支援の実践知」, 似田貝香門編, 2008, 『自立支援の実践知: 阪神・淡路大震災と共同・市民社会』東信堂, 249-323.
- 似田貝香門編, 2008, 『自立支援の実践知: 阪神・淡路大震災と共同・市民社会』東信堂.
- 似田貝香門・吉原直樹編, 2015, 『震災と市民 I 連帯経済とコミュニティ再生』東京大学出版会.
- 長谷部俊治, 2017, 「原発事故被災からの回復のための政策課題」『サステナビリティ研究』7: 77-101.
- 林敏彦, 2013, 「震災復興の論理—新自由主義と日本社会—災害ユートピアが消えた後」『学術の動向』18(10): 64-67.
- 深井祐紘・大月敏雄・北原玲子・井本佐保里・朴晟源・篠本快・栗野悠, 2012, 「コミュニティと掲示板の管理との関係に関する考察—仮設住宅における掲示板に関する調査研究—」『都市住宅学』79: 94-98.
- 福島秀哉・中井祐, 2017, 「復興事業の公共空間デザインの役割と課題 —岩手県上閉伊郡大槌町町方地区の街路・公園デザインの検討過程から—」『景観・デザイン研究講演集』13: 52-61.
- 福田徳三, 1912, 「欧州の戦後経済と日本の復興経済=倒るることの過大観、興ることの過小観=」, 福田徳三研究会, 2016, 『福田徳三著作集 第十七巻 復興経済の原理及び若干問題』信山社, 23-35.
- 福田徳三, 1912, 「営生機会の復興を急げ」, 福田徳三研究会, 2016, 『福田徳三著作集 第十七巻 復興経済の原理及び若干問題』信山社, 97-111.
- 福田徳三研究会, 2016, 『福田徳三著作集 第十七巻 復興経済の原理及び若干問題』信山社.
- 松井克浩, 2008, 『中越地震の記憶 人の絆と復興への道』高志書院.
- 三浦倫平, 2016, 『「共生」の都市社会学 下北沢再開発問題のなかで考える』新曜社.

宮下克也, 2008, 「記憶の覚醒と地域づくり : 沖縄の都市近郊の事例から」『哲學』119: 233-256.

麦倉哲, 2015, 「大災害犠牲者の記録を残す活動の社会的意義に関する研究 —岩手県大槌町「生きた証プロジェクト」を事例として—」, 『岩手大学教育学部年報』75: 31-47.

室崎益輝, 2015, 「減災・復興と都市計画・まちづくり」, 似田貝香門・吉原直樹編, 2015, 『震災と市民 I 連帯経済とコミュニティ再生』東京大学出版会, 119-138.

矢部明宏, 2012, 「地方分権の指導理念としての「補完性の原理」」『レファレンス』62(9): 5-24.

山口彌一郎, 1943, 『津浪と村』恒春閣書房.

吉原直樹編, 2008, 『防災の社会学—防災コミュニティの社会設計に向けて[第二版]』東信堂.

#### その他 Web ページ及び新聞記事等

岩手日報 2016 年 7 月 30 日 「高台団地整備、最長で 1 年半遅れ 大槌・赤浜地区」.

NHK, 2015, 「東日本大震災アーカイブス～証言 Web ドキュメント～」(2017 年 1 月 4 日取得, <http://www9.nhk.or.jp/archives/311shogen/link/program1.html>).

毎日新聞 2017 年 2 月 20 日 「東日本大震災ボランティア、阪神下回る延べ 152 万人」

毎日新聞 2017 年 3 月 23 日 「東日本大震災 6 年 防潮堤を考える＝山崎征克 (東京社会部)」.

赤浜ロックンロール, トップページ (2017 年 10 月 29 日取得, [http://u-picc.com/akahama\\_rocnroll/](http://u-picc.com/akahama_rocnroll/)).

JR 東日本, 2017, 「山田線宮古・釜石鉄道復旧 工事進捗状況」(2018 年 1 月 3 日取得, [https://www.jr-morioka.com/cgi-bin/pdf/news/pdf\\_1514341687\\_1.pdf](https://www.jr-morioka.com/cgi-bin/pdf/news/pdf_1514341687_1.pdf)).

新大槌漁業協同組合, 「アクセス」(2017 年 10 月 30 日取得, <http://jfishinootuchi.jp/about>).

全社協, 2017, 「被災地支援・災害ボランティア情報」(2017 年 9 月 12 日取得, <https://www.saigaivc.com/>).

被災地 NGO 協働センター, 2016, 「2016 熊本地震救援ニュース 2016 年 5 月 15 日付第 28 報」(2016 年 7 月 20 日取得, <http://blog.livedoor.jp/kyodocenter-kumamotojishin/archives/2016-05-15.html>).

## 謝辞

まず、指導教員の清水亮先生には学部時代より大変お世話になりました。

まだ研究が如何なるものかもよくわかっていなかった学部3年生の秋、眠そうな私を地域の現場に引っ張り出してくださったお陰で、こうやって研究するスタイルがあるのかと感動したことをよく憶えています。先生の研究室でなければ大学院に進学しようと決心できませんでしたし、その選択は間違っていなかったと確信しています。最後まで、私の単純な性格を見抜いて、適宜ヒントを与えつつも沢山考える時間を与えてくださったこと、悩みながらも言葉に真摯に向き合い、現場の言葉を手掛かりに私なりの言葉を紡ごうとすることの難しさと面白さを経験させていただけたこと、心より感謝申し上げます。沢山悩み、沢山迷いましたが、振り返ってみれば本当に幸せな修士課程の2年間でした。

副指導の福永真弓先生にも大変お世話になりました。大槌を含めた三陸沿岸の状況に精通しておられる先生からの温かくも鋭い助言は、ハッとさせられることばかりでした。提出直前に先生とお話していて、自分がこの研究を通して言いたかったことを漸くすっきりと見通せてからの数日間は、自分にとって最も真摯かつ前向きに「研究」と向き合うことのできた、忘れられない日々となりました。

清水研同期の野村くん。私と野村くんは、恐らく得意なことも好きなことも正反対だったと思います。でも、そのお陰で色々な相談ができ、野村くんの姿勢から学ぶことも、負けていけないと思うことも、前向きになれることも沢山ありました。向かいの席でともに励まし合いながら修士論文に取り組んだ柴田さん、頼るといことが非常に苦手な私ですが、時々大事なことが抜け落ちている我々2人をフォローしてくださり、ずっと頼りにしておりました。そして様々なアドバイスで視野を広げてくださった博士課程の先輩方や、OB、OGまで含めた研究室の先輩後輩の皆さん。沢山の示唆や励ましを与えてくれた皆さんに囲まれて私は幸せでした。併せて、分野は違えど、相談相手になってくれた文系院生室の皆さんや社文理系の同期にも、何度も助けていただきました。

そして何より、忘れてはならないのが吉里吉里でお会いした皆さんです。皆さんとの出会い、そして温かいサポートがなければ、私は絶対に本稿を書き上げることができませんでした。早く書き上げて皆さんに会いたい、その思いだけで最後は駆け抜けたと思っています。

何度も似たようなお話を伺って、「何の研究をしているの？」という問いにすらなかなかスパッと答えられない不甲斐ない私を、呆れもせず（呆れていらっしやったのかもしれないが……）受け容れ続けてくださったこと、最後まで電話やSNSで励ましてくださったこと、感謝してもしきれません。公民館長のHさん初め、皆々様に心より感謝申し上げます。

中でも、Aさんの「被災者がいつまでも被災者でいるのではなく、「支援者」にならなくては」という言葉が、当時学部4年生の私の心に突き刺さったことが、この研究のすべての始まりでした。Aさんはもちろん、吉里吉里の皆さんの語る言葉が、私は大好きでした。



明治学院大学や早稲田大学、岩手大学の学生の皆さんは、吉里吉里の行事に一人で飛び込んだ私に親しくしてくれ、ともに吉里吉里に足を運ぶ思いを語り合いました。明治学院大学の浅川達人教授、東北大学大学院博士課程の坂口奈央様は、貴重な資料や情報を提供してくださいました。仮設飲食店街のママさんや常連さんは、その地で生きていくことの葛藤と困難さを垣間見せながらも、世間知らずの大学院生を、いつも温かく迎えてくださいました。

学部時代に大槌に足を運ぶ最初のきっかけを作ってくださった東京大学大学院教育学研究科・教育学部の先生方や学生の皆さん、学部を卒業し研究室を離れてからも何かと気にかけていただき、社会学とは異なる観点から貴重な意見をくださった東京大学大学院農学生命科学研究科農業史研究室の先生方や院ゼミの先輩方。院試の時期から、数少ない文系進学組として励まし合ってきた情報学環教育部・学際情報学府の同期や、院試の頃から研究に行き詰まったときまで、様々な助言やお心遣いをくださった教育部の先輩方。最後の最後に校正に付き合ってくれたプチ・レトルやエレクラの皆さん。研究と直接かかわらない側面でも心支えになってくれた家族や友人、学部時代から長い付き合いとなった同期、先輩、後輩にも改めて感謝の気持ちでいっぱいです。

この研究は、2011年3月11日に1人電車で車内泊をした当時高校3年生の私が、葛藤を抱えつつも、「自分は被災者でないのに傷ついているのはおかしい」と、結局何もできずに過ごしてしまったその後の数年間に、正面から向き合いたいという思いで進めてきました。

あんなにすごいことを「当たり前」にやってしまう吉里吉里の皆さんの姿から勉強させていただき、私なりに真摯に向き合ってきたつもりです。吉里吉里の皆さんの姿を追いかけることは、こうありたかった、そして、こうありたいと思う自分の姿を追いかけることでもありました。

この過程に「巻き込まれてくださった」すべての方々に、改めて御礼申し上げます。本当にありがとうございました。

2018年1月22日 湯本 真知